目　　次

序　言 …… 河　添　房　江　3

研究の概要 …… 河　添　房　江　5

研究活動の記録 …… 本　橋　裕　美　8

小学校における古典教育の進め方 …… 古　屋　明　子　12

新しい小学校国語教科書に見る古典学習材の特徴 …… 小　山　進　治　45

小中連繋を意識した古典学習の単元開発 …… 森　　顕　子　57
　　－『万葉集』を中心に－

小中高連繋教材としての『枕草子』 …… 本　橋　裕　美　66

資料・古典作品教科書掲載一覧 …… 麻　生　裕　貴　76
　　小中学校教科書古典作品単元・作品名一覧

序　　言

－本報告書の刊行にあたって－

研究代表者　　河　添　房　江

本報告書は、「小・中・高一貫教育において古典に親しませる教材とその指導法の開発」をテーマとして、２００９年度から２０１１年度まで活動してきた研究会のメンバーから成る報告書である。

子ども達の古典への関心が薄れつつある現代において、小学校における古典教育の機会は大切である。また我々の調査によると、中学校・高校と学齢が上がるにつれて、古典嫌いの生徒が増えていくという現象がある。

２００８年３月に告示された小学校の新学習指導要領の国語では、〔言語事項〕が、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に変化し、児童の発達段階に考慮しながら、古典教材に各学年で触れることが示されている。一層の古典学習の重視が求められる現在、新学習指導要領のねらいに沿った古典の教材や教授法の新たな開発は、今日的な教育課題として急務であると考える。さらに、従来は小・中一貫、あるいは中・高一貫についての研究が多い状況で、小・中・高における古典学習の一貫性を見据えて、三者の連携をはかる必要もあろう。

そうした視野に立って、私の大学院の演習に参加した小・中・高の現職教員を中心に声をかけ、研究組織を立ち上げたのが２００９年の春のことであった。以来、九回の研究会を重ねて、今日に至っている。研究会での議論は活発で、筆者も小・中の古典教材の開発（『はじめて出会う古典作品集』全６巻、光村教育図書）に関わっていた時期でもあり、大いに刺激を受けた。

２０１１年の夏には、東京学芸大学連合学校教育学研究科の広域科学教科教育学研究経費を獲得することが出来たので、この機会にこれまでの研究活動を振り返り、研究会の参加者にはそれぞれの関心に沿って研究成果をまとめていただいた。その結果、小学校での古典教育の指導法、ＩＣＴを活用した「春暁」や『平家物語』の実践報告、『万葉集』の小・中連携や『枕草子』の小・中・高の連携を意識した指導法などを収載することができた。多忙な時期に報告書の原稿を執筆された各位に感謝したい。

また報告書の最後には、「古典作品教科書掲載一覧」「小中学校教科書古典作品単元・作品名一覧」として、小・中・高の各社の教科書に掲載された古典作品の一覧表を付した。48 頁にも及ぶ大部のものとなったが、ご参照いただければ幸いである。

今後もこの研究会の活動は継続していく予定で、特に電子教科書などデジタル教材を活用した古典教育の指導法の開発にも力を入れていく所存である。今後ともよろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げる次第である。

研究の概要

河　添　房　江

１）研究課題

小・中・高一貫教育において古典に親しませる教材とその指導法の開発

２）研究期間

2009 年度～2011 年度

３）補助金

平成 23 年度広域科学教科教育学研究経費　　485,000 円
（東京学芸大学連合学校教育学研究科）

４）研究組織

①　研究代表者　河添　房江（東京学芸大学教育学部・教授）

②　研究分担者　古屋　明子（東京都立石神井高等学校・主幹教諭）

森　　顕子（東京学芸大学附属竹早中学校・教諭）

小山　進治（横浜市立高田小学校・教諭）

③　研究協力者　本橋　裕美（一橋大学大学院言語社会研究科・博士課程）

麻生　裕貴（東京学芸大学大学院教育学研究科・修士課程）

５）研究期間中の公刊書籍・論文

①　研究代表者

・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品集１　土佐日記・枕草子・更級日記・方丈記・徒然草・おくのほそ道』（光村教育図書、2009 年 12 月）

・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品集２　万葉集・古今和歌集・新古今和歌集・百人一首・短歌・俳句』（光村教育図書、2010 年２月）

・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品

集３　落語・狂言・能・歌舞伎・人形浄瑠璃』（光村教育図書、2010 年２月）
・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品集 4 竹取物語・伊勢物語・源氏物語・大和物語・大鏡・堤中納言物語・平家物語・世間胸算用・南総里見八犬伝』（光村教育図書、2010 年 12 月）
・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品集 5 古事記・風土記・今昔物語集・宇治拾遺物語・十訓抄・沙石集・御伽草子・伊曾保物語』（光村教育図書、2010 年 12 月）
・河添房江・高木まさき監修、青山由紀・甲斐利恵子・邑上裕子編集『はじめて出会う古典作品集６　近代小説・近代詩・現代詩・童謡・唱歌・名句・名言・漢詩・漢文・故事成語』（光村教育図書、2010 年 12 月）

②　研究分担者
・古屋明子「『無名草子』における『源氏物語』の罪意識の享受」(『学芸古典文学』第２集、2009 年３月) 94～115 頁
・古屋明子「『とはずがたり』における『源氏物語』の罪意識の受容」(『古代中世文学論考』第 23 集、新典社、2009 年 10 月)187～231 頁
・古屋明子「学習指導案のつくり方」（『教職課程』第 37 巻第３号、2011 年３月）104～109 頁
・古屋明子「上田秋成における「『源氏物語』の罪意識」の受容」(『学芸国語国文学』第 43 集、2011 年３月)102～118 頁
・森　顕子「小中をつなぐ古典学習の提案（１）―和歌(『万葉集』)・『竹取物語』を事例として」（『東京学芸大学附属竹早中学校研究紀要』第 47 号、2009 年６月）
・森　顕子「『万葉集』における単元開発―小中連携を意識した単元と導入単元の工夫―」（『学芸国語教育研究』第 27 号、2009 年 12 月）２～９頁
・森　顕子「『万葉集』の単元開発と実践―古典の魅力を引き出す単元―」（国語教育実践理論研究会編『研究紀要』第 18 号、2010 年４月）37～44 頁
・森　顕子「『万葉集』の単元開発を支える教材研究―大伴家持を導入単元とした例―」（国語教育実践理論研究会『飛田多喜雄先生に学ぶ』溪水社、2010 年７月）217～226 頁
・森　顕子「『論述』をまとめに位置づけた和歌の学習―三大和歌集を自分の言葉で表現―」（『月刊悠＋』ぎょうせい、第 27 巻 12 号、2010 年 12 月）26～27 頁
・森　顕子「『万葉集』の単元開発と実践」（『学芸国語国文学』第 43 号、2011 年３月）
・森　顕子・井上善弘（教材作成助言者）『最新版　国語教材　小学校版・中学校版　古典の音読、暗唱ポスター』（全教出版、2011 年３月）
・森　顕子「「万葉集」中学校・古典の「読むこと」の編成的研究モデル」（国語教育実践理論研究会『新提案　教材再研究　循環し発展する教材研究～子どもの読み・子どもの学びから始めよう～』東洋館出版社、2011 年７月）55～62 頁
・森　顕子「中学年 短歌・百人一首に親しむ」（植松雅美編著『小学校国語　みんなで親しむ「伝統的な言語文化」―作品のイメージを育む授業づくり―』東洋館出版社、2011 年９月）54

～59 頁

・小山進治「小学校中学年における古典教育の在り方―小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導研究―」『横浜市一般派遣研究生報告書』（2009 年 3 月）

・植松雅美編『絵図で読み解き、思考力・表現力をつける国語科授業』（東洋館出版社、 2009 年 7 月）小山進治分担執筆

・小山進治「小学校中学年における古典教育の在り方―小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導研究―」（「月刊国語教育研究」、2009 年 8 月）58～65 頁

・大熊徹・藤田慶三編『『伝統的な言語文化』の授業ガイド』（東洋館出版社、2009 年 8 月）小山進治分担執筆

・小山進治「音読発表会を開いて、古典の世界に親しもう」（『横浜版　学習指導要領　指導資料国語科編』ぎょうせい、2010 年 2 月）180～185 頁

・小山進治「国語科の授業力の向上をめざして―授業の構想、実践、そして評価―」（「東京学芸大学国語教育学会研究紀要」第 9 号、2011 年 2 月）15～20 頁

研究活動の記録

本　橋　裕　美

第１回　研究会

日時：　2009 年７月 20 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　小山進治「小学校中学年における古典教育の在り方～小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導教育～」

内容：新指導要領（平成 20 年 3 月告示）における「伝統的な言語文化」の導入を前に、古典と「出合う」ことを目的とした小学校の古典教育の可能性を巡る研究と実践。研究では、世田谷区での特設教科「日本語」の実践例や中学校との連繋を見据えた東京学芸大学附属学校の取り組みなどから、「伝統的な言語文化」の方向性について述べている。実践では、古文・漢文、ことわざ、俳句という３つの単元の授業を通して、児童がどのように古典と「出合う」かを、実態に即して把握している。音読だけでなく、日常生活と結びつく活動、活用を通して、「伝統的な言語文化」を身近なものとして理解させることで、古典という学習材に、大きな可能性があるとする。

第２回　研究会

日時：　2009 年８月 22 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　森顕子「『万葉集』の単元開発」

内容：　中学校における古典教育の教材の中から、特に『万葉集』を取り上げ、教材としての魅力、意義を検討し、実践例を踏まえて、和歌を通じた古典教育の在り方について考えるという修士論文に向けての中間報告。実践授業報告が中心だが、目次等、修士論文の全体像に関わる発表。実践授業は、東京学芸大学附属竹早中学校で実際に行われた授業で、詳細な授業内容だけでなく、生徒や参観者によるその後のアンケートと検討が行われており、充実した資料が付されている。『万葉集』の作品を背景とともに読み込み、テーマ別学習の題材として扱うことで、古典の楽しさと深い理解に繋げていくというレポーターの研究目的が明確に示されている。

第３回　研究会

日時：　2009 年 11 月７日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　森顕子「中学校における『万葉集』の単元構想と実践」

内容：　「中学校における『万葉集』の単元構想と実践」というテーマで修士論文を書くにあたっての目的意識に関わる発表。特に、序章では「研究主題設定の理由」として、和歌が一つ一つ完結した教材であること、『万葉集』の技巧の少なさが生徒の理解のために有効であることを挙

げ、中学校における古典教育の中核となりうる『万葉集』教材として位置づけた。また、その教材の扱いとして、発表者のオリジナリティである「歴史的背景を踏まえて読む」ことの意義についての確認がされた。前回からの課題であった『万葉集』の読みに関わる先行研究についても提示があった。また、同じく課題であった戦前からの『万葉集』教材の変遷についても、先行研究をもとに検討された。

第４回　研究会

日時：　2009 年 12 月 20 日

参加者：河添房江、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　森顕子「『万葉集』の単元構想と実践」

内容：　前回の報告から変更した部分を中心とした発表。発表者の対象が「中学校」であることを受けて、発表者の研究が古典教育という面で、また学習指導要領から見て、どのような意義があるかを示した。新学習指導要領では、古典が小学校にも導入されることから、中学校でいかに新しい古典学習を行うかという点において、歌の背景を知るところから理解を進めるという発表者の研究には、特に大きな意義があるとする。第二章については、単元の詳細な内容とその読み取りについて目指すことが示され、第三章への繋がりが見える発表だった。

第５回　研究会

日時：　2010 年２月 11 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告Ⅰ：森顕子「参観授業計画の報告」

内容：　2010 年２月８日～３月 15 日に行われる附属小金井中学校での「フィールド研究 B：授業参観」についてのプレ発表。中学二年生を対象とした「海鳥単元（『かもめのジョナサン』『リトルターン』）・プレ『万葉集』」についての授業計画などを元にした報告で、詩を中心とした教材から、イメージを広げること、詩と物語との行き来の結果イメージを再構成することなどを目標として単元が設定されていた。合わせて、やや幼い生徒の実態についても説明があった。また、「海鳥単元」に発表者の研究主題と関わる「プレ『万葉集』」を合わせており、現代詩の授業と古典の韻文の授業との連繋の可能性を見出す計画といえる。

報告Ⅱ：小山進治「高学年における「伝統的な言語文化」の指導計画案」（「音読発表会を開いて、古典の世界に親しもう！」）

内容：　小学校高学年における「伝統的な言語文化」の授業の提案についての報告ののち、その授業風景を収めたＤＶＤをもとに質疑を行った。発表者の提案する授業は、古典の音読を中心としたものであり、教材として『枕草子』『竹取物語』『春暁』を扱う。ただ声に出して読むだけでなく、古文で書かれた作品の大体の内容を理解し、イメージしながら音読することを目標に置く。ＤＶＤに収められた授業は、五時間計画の中の二時間目にあたり、『枕草子』「春はあけぼの（秋・冬）」の内容理解と音読を通して「古典の世界に親しむ」ことを目標とする。「秋は○○」とふせられた冒頭を巡って、児童が想像をふくらませ、自分の考えや根拠を述べながら正解を探ってい

ったり、「冬はつとめて」と示された言葉の意味を巡って、同様に発表を重ねていったりする授業運び。間に音読を繰り返し行い、全体読みや自分のペースでの読みを入れていた。また、「おもしろいなと思った言葉」を発表させて古文への興味を児童に持たせたり、写真などを取り入れて具体的な情景を想像させたりするなどの工夫があった。

第６回　研究会

日時：　2010 年８月 25 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　森顕子「『古今和歌集』『新古今和歌集』の世界に誘う―桜の和歌を通して（中学三年生）」

内容：　2010 年 10 月 23 日に行われる公開授業についてのプレ発表。中学校における三大和歌集の扱いを確認した上で、三大和歌集をいくつかの単元に分けて学習する授業を展開する予定。これまでの森氏の授業実践として、『万葉集』を中心とした小単元を重ねて大単元とする和歌の学習がある。今回の『古今和歌集』『新古今和歌集』をめぐっては、既習である『万葉集』で学んだ修辞法や和歌の読み方を更に発展させる形で、紀貫之などの作者や「桜」といった複数の和歌に共通する主題に焦点をあてて小単元を設計している。また、合わせてこれまでの授業を生徒がまとめた「記録ノート」の提示もあった。

第７回　研究会

日時：　2010 年 12 月 19 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美

報告：　小山進治「小学校古典先行実践」

内容：　横浜市小学校国語教育研究会学年部会提案資料の「古典通信」を通して、小学校での古典教育の理論編から実践編まで、具体的な事例も豊富に提示された。

第８回　研究会

日時：　2011 年５月 15 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、本橋裕美、坂倉貴子

報告：　古屋明子「与謝野晶子における『源氏物語』の罪意識の受容」

内容：　明治～昭和初期にかけて、『源氏物語』の口語訳を手がけた与謝野晶子について、「罪意識」の観点からその思想を検討する。「罪意識」を見るにあたって、発表者の研究の蓄積である『源氏物語』の罪意識に関わる言葉（罪・心の鬼・そら恐ろしなど）が『新新訳』でどう口語訳されるかを辿り、少なくとも罪障意識については古注釈等を参考にした堅実な訳が施されていることを確認した。更に与謝野晶子論として、『みだれ髪』や『源氏物語礼讃』、その他の評論感想集についても研究対象として、罪意識、更には晶子が『源氏物語』そのものをどう捉えていたかという問題にも踏み込む発表だった。

第９回　研究会

日時：　2011 年 7 月 24 日

参加者：河添房江、古屋明子、森顕子、小山進治、本橋裕美，吉野誠

報告：　小山進治「小学校における伝統的な言語文化の授業創り～豊かで楽しい古典学習をめざして～」

内容：　新指導要領に登場した「伝統的な言語文化」によって小学校に導入される本格的な古典学習について、自身の実践をもとに提案が行われた。ＩＣＴ（情報通信機器）を活用し、「小学校だからこそ味わえる豊かで楽しい古典学習」を提案する。第五学年「竹取物語」「春はあけぼの」、第六学年「春暁」「平家物語」を、デジタル教科書を活用しながら、特に音読を中心として学習させる。デジタル教科書の良さである視覚的な訴えを利用したり、漢詩の学習では中国語の発音を聞いたりするなど、古典との出合い、入り口である小学校ならではの「楽しさ」に重点を置く授業を展開した実践報告。

小学校における古典教育の進め方

古　屋　明　子

１．はじめに

(１) 小学校における古典教育導入の背景

まず、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成 16 年 2 月）では、

・古典は、情緒力を身に付け、豊かな人間性を形成するうえでも重要なものである。現在以上に、古典に触れることのできる授業の在り方が望まれる。

・日本の文化として、これまで大切に継承されてきた古典については、日本語の美しい表現やリズムを身に付けるうえでも音読したり暗唱したりすることがふさわしい。

・音読や暗唱を重視して、それにふさわしい文章を小学校段階から積極的に入れていくことを考えるべきである。

とあり、これが新学習指導要領における小学校段階からの古典教育の導入につながっている。

次に、中央教育審議会審議経過報告（平成 18 年 2 月）では、

・子どもが古典や名作に触れ我が国の言語文化に親しむ機会とすることも重要である。

・国語教育は、我が国の文学や言語文化を継承・発展させるという大きな使命がある。

とあり、古典に触れる機会の拡大が求められている。

これらの答申や報告は、裏を返せば、戦後の急速な欧米化に伴い、日本のよき伝統や情緒、風習が失われつつあり、現代における伝統文化の継承と創造の重要性が叫ばれていることになる。また、昔は、家庭の高齢者や地域の年配者から、毎日の生活や地域の行事等を通じて、伝統文化が自然な形で伝えられてきた。しかし、それらの機会も激減した現代では、児童期の学校教育において意図的に伝統文化に触れさせていかなければならないということも示唆している。

これらを受けて、教育基本法（平成 18 年 12 月）や学校教育法（平成 19 年 6 月）が改正され、その中に、改めて「伝統」と「文化」の尊重という方針が示された。

【教育基本法】

・我々は、（中略）伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。（前文）

・伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、

他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。（第 2 条-5）

【学校教育法】

・我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。（第 21 条-3）

日本の教育の基本的姿勢を示す２法において、学校教育で、自国の伝統文化の継承と創造を通して、国と郷土を愛し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことが明示された。これらは、伝統文化の継承と創造における家庭や地域の教育力不足を、学校教育で確実に補うことを示唆しており、そういう意味でも、学校教育の初期である小学校教育は重要になってくる。

そして、新学習指導要領作成の基本的な考え方を示した、中央教育審議会答申「幼稚園・小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成 21 年 1 月）では、

・国語科では小学校の低・中学年から、古典等の暗唱により言葉の美しさや、リズムを体感させた上で、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文等の古典や物語、詩、伝記民話等の近代以降の作品に触れ、理解を深めることが重要である。

とあり、特に、国語科においては、言語の体感による古典等の理解ということが示された。

(２) 新学習指導要領にみられる小学校の古典教材とその指導

平成 20 年３月告示の新学習指導要領では、今までの〔言語事項〕に替わって、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設され、小・中学校の義務教育９年間を通じて、言語文化としての古典教育を系統的に、かつ、多様に行う方向性が示された。小学校と中学校の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)のア伝統的な言語文化に関する事項を、以下に引用する（注１）。

～小学校～

〔第１学年及び第２学年〕

（ア）昔話や神話・伝承等の本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

〔第３学年及び第４学年〕

（ア）易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

（イ）長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語等の意味を知り、使うこと。

〔第５学年及び第６学年〕

（ア）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を

知り、音読すること。
（イ）古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。
～中学校～
〔第１学年〕
（ア）文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。
（イ）古典には様々な種類の作品があることを知ること。
〔第２学年〕
（ア）作品の特徴を生かして朗読する等して、古典の世界を楽しむこと。
（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思い等を想像すること。
〔第３学年〕
（ア）歴史的背景等に注意して古典を読み、その世界に親しむこと。
（イ）古典の一節を引用する等して、古典に関する簡単な文章を書くこと。

これらを見ると、小学校の古典教材例として、低学年は昔話や神話・伝承、中学年は短歌や俳句、ことわざや慣用句・故事成語、高学年は古文や漢文、近代以降の文語調の文章、古典について解説した文章を挙げている。また、児童の学習活動例として、低学年は読み聞かせを聞くことや発表、中学年は音読や暗唱、高学年は音読や読むことを挙げている。古典に触れる最初の段階として、小学校では、音読や暗唱、また、ことわざ等の身近な古典の使用、昔の人のものの見方や感じ方を読むこと等を通して、まず「伝統的な言語文化」である古典に親しませることが重要視されていることが分かる。

(３) 小学校における古典教材とその指導

青山由紀氏は、小学校の古典教育のねらいについて、次のように述べている。

小学校で古典に触れさせ、言語文化に親しませるのには、四つの理由が考えられる。

①日本語特有のリズムや語感を体感させるため。
②言語文化（時代をこえて語り継がれ、よみ継がれていること）に気づかせるため。
③言葉を通して日本の文化を理解させるため。
④既存の知識に照らしたりつなげたりして、内容を理解する面白さを味わわせるため。

（中略）②以下のねらいに合った教材の充実を図り、よりバランスの良い教材と指導法が開発されるべきである（注２）。

また、小山進治氏は、1999～2008 年の小学校古典の実践論文を整理した中で気ついた点として、次の５点を挙げた上で、響きを味わう言語面とともに、豊かな内容面を大切にして古典と出会わせること、小中一貫の系統性を考えた上での教材の扱いと指導法の開発を行うこと、という２点を小学校の古典教育の課題として挙げている（注３）。

① 古文や漢文を原文（文語文）で音読する活動は、小学校国語科でも十分可能である。
② 発達段階を考えると、原文（文語文）との出会いは中学年ぐらいからが適当である。
③ 日常生活の言語活動から、古典の入り口になる七五調等の表現は見つけられる。
④ 古典の内容としてのおもしろさや豊かさに気がつくような単元開発が必要である。
⑤ 古典の内容的な関心への高まりが、中学校国語科での古典教育の充実につながる。

以上から小学校における古典教育を考えると、低学年では身近な七五調の表現の音読から始めてリズムや語感を体感させ、中学年では文語文を読み内容のおもしろさを通して言語文化に気づかせ、高学年では様々な古典における内容の豊かさを読み味わうことを通して日本文化を理解させることが望ましい。

中学校の教材や指導法をそのまま取り入れて、小学校で早期教育をするのではなく、ごく自然な形で、小学生に身近な伝統、日本文化に気づかせていきたい。

そのためには、教材とその指導法が重要であるが、まず、小学校６年間における新教科書の古典教材や開発教材、そして、それぞれの言語活動について述べる。

２．小学校学年別「伝統的な言語文化に触れる」教材と言語活動例

前出の小山氏の「小・中学校における古典学習系統表～９年間の古典入門指導計画～」（注４）を参考に、小学校６年間の教科書教材（出版社）・開発教材と言語活動例について述べる。

＊光村図書を光村、教育出版を教出、東京書籍を東書、三省堂を三省と省略した。

学年	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ア伝統的な言語文化に関する事項	教材	言語活動例
第１学年	（ア）昔話や神話・伝承等の本や文	●昔話「むかしばなしがいっぱい」（光村１年上）、☆「おはなしのくに」（教出１年上）、「むかしばなしをたのしもう」（東書１年下） ●童謡☆「花咲爺」「一寸法師」「桃太郎」「浦島太郎」	○歌唱 ○読み聞かせ ○音読 ○お話の紹介 ○昔話

	章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。		比べ ○紙芝居作り等
第２学年		●神話☆「いなばの白うさぎ」（光村２年上）、「いなばのしろうさぎ」（教出２年上） ●伝説・神話☆「でいだらぼっち」「いなばの白うさぎ」「やまたのおろち」「海さち山さち」（東書２年上） ●童謡☆「大黒様」 ●覚え歌「おばあちゃんに聞いたよ」（東書２年下） ●古典の世界「昔話を知ろう」「『遊び』の昔」（学びを広げる三省２年）	○歌唱 ○読み聞かせ ○音読 ○お話作り ○ペア読書等
第３学年	（ｱ）易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたりリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 （ｲ）長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語等の意味を知り、使うこと。	● 声に出して楽しもう「短歌、俳句」（光村３年上下） ●俳句に親しもう（東書３年下） ●俳句に親しむ（教出） ●かるた（光村３年下） ●☆慣用句を使ってみよう（東書３年上） ●古典の世界「絵巻物を知ろう」「『食事』の昔」（学びを広げる三省３年）	○音読・暗唱発表会 ○視写 ○かるた作り ○なりきり音読等
第４学年		● 声に出して楽しもう「俳句、短歌」（光村４年上下） ●☆俳句づくりに親しもう ●「ことわざブック」を作ろう（光村４年下）（東書４年上） ●「百人一首」を声に出して読んでみよう（東書４年下） ●故事成語（教出） ●古典の世界「落語を知ろう」「『着物』の昔」（学びを広げる三省４年）	○音読・暗唱発表会 ○視写 ○俳句作り ○ことわざブック作り ○辞書の活用 ○子ど

			も寄席等
第5学年	（ｱ）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 （ｲ）古典について解説して文を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。	●声に出して楽しもう☆「竹取物語」「枕草子」「平家物語」（光村５年前）、 ●古文を声に出して読んでみよう「竹取物語」「徒然草」「平家物語」（東書５年上） ●古文に親しもう「枕草子」（東書５年下） ●『論語』（光村５年後） ●漢文に親しむ（教出） ●詩を楽しもう「われは草なり」（光村５年前） ●古典の世界「徒然草」第百九段（光村５年後） ●古典の世界「能・狂言を知ろう」「『住まい』の昔」（学びを広げる三省５年）	○音読発表会 ○視写 ○短歌作り ○能・狂言鑑賞会等
第6学年		●「伝えられてきたもの」「狂言柿山伏」「柿山伏について」（光村６年前） ●日本語のひびきを味わう「春はあけぼの」（教出） ●漢文を読んでみよう☆『論語』「春暁」（東書６年上） ●声に出して楽しもう「天地の文」（光村６年後） ●伝えよう、大切にしたい名言（東書６年下） ●古人のおくり物「狂言」「落語」（光村６年後） ●古典の世界「歌舞伎・文楽を知ろう」「『学校』の昔」（学びを広げる三省６年）	○音読・朗読発表会 ○視写 ○名言集作り ○比べ読み等

３．　小学校学年別「伝統的な言語文化に触れる」の学習指導法

前出二の表の☆印の教材を用いた、各学年の学習指導案を示す。特に、専門が古典文学以外の先生方に、気軽に参考にしていただける案になるように留意した。

【第１学年】

１　単元名　昔話を読もう、楽しもう

教材「おはなしのくに」（教出１年上）

２　単元について／教材の特色

親が読み聞かせをするお話に昔話が少なくなったせいか、最近は、昔話を知らない子どもたちが増えてきた。しかし、昔話には、時代や環境が変化しても決して変わることのない、喜怒哀楽や思いやりの感情、知恵や勇気、人間の生き方等、普遍的なよさがある。また、日本や外国の昔話に読み味わいながら、昔話の世界の広さに触れることによって、読書活動を広げ、親や祖父母と共通の読書体験をして、楽しむこともできる。

本単元は、「伝統的な言語文化に関する事項」に重点を置きながら、図書館の活用と関連させ、昔話の読み聞かせを聞いたり、発表したりすることを内容の中心としている。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

(1)昔話に興味をもち、進んで昔話を読む。

(2)読んだ昔話の中から、紹介したい昔話を選び、紹介する。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｱ)ｲ(ｶ)

「話すこと・聞くこと」(1)ｵ(2)ｴ　「読むこと」(1)ｲｶ(2)ｱ

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	読む力	書く力	知識・理解
ﾌﾞｯｸ･ﾄｰｸや読み聞かせを聞いて昔話を楽しみ、進んで昔話を読もうとしている。	自分が好きな昔話を選んで、好きな理由等について友達と紹介し合っている。	昔話のあらすじが分かり、登場人物の思いや願いを感じ取る。	好きな理由等が伝わる、簡単な紹介文を書く。	日本や外国の昔話を知る。昔話のあらすじが分かる。

５　学習指導計画（全６時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 ３時間	１．昔話に興味や関心をもたせる。	(1)日本や外国の昔話のﾌﾞｯｸトークを聞き、昔話に興味・関心をもつ。（本時） (2)日本の昔話の童謡を聞き、挿絵の中から日本の昔話を探す。読み聞かせを聞き、あらすじを知る。 (3)挿絵の中から外国の昔話を探し、読み聞かせを聞き、あらすじを知る。	ﾌﾞｯｸﾄｰｸや読み聞かせを聞いて、日本や外国の昔話を知り、楽しもうとしている。 昔話のあらすじが分かる。
第２次 １時間	２．進んで昔話を読むようにさせる。	(4)自分の読みたい昔話を幾つか読む。	進んで昔話を読もうとしている。 登場人物の思いや願いを感じ取る。
第３次	３．自分が選	(5)読んだ昔話の中から、友達に紹介した	好きな昔話を選ぶ。

２時間	んだ昔話の好きな理由等を伝えることができるようにさせる。	いものを選び、簡単な紹介文を書く。 (6)お勧めの昔話を友達に紹介し、お互いに読み合う。	好きな理由等が伝わる、簡単な紹介文を書こうとしている。 お勧めの昔話を分かりやすく紹介する。 友達のお勧めの昔話を進んで読もうとする。

６　本時の学習指導計画（第１時間目／６時間）

(1)本時の指導目標

①ﾌﾞｯｸﾄｰｸを楽しんで聞き、日本や外国の昔話の概要を知る。

②昔話に興味・関心をもつ。

③好きな昔話を選び、好きな理由等を伝える。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入	１．知っている昔話を挙げ、本時のめあてを確認する。	・教科書の挿絵を利用し、昔話の題名や主人公等を確認する。 ・ﾌﾞｯｸﾄｰｸにより、日本や外国の昔話が多く紹介されることを知る。	知っている昔話を挙げようとしている。（関心・意欲・態度）（話す・聞く力）
展開	２．ﾌﾞｯｸﾄｰｸ「動物がいっぱい」、「お姫様がいっぱい」、「勇者がいっぱい」を聞く。 ３．ﾌﾞｯｸﾄｰｸを通して、様々な昔話を知り、昔話に興味・関心をもつ。	・昔話動物編は「はなさかじいさん」「ぶんぶくちゃがま」「さるかにがっせん」「おむすびころりん」「ﾌﾞﾚｰﾒﾝの音楽隊」「３びきのこぶた」「きんのがちょう」、昔話お姫様編は「かぐやひめ」「はちかつぎひめ」「ｼﾝﾃﾞﾚﾗ」「白雪姫」「人魚姫」、昔話勇者編は「ももたろう」「いっすんぼうし」「ﾍﾝｾﾞﾙとｸﾞﾚｰﾃﾙ」「あかずきん」を題材とする。 ・ﾌﾞｯｸﾄｰｸの際は、児童とのやりとりを心がけ、教科書の挿絵や絵本を電子黒板を使って視覚的に紹介する。 ・ﾜｰｸｼｰﾄに、一番心に残った昔話の題名や登場人物、その理由等、	ﾌﾞｯｸﾄｰｸを楽しんで聞こうとしている。（関心・意欲・態度）（話す・聞く力） 様々な昔話を知り、興味・関心をもつ。（関心・意欲・態度）（知識・理解） 好きな昔話を選び、その理由を

	４．好きな昔話とその理由を発表する。	簡単なメモを取らせながら聞かせる。 ・発表の際は、好きな昔話とその理由を一言でも挙げられればそれでよしとする。 ・ﾜｰｸｼｰﾄに、読んでみたい昔話のメモを取らせながら聞かせる。	発表しようとする。（書く力）（話す･聞く力）読んでみたい昔話を興味・関心をもって聞く。（興味・関心・態度）（話す・聞く力）
まとめ	５．友達の挙げた昔話の中で読んでみたい昔話を挙げる。	・ﾜｰｸｼｰﾄを回収し、人気昔話ﾍﾞｽﾄ３とその理由を、指導者が紹介する。	読んでみたい昔話を挙げようとする。（興味・関心・態度）

(3)本時の評価

①ﾌﾞｯｸﾄｰｸを楽しんで聞き、日本や外国の昔話の概要を知ることができたか。

②昔話に興味・関心をもつことができたか。

③好きな昔話を選び、好きな理由等を伝えることができたか。

７　学習指導計画のポイント

(1)ブックトークの活用

本時は、この単元の第１時間目であり、児童に日本や外国の昔話を数多く紹介し、昔話への興味・関心を高めることが最大の目標である。そのために、「ブックトーク」という手法を用いた。

「ブックトーク（Book talk)」とは、一定のテーマを立てて一定時間内に何冊かの本を複数の聞き手に紹介する行為である。ブックトークの目的は、「その本の内容を教えること」ではなく「その本の面白さを伝えること」「聞き手にその本を読んでみたいという気持ちを起させること」である。 読み聞かせや朗読とは異なり、本を最初から順に読んでいくということはしない。紹介者はあらかじめテーマを決め、紹介すべき本を種々取り混ぜて選択し、紹介の仕方を考えておく。どのページをどう紹介するかについて、シナリオ（台本）を用意することも多く行われる。シナリオ作りは、主に次のような流れで行う。

①テーマを決める。

②昔話を選ぶ（紹介したいと思う冊数より多く）。

③構成を考える　（導入・展開・まとめ）。

④聞き手とトークの流れを考えて昔話を選ぶ（予め用意した昔話から絞り込む・不足している昔話はないか再考する）。

⑤紹介の仕方を考え、細かいシナリオを作る。

⑥効果的な資料紹介の工夫・準備をする。

⑦繰り返し練習する。

また、ブックトークの際は聞き手の反応に合わせて語ったり、その後聞き手が興味を持った本を実際に自分で読めるようにすることが大切である。

今回は、３つのテーマ（「動物がいっぱい」「お姫様がいっぱい」「勇者がいっぱい」）を設け、日本や外国の昔話を各テーマごとに分けて、ブックトークを用いて紹介した。

(2)電子黒板の活用

インタラクティブ・ホワイトボードは、教育ソフト、 Web サイト等コンピュータの画面上に表示できるものなら何でも表示し、生徒に見せることができる。また、プロジェクタをコンピュータや DVD プレイヤーと接続して、インタラクティブ・ホワイトボードとして使用することもできる。インタラクティブ・ホワイトボードは、授業でホワイトボード上に教師が描いたことを記録しておき、後で復習用に児童に配布することもできる。また、記録を時系列的なデータとし、同時に教師の音声を録音して付与することで、欠席者に授業を再現することもできる。チョークを使用しないので、粉塵による人体への影響もない。

現代の小学校では、投影機能を使って、板書事項やワークシートの記入事項に対する児童の理解の徹底をはかることも多い。黒板に替わるホワイトボードの導入も行われており、そうすると更に大きな画面で席の後ろの児童にも見える。

今回は、電子黒板を使って、教育ソフト（『わくわく古典教室　小学校低学年用［読み聞かせ・言葉遊び編］』光村図書）の昔話（「はなさかじい」）を見せるようにした。

(3)童謡の活用

低学年では、視覚や聴覚に訴える副教材が効果的であるが、教育ソフトとともに、童謡 CD・DVD の活用も考えられる。

特に、童謡は、児童が楽しく歌いながら、その昔話のあらすじをつかむことができ、「読み聞かせ」の事前学習として効果的である。

今回は、童謡として、「花咲爺」「一寸法師」「桃太郎」「浦島太郎」を用いた。

【第２学年】

１　単元名　言いつたえられているお話をしろう

教材「でいだらぼっちのお話」「いなばの白うさぎのお話」「やまたのおろちのお話」「海さち山さちのお話」（東書２年上）

「いなばの白うさぎ」（光村２年上）

「いなばのしろうさぎ」（教出２年上）

２　単元について／教材の特色

本単元は、日本で昔から言い伝えられている神話の読み聞かせを聞いたり、自分で読んだりしたことを、友達と発表し合う活動を通して、伝統的な言語文化に触れる楽しさを更に強く実感させることをねらいとしている。

児童は、親しんできた物語の中に、「日本で昔から言い伝えられているお話」というジャンルがあり、その中に「神話」があることも知る。その独特の語り口や展開に触れることで、古くから伝えられてきたお話に関心をもち、読書の幅を広げていくこともできる。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

①神話や伝承の登場人物の行動を中心に、各場面の様子を想像しながら読み聞かせを聞く。

②聞いたり読んだりした神話の中で、内容や感想について発表し合う。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｱ)ｲ(ｶ))

「話すこと・聞くこと」(1)ｵ(2)ｴ　「読むこと」(1)ｳｵｶ(2)ｲｵ

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	読む力	書く力	知識・理解
ﾌﾞｯｸ･ﾄｰｸや読み聞かせを聞いて神話や伝承を楽しみ、進んでそれらを読もうとしている。	自分が好きな神話や伝承を選んで、内容や感想について友達と発表し合っている。	神話や伝承の登場人物の行動が分かり、各場面の様子を想像しながら読む。	好きな神話や伝承の内容や感想を書く。	日本に神話や地域の伝承があることを知る。

５　学習指導計画（全６時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 １時間	１．神話や伝承に興味や関心をもたせる。	(1)日本の神話や伝承について知り、ﾌﾞｯｸﾄｰｸ（「でいだらぼっち」「いなばの白うさぎ」「やまたのおろち」「海さち山さち」）を聞き、おもしろいところを発表し合う。	ﾌﾞｯｸﾄｰｸを聞いて、日本の神話や伝承を知り、楽しもうとしている。
第２次 ２時間	２．登場人物の行動を中心に、各場面の様子を想像しながら読ませる。	(2)「いなばの白うさぎ」の読み聞かせを聞き、クイズで読みを深める。（本時） (3)「いなばの白うさぎ」の紙芝居作りをする。	登場人物の行動が分かり、各場面の様子を想像しながら読もうとしている。 各場面を絵や文章でまとめようとしている。
第３次 ２時間	３．進んで神話や伝承を読むようにさせる。	(4)自分の読みたい神話や伝承を幾つか読む。 (5)読んだ神話や伝承の中から、好きなものの内容や感想を書く。	進んで神話や伝承を読もうとしている。 好きな神話や伝承を選ぶ。 登場人物の行動や各場面の様子が分かり、話の内容や感想を

			分かりやすく書くようにしている。
第４次 １時間	４．自分が選んだ神話や伝承の内容や感想を伝えることができるようにさせる。	(6)選んだ神話や伝承の内容や感想を、発表し合う。	好きな神話や伝承の兄内容や感想が伝わるように発表しようとしている。 友達の発表を進んで聞こうとしている。

６　本時の学習指導計画（第２時間目／５時間）

(1)本時の指導目標

①神話について知り、「いなばの白うさぎ」の読み聞かせを楽しんで聞く。

②クイズを通して、登場人物やその行動、場面の様子を読み、想像を広げる。

③各場面を絵や文章でまとめる。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入	１．神話について思い出し、童謡「大黒様」を聞き、話の概要を知る。	・神話とは何かを問い、説明する。 ・CD に合わせて、歌詞を見て楽しく歌いながら、「いなばの白うさぎ」の概要を知らせる。	神話について簡単に説明できる。（知識・理解） 楽しく歌いながら、話の概要を知ろうとしている。(関心・意欲・態度)
展開	２．「いなばの白うさぎ」の読み聞かせを、楽しんで聞く。 ３．クイズを通して、楽しく内容を理解する。	・「いなばの白うさぎ」の絵本の絵を、電子黒板で写しながら、読み聞かせをする。 ・児童の反応や表情に注意し、必要に応じて繰り返し読んだり、語句の説明をしたりする。 ・おもしろかった点等の簡単な感想を発表させる。 ・登場人物やその行動、場面の様子等に関わるクイズを出す。（登場人物、くらべっこを言い出した者、神さまたちの対処法、心優しい弟神の名前、弟神の対処法等） ・ﾜｰｸｼｰﾄに記入させる。 ・難度が高い問題は選択制にし、	読み聞かせを楽しんで聞こうとしている。（関心・意欲・態度）（話す・聞く力） あらすじが分かる。（読む力） 簡単な感想を発表しようとしている。（話す・聞く力） 登場人物やその行動、場面の様子等が分かる。（読む力） 進んで、クイズにこたえようとしている。（関心・意欲・態度）

		児童が答えやすいようにし、電子黒板を用いて確認させる。	
まとめ	４．「いなばの白うさぎ」の紙芝居作りの準備をする。	・各場面を表す絵や文章を考えさせる。 ・児童の力に応じて、一枚（一番おもしろかった場面のみ）～五枚程度に場面をきりとらせる。	各場面を絵や文章にまとめようとしている。（読む力）（書く力）

(3)本時の評価

①神話について知り、「いなばの白うさぎ」の読み聞かせを楽しんで聞くことができたか。

②クイズを通して、登場人物やその行動、場面の様子を読み、想像を広げることができたか。

③各場面を絵や文章でまとめることができたか。

７　学習指導計画のポイント

(1)読み聞かせの方法

読み聞かせをする際は、絵本や文章を見せて、２年生により分かりやすい形で提示する。児童の反応や表情に注意し、必要に応じて繰り返し読んだり、語句の説明をしたりする。

(2)紙芝居作り

２年生が各場面の要約をしやすくするために、絵と文章でまとめさせる。

児童の力に応じて、一枚（一番おもしろかった場面のみ）～五枚程度に場面をきりとらせる。

(3)その他

ﾌﾞｯｸﾄｰｸは、神話や伝承がどのようなものであるか、概要をつかませるために用いた。

電子黒板は、絵本の絵を写したり、ﾜｰｸｼｰﾄの確認をさせたりすることに用いた。

童謡は、童謡「大黒様」を聞かせて、「いなばの白うさぎ」の概要をつかませた。

【第３学年】

１　単元名　慣用句について知り、使ってみよう

教材「慣用句を使ってみよう」（東書３年上）

２　単元について／教材の特色

慣用句は、昔から使われてきた、二つ以上の言葉が結びついて、ある特定の意味を表すようになった表現である。比喩的なものが多く、それらの意味は固定化している。先人の生活や発想が

如実に生かされている慣用句を使うことで、日常の表現をより豊かにすることができる。

一方、長年言い継がれてきた慣用句は、現代社会では意味が通じないものや、今の常識にふさわしくないものも含まれている。一つの言葉や表現が、他人に不愉快な思いをさせたり、傷つけたりすることもある。また、慣用句に使われる言葉には、体の部位に関するものが多い。そこで、慣用句の学習では、相手や場面、状況に合わせた適切な使い方まで注意して理解させる必要がある。

この単元では、まず、たくさんの慣用句の意味を辞書等で調べたり、慣用句を探したりする言語活動を通して、伝統的な言語文化に触れさせていく。同じ言葉が使われている慣用句を探していく中で、先人の生活様子や発想を想像させていきたい。更に、慣用句を使った短文作りや、それらを読み合う活動を通して、児童が慣用句に関心を持ち、自身の言語生活の中に適切に生かすことができるようにさせたい。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

(1)様々な辞書で調べながら、慣用句の意味や使い方を理解する。

(2)短文作りを通して、慣用句を自身の表現において使う。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｲ)ｲ(ｵ)(ｶ)

「読むこと」(1)ｶ(2)ｲ

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	読む力	書く力	知識・理解
慣用句に関心を持ち、進んで意味や使い方を様々な辞書で調べようとしている。	・知りたい内容に応じて、慣用句辞典や国語辞典等、様々な辞書を選んで読んでいる。 ・グループで「慣用句カード」を交換し、読み合う。	好きな慣用句の意味を調べ、短文を作り、それぞれ「慣用句カード」に書く。	日本に神話や地域の伝承があることを知る。

５　学習指導計画（全４時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 １時間	１．慣用句に興味や関心をもたせる。	(1)教科書を読み、慣用句について知る。 (2)知っている慣用句について発表する。	慣用句について、進んで知ろうとしたり、発表しようとしたりしている。
第２次 １時間	２．慣用句の意味や使い方を辞書等で調べさせる。	(3)教科書で挙げられている慣用句の意味と使い方を、様々な辞書で調べる。	慣用句や同じ言葉が使われている慣用句の意味と使い方を、知りたい内容に応じて、慣用句

		(4)教科書で挙げられている言葉が使われている慣用句を集めて、意味と使い方を様々な辞書で調べる。	辞典や国語辞典等様々な辞書を使って調べようとしている。
第３次 １時間 （本時）	３．好きな慣用句を集めて、意味や短文作りでまとめる。	(5)好きな慣用句の意味を調べ、短文を作る。 (6)集めた慣用句の意味と短文を、「慣用句カード」に書いてまとめる。	短文作りや「慣用句カード」作りを通して、慣用句を進んで使おうとしている。
第４次 １時間	４．友達の選んだ慣用句を使って、短文を作る。	(7)グループで「慣用句カード」を交換し、読み合う。 (8)友達の選んだ慣用句を使って短文を作り、使い方カードを書く。	慣用句の意味や使い方をより深く理解し、自身の表現において使おうとしている。

６　本時の学習指導計画（第３時間目／４時間）

(1)本時の指導目標

①好きな慣用句を使った短文作りを通して、慣用句を自身の表現において使う。

②意味と使い方をまとめた「慣用句カード」作りを通して、慣用句への理解を深める。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入	１．これまでの学習で知った慣用句を見直す。	・教科書やﾉｰﾄ、ﾜｰｸｼｰﾄ等を見ながら、調べた慣用句とその意味を思い出させる。	調べた慣用句を進んで思い出そうとしているか。（関心・意欲・態度）
展開	２．好きな慣用句を幾つか選び、それらを使った短文を作る。 ３．選んだ慣用句の意味と短文（使い方）を「慣	・短文作りの際は、慣用句の意味とその慣用句が使われる場面を考えさせ、読み直しをして正しく使われているかを確かめさせる。 ・すぐに書けない児童には、意味をそのまま当てはめた短文を考えさせ、その後慣用句に置き換えた文を書かせる。 ・教師が机間巡視をしながら、質問に応じたり、慣用句が正しく使	慣用句の意味と使い方を理解する。（知識・理解）（読む力） 好きな慣用句を選ぶ。（関心・意欲・態度） 慣用句を使った短文を進んで作ろうとしている。（書く力）

	用句カード」にまとめる。	われているか確認をしたりして、適宜指導する。	「慣用句カード」を進んで作ろうとしている。（書く力）
まとめ	４．「慣用句カード」をグループで読み合う。	・慣用句が正しく使われているか、グループで読み合って確かめさせる。 ・短文は必ず教師が目を通し、正しい使い方をしているか、適宜.指導する。	友達の短文に、慣用句が正しく使われているか確かめる。（知識・理解）（読む力）

(3)本時の評価

①好きな慣用句を使った短文作りを通して、慣用句を自身の表現において使うことができる。

②意味と使い方をまとめた「慣用句カード」作りを通して、慣用句への理解を深めることができる。

７　学習指導計画のポイント

(1)教育ソフト・電子黒板の活用

教育ソフト（『わくわく古典教室　小学校中学年用』光村図書）の「慣用句」の動画や意味・使い方を、電子黒板を用いて紹介し、慣用句への興味・関心を高めさせる。

慣用句を使った短文作りは、前時の調べ学習でできるだけ多くの慣用句を知ることが重要である。慣用句がどのような言葉であるのかを正確に理解させた上で、様々な辞書を使ってできるだけ多くの慣用句の意味を調べ、慣用句の知識を広げていく。更に、同じ言葉を使った様々な慣用句を集め、それらの表現の豊かさを実感させた上で、本時の授業に臨ませる。

(2)短文作り・「慣用句カード」

慣用句は、簡潔な言い回しで語呂がよく、その意味は多くが比喩的に表されている。児童が慣用句を生活の中で適切に使うことができるように、好きな慣用句を使った短文を考えさせ、「慣用句カード」にまとめさせる活動を設定した。

短文作りでは、まず、慣用句の意味と使い方を確認させ、次に、その慣用句が使われる場面を考えさせ、最後に、読み直しをして正しく使われているかを確かめさせる。すぐに書けない児童には、意味をそのまま当てはめた短文を考えさせ、その後、慣用句に置き換えた文を書かせるとよい。

ここでは、慣用句の意味を正しく理解し、適切に使っているのかを常に確認することが必要である。友達と読み合うとともに、教師が適宜指導していく。

更に、次時では、友達が選んだ慣用句を使って短文を作ることで、様々な慣用句を使って表現することに親しませるようにしている。

(3)その他

学習後、各々の「慣用句カード」を、使われている言葉やその言葉の分類等で分け、「慣用句カード集」として構成することで、クラスの慣用句辞典として、より実用的なものとすることもできる。

そして、慣用句がより身近なものとなるために、教室の学級文庫に「慣用句カード集」を常備し、いつでも手に取って読むことができるようにしておくとよい。

また、「使い方カード」等も用意して、今後の国語の学習で使ったり、思いついたりした慣用句の用例を書き込んで、とじられるようにしておくと、児童が日常生活で慣用句を活用する意欲づけにもつながる。

【第４学年】

１　単元名　俳句づくりに親しもう

教材「俳句づくりに親しもう」（開発）

２　単元について／教材の特色

俳句は、作者の感情を風景や事象を通して表現する、日本の伝統文化であり、世界で一番短い形式の詩である。

俳句学習を通して、優れた作品に親しませ、鑑賞させることで、言語感覚を豊かにするとともに、作者のものの見方・感じ方・考え方を読む力を高めることができる。

また、俳句を作る活動は、俳句に親しむ態度や習慣づけをさせるだけでなく、他教科や他領域の学習活動に生かしながら、毎日の言語活動を充実させていくこともできる。

中学年における俳句の指導は、特に次の点に注意するとよい。

・五七五の音律の美しさにふれる。
・四季の美しさにふれる。
・季語の表現方法を身に付ける。
・感動を表す切れ字（や・けり・かな）の使い方を身に付ける。
・字余りや字またがりの表現方法を理解する。

俳句の音読や暗唱を通して、文語の調子や音律の美しさに気づく力や、季語や切れ字を生かして自身の思いを俳句に表現する力を育てていきたい。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

(1)俳句を音読したり暗唱したりして、文語の調子や音律の美しさに気づき、俳句に親しむ。

(2)季語や切れ字の使い方を生かした俳句作りを通して、自身の思いを表現する。

「書くこと」(2)内容(2)ｱ

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｱ)ｲ(ｱ)(ｵ)

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	読む力	書く力	知識・理解
俳句作品を進んで音読したり、暗唱したりする。	作った俳句を発表し合い、感想を述べ合う。	俳句作品の内容を大まかに分かる。	季語や切れ字の使い方を生かして、俳句を詠む。	俳句作品の言葉の調子や音律の美しさに気づき、俳句に親しむ。

５　学習指導計画（全４時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 ２時間	１．俳句にふれ、その特色を理解させる。 ２．感想を聞きながら、俳句の内容への理解を深めさせる。	(1)教科書の俳句を、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら、音読・暗唱をする。 (2)俳句の内容を大まかに知る。 (3)各俳句の感想を書く。 (4)俳句の言葉を手がかりに季節分けをする。	進んで音読・暗唱をしようとしているか。 俳句の感想を書こうとしているか。 俳句の言葉を手がかりに季節分けができるか。
第２次 ２時間	３．季語や切れ字の使い方を理解し、俳句を詠ませる。（本時） ４．友達の俳句の鑑賞を通して、俳句に対する理解を更に深める。	(5)季語や切れ字の性質や役割を知る。 (6)表現したい内容を考え、季語や切れ字を使いながら、俳句を詠む。 (7)作品を発表し合う。	季語や切れ字の役割や性質を知ろうとしているか。 身近なこと、想像したこと等を基にして俳句作りに取り組んでいるか。 友達の作品の良さを認めようとしているか。

６　本時の学習指導計画（第３時間目／４時間）

(1)本時の指導目標

①表現したい内容を考え、季語や切れ字を使いながら、俳句を詠む。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
	１．季語や切れ字につい	・前時の言葉による季節分けを思	季語や切れ字の

導入	て知る。	い出させる。 ・季語一覧や切れ字解説を用いて、季語や切れ字の性質や役割を知らせる。	性質や役割を理解できたか。(知識・理解)
展開	２．俳句を暗唱する。 ３．俳句を詠む。	・暗唱を通して、俳句のリズムと音律の美しさ、季語や切れ字に親しませる。 ・印象に残った出来事を思い出させ、下書きのﾜｰｸｼｰﾄに表現内容や季節、季語等を書かせる。 ・季語や切れ字を取り入れて俳句を詠ませる。 ・机間巡視をしながら、個別指導を行う。	俳句の特色を感じながら、暗唱することができたか。（聞く・話す力） 表現内容や季語や切れ字に注意して、俳句を詠もうとしているか。（読む力）（書く力）
まとめ	４．作品を鑑賞する。	・友達の作品の良さを認め合いながら、俳句作りの雰囲気の質を高めていくようにする。	友達の作品の良さを認めようとしているか。(読む力)

(3)本時の評価

①身近なこと、想像したこと等を基にして、俳句作りに取り組んでいる。

７　学習指導計画のポイント

(1)俳句に親しむ

教科書に挙げられている俳句は、分かりやすく親しみやすいものが多い。また、教育ソフト（『わくわく古典教室　小学校中学年用』光村図書）の「俳句」を用いて、俳句の特色や様々な俳句を紹介することができる。

これらの俳句を繰り返し音読・暗唱すると、児童は、句のリズム、切れ目、感動の中心、切れ字等を自然に把握するようになる。内容や鑑賞に時間をかけずに、多くの作品にふれることで、五・七・五の音律の美しさに親しませたい。

また、今回は途中に入れたが、導入やまとめに、俳句の暗唱に挑戦させると、児童は自然に俳句に親しむようになっていく。

(2)俳句を詠む

中学年なので、季語を入れた俳句作りに取り組ませたい。

児童は、テーマを設けた方が俳句を詠みやすいので、季節や行事等をテーマに、印象に残った場面を思い出させる工夫をするとよい。

子どもたちが俳句に親しみ、学習後も自ら五・七・五を使った表現を行った場面をと

らえて、認め、励ますことで、俳句を詠む意欲を自然に高めていきたい。また、校内や地域の俳句募集や夏休みの課題等、国語の時間以外の俳句を詠む機会をできるだけ紹介することも必要である。児童の作品を掲示しながら、学校や学級全体で、俳句を詠む雰囲気作りを広めていきたい。

また、地域の俳人や俳句の会の人々を招いて、講演をしていただくこともできる。

学習後の様々な活動を通して、児童に、日本の伝統文化である俳句に対して、自然に親しませていくようにしたい。

【第５学年】

１．単元名　声に出して楽しもう

教材「声に出して楽しもう」『竹取物語』『枕草子』『平家物語』（光村５年前）、

２　単元について／教材の特色

『竹取物語』『枕草子』『平家物語』は、日本の伝統文化における代表的な古典である。

『竹取物語』は平安初期に成立し、『源氏物語』絵合巻に「物語の出来はじめの祖」とあるように、現存する最古の物語である。月の世界の住人であったかぐや姫を主人公とした幻想的な物語であり、未知の世界へのあこがれや畏れ、人の感情の美醜等、しみじみとした感情表現が見られる。昔話「かぐや姫」を知っている児童もいるだろうし、冒頭部分の大意を分からせた上で、古文のリズムを味わわせながら、音読を楽しませたい。

現存する最初の随筆である『枕草子』の冒頭部分は、清少納言が春夏秋冬の最もすばらしいと感じる時間帯を示し、どのような点がよいと考えているのかを述べている。清少納言が「をかし」と述べているものは、躍動感があり新鮮で、現代人にも通じる感覚であるので、児童には音読を楽しませたい。

『平家物語』は、鎌倉時代初期に成立した軍記物語である。平家と源氏の戦いや約 50 年にわたる平家一門の興亡を通して、武士の精神や仏教的無常観が描かれている。児童に、冒頭の無常観は理解しにくいと思われるが、そこはあまり深入りせずに、琵琶法師による五七調の語りのリズムを十分に意識させて、ゆったりと感情を込めて音読させたい。

また、これらは、中学校での古典学習につなげるための基礎・基本の学習として、児童が比較的視写・音読・暗唱のしやすい古典でもある。絵本や絵巻、教育ソフト等で古典の世界を視覚的に分かりやすく紹介しながら、視写・音読・暗唱を通して、古語のもつ美しさや古文特有のリズムを体感させながら、古典に親しませるとともに、豊かな言語感覚を養っていきたい。そして、作品や作者紹介等も通して、昔の人の生活や習慣、ものの見方・感じ方・考え方にも気づかせていきたいと考える。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

(1)古語のリズムや調子を味わいながら音読することで、古典に親しみながら、豊かな言語感覚を

養わせる。

(2)現代の生活との違いや昔の人のものの見方・感じ方・考え方を知る。

「読むこと」(2)内容(1)ｵ

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｱ)(ｲ)ｲ(ｲ)

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	読む力	書く力	知識・理解
現代文との違いに興味をもち、進んで古文を読もうとしている。	調べたり考えたりしたことを工夫して紹介し、聞き合う。	調べたり考えたりして、自分の考えを広げ深めている。	調べたり考えたりしたことを分かりやすく工夫して書く。	今の生活との違いや昔の人のものの見方・感じ方・考え方を理解する。

５　学習指導計画（全５時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 １時間 （本時）	１．『竹取物語』に親しむ。	(1)絵本「かぐや姫」より『竹取物語』の概要や古文の特色を知る。 (2)冒頭部分の音読を通して、古語の響きを体感しながら、かぐや姫の特異性を読み取る。	『竹取物語』の特色に注意して、進んで音読し、内容理解をしようとしている。
第２次 ２時間	２．『枕草子』に親しむ。 ３．『平家物語』に親しむ。	(3) 冒頭文の音読を通して、古語のリズムを体感しながら、清少納言がよしとする四季の時間帯を知る。 (4)冒頭文の音読を通して、五七調のリズムを体感しながら、仏教的無常観という考え方を知る。	『枕草子』の特色に注意して、進んで音読し、内容理解をしようとしている。 『平家物語』の特色に注意して、進んで音読し、内容理解をしようとしている。
第３次 １時間	４．古典を４年生に工夫して紹介し、学習を振り返る。	(5)興味をもった古典に対して、４年生が興味をもつように工夫して紹介することを通して、自身のものの考え方を広げ深める。	４年生に分かりやすいように工夫して古典を紹介しようとしている。

６　本時の学習指導計画（第１時間目／５時間）

(1)本時の指導目標

①絵本「かぐや姫」より『竹取物語』の概要を知るとともに、現代文と古文の違いより古語や古文独特のリズム等に気づく。

②古語の読み方や古文のリズム等に注意しながら、冒頭文を音読する。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入	１．絵本「かぐや姫」を読み、『竹取物語』の概要を知る。	・最近は昔話「かぐや姫」を知らない児童もいるので、絵本や教育ソフト等で視覚的に分かりやすく物語を紹介する。 ・主な登場人物や３部それぞれの話の内容を簡潔に話す。	進んで絵本や古典を読もうとしている。（関心・意欲・態度）（読む力）
展開	２．現代文と古文との相違点を見つける。	・言いにくさや読みにくさ、意味の分かりにくさに着目させ、古語やリズム、歴史的仮名遣い等に興味を向けさせる。	現代文と古文との相違点を進んで考えようとしている。（関心・意欲・態度）（読む力）
	３．読み方やリズムに注意しながら音読する。	・古文の横に現代仮名遣いに直したものを基に音読させる。 ・範読と全体での音読を何回も繰り返した後、列ごとの音読、個人の指名音読という順に行う。	読み方やリズムに注意して音読をすることができたか。（聞く・話す力）（読む力）
	４．かぐや姫の特異性を知る。	・登場人物を再確認しながら、かぐや姫の特異性を、分かりやすく説明する。	かぐや姫の特異性を理解できたか。（読む力）
まとめ	５．音読を発表し合い、友達の長所を自身の音読に生かす。	・各自音読のテーマ（歴史的仮名遣い、リズム、登場人物の気持ち等）を決めて、音読させる。 ・友達の音読の長所を自身の音読に生かすようにさせる。	読み方やリズム等、自身のテーマを決めて音読をすることができたか。（聞く・話す力）（読む力）

(3)本時の評価

①絵本「かぐや姫」より『竹取物語』の概要を知るとともに、現代文と古文の違いより、古語や古文独特のリズム等に気づくことができたか。

②古語の読み方や古文のリズム等に注意しながら、冒頭文を音読することができたか。

７　学習指導計画のポイント

(1)古文に親しませる「音読」という手法

「音読」とは、すなわち、古語の意味の切れ目に注意して、古文をすらすら読むことができることである。これは古文に親しませ、内容を理解させる上で、最もやりやすく、分かりやすい手法である。

だから、音読においては、まず、歴史的仮名遣いのルール等にはあまり深入りせずに、古文の横に現代仮名遣いのルビを振ったり、古文を分かち書きにしたりして、児童が「読みにくい」と思う箇所を全て取り除いた形で、古文を提示するとよい。

次に、児童が自信をもって大きな声で音読できるようにするために、教師と全員、列ごと、個人と段階的な音読が必要である。また、音読のテーマも、「古語を正しく読む」、「古語の意味の切れ目に注意して読む」、「リズムに注意して読む」、「登場人物の心情や情景に注意して読む」というように、段階を設けていくことが大事である。そうすると、個に応じた音読のテーマも設定しやすく、児童自身がそのテーマを自覚して練習することができる。勇気をもって皆の前で音読をした児童には、その長所を強調してほめ、他の児童の音読のお手本にさせたい。

とにかく、音読を好きにさせること、古文を難しく感じさせないことが、初めて本格的な古文に出会う５年生にとって、大切であると考える。

(2)古典の世界に親しませるためには

初めて本格的な古文に出会う５年生に、古典の世界に興味・関心を持たせるには、視覚的な副教材が一番効果的である。教育ソフトや古典の解説本には、作品や作者の紹介が短くまとめられており、大変分かりやすい。

絵本や絵巻、教育ソフト（『わくわく古典教室　小学校高学年用』光村図書「古文」『竹取物語』『枕草子』『平家物語』等）や古典の解説本（『はじめて出会う古典作品集』１～６光村教育図書）等の市販のもの、TV の録画や DVD 教材等を大いに活用するとよい。

(3) ４年生に古典を紹介する

４年生に古典を紹介する活動を単元の終わりに位置づけることで、個々の学びを再構成し、どうしたら分かりやすく伝えられるか、言葉を選んで表現する必要が生じる。４年生に古典に興味をもってもらうために、５年生は内容や表現方法を工夫する。４年生の感想を読み、自身の学びを振り返る。その結果、４年生は古典に親しみ、５年生は古典への理解を更に深めることができる。

【第６学年】

１　単元名　漢文を読んでみよう

教材「漢文を読んでみよう」『論語』『春暁』（東書６年上）

２　単元について／教材の特色

『論語』は、孔子やその弟子たちの言行を記録したもので、日本に最も古く伝来した漢籍である。孔子は、起源前 551 年から前 479 年頃の中国の思想家で、人格や道徳を高めることによって世を治めることを理想としていた。多くの弟子を教育し、その数 3000 人にも及んだと言われている。その教えは、身分に関係なく、日本人に受け入れられてきた。

『論語』や原文は知らなくても、「自分がしてほしくないことは人にはしない」等その内容を教わったことがある児童は多いと思われる。そういう意味では、身近な内容で分かりやすく、単純であるが故に、長い年月人々の心に一つの戒めとして残ってきた言葉でもある。それらが、昔の中国の孔子という人の言葉であること、また、人が生きていく上で大切なことは万国共通であることに気づかせたい。

『春暁』の作者孟浩然は、７世紀の盛唐の詩人であり、鹿門山中に隠棲し、また都へ出て王維らと交流を深めた。その詩風は、自然を旨とし、気品に富むと言われている。日本で今も使われる「春眠暁を覚えず」という文の原文が漢詩であることを通して、感性の共通点や日本文化に浸透している中国文化を理解させていく。

訓点等の句法や漢詩の形式等に深入りすることなく、中国語の CD を聞いたり、書き下し文を音読したりすることによって、まず、漢文に親しませていきたい。

３　単元の指導目標／学習指導要領との関連

(1)漢文を音読し、漢文について知り、言葉の響きやリズムの良さを味わう。

(2)漢詩の内容の概要を知り、音読する。

「読むこと」(2)内容(1)ｱｶ

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)ｱ(ｱ)ｲ(ｴ)

４　単元の評価基準

関心・意欲・態度	話す・聞く力	読む力	知識・理解
進んで書き下し文を読もうとしている。	漢詩を中国語で聞き、その響きを味わう。	・言葉の響きやリズムの良さを感じ取りながら音読する。 ・漢詩の内容の概要を読み取る。	漢文について知り、日本への受容の在り方を理解する。

５　学習指導計画（全３時間）

	指導目標	学習活動・学習内容	評価規準
第１次 ２時間	１．漢文について理解させる。 ２．『論語』の内容を理解し、音読	(1)漢文について、日本語との違い、日本語として読むための工夫（書き下し文）、形式・内容の受容の在り方等を知る。 (2)『論語』の内容の概要を知り、その思想は現代の日本でも伝えら	進んで漢文について知ろうとしていたか。 『論語』の内容の概要を理解できたか。 『論語』の思想の日本で

	ができるようにさせる。（本時）	れていることに気づかせる。 (3)言葉の響きやリズムの良さを感じ取りながら、音読する。	の受容の在り方を理解できたか。 言葉やリズムに注意して音読できたか。
第２次 １時間	３．漢詩の内容を理解し、音読ができるようにさせる。	(4)「春暁」の内容の概要を知る。 (5)言葉の響きやリズムの良さを感じ取りながら、音読する。	漢詩の内容の概要を理解できたか。 漢詩の作者の心情を読み取ることができたか。 言葉やリズムに注意して音読できたか。

６　本時の学習指導計画（第１時間目／３時間）

(1)本時の指導目標

①『論語』や孔子について知る。

②言葉の響きやリズムの良さを感じ取りながら音読する。

(2)本時の展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入	１．『論語』や孔子について知る。	・教育ソフト（『わくわく古典教室小学校高学年用』光村図書「『論語』について知ろう」）と電子黒板を用いて、『論語』や孔子について分かりやすく説明する。	進んで『論語』や孔子について知ろうとしていたか。（関心・意欲・態度）
展開	２．「己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ」を音読し、自身の幼少時よりの教えと比較する。 ３．『論語』より、日本人に親しまれている名言、四字熟語になったもの等を音読し、言葉の響きやリズムの良さを感じ取る。 ４．『論語』の名言の中で好きなものを選び、その理由をまとめる。	・『論語』は、昔の中国の思想家孔子の言行録であり、その思想は現代の日本でも受け継がれていることを知らせる。 ・電子黒板を用いて、書き下し文の読み方を確認する。 ・現代語訳を見ながら、大意をつかませる。 ・教科書以外にも、６年生がその思想を理解しやすい、『論語』の名言を幾つか紹介する。 ・孔子の思想と日本人の思想との共通点、中国文化の日本人の受容の在り方についても、時間があれば知らせる。	『論語』の名言を書き下し文で読み方やリズムに注意して音読できたか。（聞く・話す力）（読む力） 名言の大意を理解できたか。（読む力） 好きな名言を選び、その理由を書くことができたか。（書く力）

まとめ	５．好きな『論語』の名言とその理由を発表し、聞き合う。	・孔子が人格や道徳を高めることによって、世を治めることを理想としていたことを知らせる。	好きな名言とその理由を発表し、聞き合うことができたか。（聞く･話す力）

(3)本時の評価

①漢文について知ることができたか。

②言葉の響きやリズムの良さを感じ取りながら音読することができたか。

７　学習指導計画のポイント

(1)漢文の学習について

漢文や中国語への興味・関心を高めるために、教育ソフト（『わくわく古典教室　小学校高学年用』光村図書）や指導用ＣＤを用いて、漢詩を中国語で聞かせることは効果的である。ただし、クラスにアジア系外国籍の児童がいることの多い現在、外国語をふざけて扱うことのないように留意すべきである。

児童には、漢字表記のみの漢文を見せつつ、日本人が日本語として読むために工夫した書き下し文を歴史的仮名遣いに注意して、繰り返し音読させ、言葉の響きやリズムの良さを味わわせたい。

中国の思想の日本への受容に関しては、孔子や白居易等日本人に好まれた思想家・詩人等をできるだけ紹介して、言語や思想、宗教等の文化がどのように伝播してきたか、その歴史的背景についても興味をもたせていく。

漢文の学習を通して、中国の思想と日本の思想に共通点があることに気づかせることが大事であり、生き方の指針について児童のものの見方・感じ方・考え方を広げ深めさせていきたい。

(2)漢詩の学習について

漢詩の指導においては、漢詩特有のリズムにふれることがねらいなので、現代語や内容に必要以上に深く入り込まないようにしたい。何度も繰り返し音読できるようにして、漢詩のもつ特徴やリズムを感じ取れるようにする。

音読や暗唱をする場合は、内容の理解をおおよその状況や心情をうかがわせるにとどめ、音読に浸り、音読そのものを楽しむようにさせたい。まず、指導者が範読し、明瞭な発音と発声で、漢詩のリズムやテンポをしっかりとつかませる。日本の古典や詩とはまた違った雰囲気を味わわせることができる。

音読では、クラス全員で読む、グループ全員で読む、グループ内で一人一行ずつ読む、二人で対になり一方は書き下し文、他方は現代語訳を読む等、様々な工夫が可能である。

特に漢詩では、そこに表現された自然の情景を視覚化・聴覚化して、イメージを膨らませながら音読をすることが大切である。春の明け方・次第に明るくなる野山・山の端の太陽、鳥の声、夜の雨音、散る花、山里の家等、一行ごとの音読に合わせて映像を見

せることもできる。これらにより、内容の理解を深め、音読の雰囲気を醸し出すことができる。

４．　小学校学年別「伝統的な言語文化に触れる」の評価法

(１) 新学習指導要領における評価の観点

新学習指導要領総則における学力の三要素は、以下の通りである。

①基礎的・基本的な知識及び技能

②知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等

③主体的に学習に取り組む態度

現在、国際的な学習到達度調査（ＰＩＳＡ）における学力の質の低下が問題とされ、「情報へのアクセス・取り出し」は高いが、「統合・解釈」「熟考・評価」が　低いという結果になっている。

以上、新学習指導要領における学力の三要素やＰＩＳＡ結果による学力不足の点より、今後の評価は、次の四観点、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」が大切である。

特に国語科の評価においては、次の五観点、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」が重要である。

また、評定は、次のように三段階が適切であると考える。

「十分満足できる」　　・・・「Ａ」

「おおむね満足できる」・・・「Ｂ」

「努力を要する」　　・・・「Ｃ」

(２)「伝統的な言語文化に触れる」の評価法

・「言語についての知識・理解・技能」の評価の観点例

第１学年及び第２学年	第３学年及び第４学年	第５学年及び第６学年
伝統的な言語文化に触れたり、言葉の特徴やきまり、文字の使い方等について理解し使ったりするとともに、文字を正しく丁寧に書いている。	伝統的な言語文化に触れたり、言葉の特徴やきまり、文字の使い方等について理解し使ったりするとともに、文字を形や大きさ、配列、筆圧等に注意して書いている。	伝統的な言語文化に触れたり、言葉の特徴やきまり、文字の使い方等について理解し使ったりするとともに、文字を書く目的や用紙全体との関係、点画のつながり等に注意して書いている。

・「伝統的な言語文化に触れる」の評価の観点例

年	目　標	教　材	読む能力等 「Ａ」の例	読む能力等 「Ｂ」の例	読む能力等 「Ｃ」の例

1	昔話にふれる	「むかしばなしがいっぱい」（光村図書）	挿絵に描かれていない場面に触れたり、面白いところや感想等多数の要素を関連させたりしながら、友達に紹介できる。	挿絵を手掛かりにして、知っている昔話について、登場人物やストーリー等を、友達に紹介できる。	挿絵を手掛かりにして、登場人物名を、友達に紹介できる。
2	昔話を読む	「いなばのしろうさぎ」（教育出版）	読み聞かせを聞き、うさぎが裸で泣いている理由や、困っているうさぎを見た大国主の行動を読み取り、それぞの心情まで説明できる。	読み聞かせを聞き、うさぎの困っている様子と、それを見た大国主の行動を読み取り、説明できる。	読み聞かせを聞き、感想を述べることができる。
3	俳句・短歌を読む	声に出して読もう「俳句、短歌」（光村図書）	繰り返し音読したり暗唱したりして、好きな短歌や俳句を選び、好きな理由とともに、情景や様子まで紹介できる。	繰り返し音読して、好きな短歌や俳句を選び、好きな理由を紹介できる。	好きな短歌や俳句を選び、音読することができる。
4	故事成語に親しむ	日本の文化に親しむ「故事成語」（教育出版）	自分の調べたい故事成語について、意味や成り立ち、用例等、必要な事柄を自分で考えながら、書籍から取捨選択して、調べている。	自分で調べたい故事成語について、意味や成り立ち、用例等を、書籍を使って調べている。	自分で調べたい故事成語について、意味と用例について、書籍から書き写している。
5	伝統的な言語文化に触れる	声に出して読もう「論語」（光村図書）	自分が選んだ論語のよさを、他の論語と比較しながらとらえ、選んだ理由を適切に書いている。	自分が選んだ論語のよさを、理由を明確に書いている。	自分が好きな論語を選ぶことができる。
6	伝統的な言語文化に触れる	声に出して読もう「天地の文」（光村図書）	ものの見方や感じ方について、福沢諭吉と現代人を比較し、「共通点・相違	ものの見方や感じ方について、福沢諭吉と現代人を比較し、「共通点・相違	ものの見方や感じ方について、福沢諭吉と現代人を比較し、「共通点・相違

			点」「継承すべきこと」等とともに、友達の発言を参考にして、自分の今後の生き方を書くことができる。	点」「継承すべきこと」等を自分の言葉で書くことができる。	点」等を書くことができる。

５．おわりに

小学生を古典に親しませるためには、音読・暗唱を好きにさせる工夫、身の回りにある古典の世界を知らせる工夫が大切である。現代にも残る、能・狂言・歌舞伎等の伝統文化や、曖昧な表現を好む、「和を以て尊しとする」等の日本的なものの見方・感じ方・考え方について、児童に随時気づかせ、考えさせていきたい。

今まで中学校で扱ってきた古典教材を小学校から紹介するのは、児童に日本の古典を知らせる上で大変良いのであるが、特に注意したいのが、その指導内容は小学生向きに十分に検討しなければならないということである。歴史的仮名遣い等の文法事項や現代語訳等の解釈に必要以上に踏み込み、小学生の古典嫌いを作ることだけは避けたい。

そのためには、まず、指導者自身が古典に興味を持とうとする姿勢をもつことが大事である。教師が古典を好きになれば、必ず児童も古典を好きになる。実は、古典に関する広く深い知識がなければ、小学生に古典を教えるのは難しい。しかし、今、小学生用の古典の解説本や CD-ROM が市販されている。短時間でその古典の概要をかなり詳しく知ることもできれば、古典の世界を視覚化・聴覚化するための副教材も手に入れることもできる。そのほんのちょっとした手間暇をかけることができるかどうかが、小学校の古典教育の鍵であると考える。

それには、地域の小・中・高等学校における連携を深めて、古典の授業を公開し合うことも必要である。小学生・中学生・高校生の興味・関心や理解度、それぞれどのような授業が展開されているのかを、異種学校間の教員がお互いに知ることが、自身の授業の質を高め、小・中・高校 12 年間を見通した、よりよい古典教育が行われることにつながる。私もその一助となるように、全力を尽くしたい。

【資料】
《童謡》
「花咲爺」
作詞：石原和三郎
作曲：田村　虎蔵

原典：こどものうた（伴奏つき）中田義直編　野ばら社　1974 年

１、　うらのはたけで　ポチがなく
　　しょうじきじいさん　ほったれば
　　大ばん小ばんが　ザクザク　ザクザク

２、　いじわるじいさん　ポチかりて
　　うらのはたけを　ほったれば
　　かわらやせとかけ　ガラガラ　ガラガラ

３、　しょうじきじいさん　うすほって
　　それでもちを　ついたれば
　　またぞろ　こばんが　ザクザク　ザクザク

４、　いじわるじいさん　うずかりて
　　それでもちを　ついたれば
　　またぞろ　せとかけ　ガラガラ　ガラガラ

５、　しょうじきじいさん　はいまけば
　　花がさいた　かれえだに
　　ほうびは　たくさん　おくらに　いっぱい

６、　いじわるじいさん　はいまけば
　　とのさまのめに　それがいり
　　とうとう　ろうやに　つながれました

「一寸法師」

作詞：巌谷　小波

作曲：田村　虎蔵

原典：こどものうた（伴奏つき）中田義直編　野ばら社　1974 年

１、指に足りない一寸法師
　小さい体に大きな望み
　お椀の舟に箸の櫂
　京へはるばる上り行く

２、京は三条の大臣殿に
　抱えられたる一寸法師
　法師法師とお気に入り
　姫のお供で清水へ

３、さても帰りの清水坂に
　鬼が一匹現れ出でて
　食ってかかればその口へ
　法師たちまち躍り込む

４、針の太刀をば逆手に持って

チクリチクリと腹中突けば
鬼は法師をはき出して
一生懸命逃げて行く
５、鬼が忘れた打出の小槌
打てば不思議や一寸法師
一打ち毎に背が伸びて
今は立派な大男

「桃太郎」
作詞：不詳
作曲：岡野貞一
原典：こどものうた（伴奏つき）中田義直編　野ばら社　1974 年
１、桃太郎さん　桃太郎さん
お腰につけた黍団子
一つわたしに下さいな
２、やりましょう　やりましょう
これから鬼の征伐に
ついて行くならやりましょう
３、行きましょう　行きましょう
あなたについて何処までも
家来になって行きましょう
４、そりゃ進め　そりゃ進め
一度に攻めて攻めやぶり
つぶしてしまえ　鬼が島
５、おもしろい　おもしろい
のこらず鬼を攻めふせて
分捕物をえんやらや
６、万々歳　万々歳
お伴の犬や　さるきじは
勇んで車をえんやらや

「浦島太郎」
文部省唱歌
原典：こどものうた（伴奏つき）中田義直編　野ばら社　1974
年
１、昔　昔　浦島は
助けた亀に連れられて

竜宮城へ来てみれば
絵にもかけない美しさ
２、乙姫様のご馳走に
鯛やひらめの舞踊
ただ珍しくおもしろく
月日のたつのも夢の中
３、遊びにあきて気がついて
お暇乞いもそこそこに
帰る途中の楽しみは
土産に貰った玉手箱
４、帰って見れば　こはいかに
もといた家も村もなく
道に行きかう人々は
顔も知らない者ばかり
５、心細さにふたとれば
あけてくやしき玉手箱
中からぱっと白煙
たちまち太郎はおじいさん

「大黒様」
作詞：石原和三郎
作曲：田村　虎蔵
原典：こどものうた（伴奏つき）中田義直編　野ばら社　1974 年
１、大きな袋を　肩にかけ
大黒様が　来かかると
ここに因幡の　白うさぎ
皮をむかれて　赤裸
２、大黒様は　あわれがり
きれいな水に　身を洗い
がまの穂綿に　くるまれと
よくよく教えて　やりました
３、大黒様の　いうとおり
きれいな水に　身を洗い
がまの穂綿に　くるまれば
うさぎはもとの　白うさぎ

【注】

（１）『小学校学習指導要領国語科』『中学校学習指導要領国語科』文部科学省 2009 年 3 月

（２）青山由紀「小学校における古典教育の可能性」『新しい時代のリテラシー教育』東洋館出版　2008 年 3 月

（３）小山進治「小学校における古典教育の現状と課題」『小学校中学年における古典教育の在り方～小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導研究～』横浜市一般派遣研究生報告書（東京学芸大学）2009 年 3 月

（４）小山進治「研究の成果と今後の課題」『小学校中学年における古典教育の在り方～小中一貫を見据えた伝統的な言語文化の入門指導研究～』横浜市一般派遣研究生報告書（東京学芸大学）2009 年 3 月

【参考資料】

・『小学校学習指導要領解説　総則編』文部科学省　2008 年 8 月

・『小学校学習指導要領解説　国語編』文部科学省　2008 年 8 月

・『新しい国語の授業　言語活動の充実で活用する力を育む　小学校』１～６年　大越和孝・成家亘宏・藤田慶三編著　東洋館出版社　2009 年

・『小学校国語　指導事例集　23 版対応実践記録』１～６年　光村図書　2011 年

・『小学校国語　音読・朗読の指導　伝統的な言語文化と詩・物語』西村佐二・田中洋一監修　光村図書　2011 年

・『新しい国語　教師用指導書　研究編』１～６年　東京書籍　2011 年

・『小学生の国語　学習指導事例集』「小学生の国語」編集委員会　三省堂　2011 年

・『［平成 23 年度版］観点別学習状況の評価規準と判定基準　小学校国語』北尾倫彦監修　図書文化　2011 年

・『はじめて出会う古典作品集』１～６巻　河添房江・高木まさき監修　光村教育図書　2009 年～2010 年

・CD-ROM『音読・暗唱・読み聞かせ　わくわく古典教室　小学校』低学年用・中学年用・高学年用　光村図書　2009 年

・『実践へのヒント　国語科授業用語の手引き　第二版』中原國明・大熊徹編　教育出版　2009 年（初版 2006 年）

・『国語教育指導用語辞典　第四版』田近洵一・井上尚美編　教育出版　2011 年（初版 1984 年）

新しい小学校国語教科書に見る古典学習材の特徴

小　山　進　治

Ⅰ　理論編

平成 23 年度より小学校でも本格的に古典学習が始まった。新しい小学校教科書には、今まで中学校で扱ってきた教材も含めて、かなりたくさんの古典学習材が登場した。検定に通った五社の教科書における古典学習材を分類・比較して、これからの小学校古典の方向性について考えてみた。

平成 23 年度使用小学校国語教科書五社にみる古典学習教材

	光村図書	教育出版	東京書籍	学校図書	三省堂
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (ア)昔話や神話･伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。					
第一学年	**昔話･神話･伝承** 〇「おむすびころりん」 〇むかしばなしがいっぱい 〇きいてたのしもう 「まのいいりょうし」 〇おはなしをたのしもう 「たぬきの糸車」	**昔話･神話･伝承** 〇文化 むかしのおはなしをたのしもう 「天にのぼったおけやさん」	**昔話･神話･伝承** 〇日本のことのは むかしばなしをたのしもう 〇むかしばなしをよんでもらおう 「花さかじい」	**昔話･神話･伝承** 〇むかしばなしをよもう 「うみの水はなぜしょっぱい」	**昔話･神話･伝承** 〇むかしばなしをたのしもう 「いなばの白うさぎ」 （作みやかわひろ）
第二学年	**昔話･神話･伝承** 〇十二支のはじまり 〇聞いてたのしもう 「三まいのおふだ」 〇きいてたのしもう 「いなばの白うさぎ」 （文なかがわりえこ） **ことわざ･慣用句･故事成語** 〇きせつのことば 「いろはかるた」 **歳時記関係** 〇きせつのことば 「十二支」 「春の七草」	**昔話･神話･伝承** 〇文化 むかしのお話を楽しもう 「かさこじぞう」 〇文化 むかしのお話を読む 「いなばのしろうさぎ」 （文ふくながたけひこ）	**昔話･神話･伝承** 〇むかし話を楽しんで読もう 「かさこじぞう」 ･むかし話を読もう 〇日本の言の葉 言いつたえられている お話をしろう 「でいだらぼっちのお話」 「やまたのおろちのお話」 「いなばの白うさぎのお話」 「海さち山さちのお話」 **歳時記関係** 〇日本の言の葉 おばあちゃんに聞いたよ 「十二支」 「春の七草」 「小の月」 「いろはうた」	**昔話･神話･伝承** 〇ようすを思いうかべよう 「かさこじぞう」 〇むかしの物語をたのしもう 「ヤマタノオロチ」 〇お話を作ろう ･つづき落語ばなしを作ろう	**昔話･神話･伝承** 〇むかし話を楽しもう 「かさこじぞう」 〇昔話を知ろう 「ももたろう 「さるかに合戦」 「ぶんぶく茶がま」 「花さかじいさん」

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（中学年）
（ア）易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたりリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
（イ）長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

第三学年	**昔話・神話・伝承** ○聞いてたのしもう 「ばけくらべ」 **短歌・俳句** ○声に出して楽しもう ・芭蕉3句 ・蕪村3句 ・一茶3句 ・良寛2首 ・紀友則1首 「いろは歌」 ○百人一首を楽しもう ・紀貫之1首 ・伊勢大輔1首 ・小野小町1首 ・持持天皇1首 ・清原深養父1首 ・天智天皇1首 ・藤原顕輔1首 ・文屋朝康1首 ・藤原良経1首 ・凡河内躬恒1首 ・坂上是則1首 ・清少納言1首 ・紫式部1首 ・僧正遍照1首 ・小式部内侍1首 ・平兼盛1首 ・源兼昌1首 「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」7首	**短歌・俳句** ○文化 俳句を読もう ・一茶2句 ・芭蕉2句 ・虚子１句 ・橋間石１句 ・蕪村１句 ・高野素十１句 ・芥川龍之介１句 ・水原秋桜子１句 ・炭太祇１句 ・子規１句 ・宝井基角１句 ・星野立子１句 ・原田種茅１句 ・夏目漱石１句 ・杉山作風１句 ・田捨女１句 ○文化 日本語のひびきにふれる 「俳句に親しむ」 ・一茶１句 ・蕪村１句 ・高野素十１句 ・山口誓子１句 ・芭蕉1句 ・子規1句 ・汀女1句 ・炭太祇1句 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○文化 日本の文化に親しむ 「ことわざ・慣用句」 ・調べて、使い方を考える。 ・使った文を作る。	**昔話・神話・伝承** ○読書の部屋 「じゅげむ」 **短歌・俳句** ○日本の言の葉 俳句に親しもう ・蕪村2句・一茶2句 ・芭蕉1句・子規1句 ・虚子１句 ・村上鬼城1句 ・芥川龍之介１句 ・高野素十１句 ・橋本多佳子1句 ・水原秋桜子１句 ・山口誓子１句 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○日本の言の葉 慣用句を使ってみよう ・慣用句の意味を調べよう ・「慣用句カード」を作ろう ・慣用句をたくさん使ってみよう	**短歌・俳句** ○言葉のリズムを感じてみよう 「俳句」 ・芭蕉１句 ・蕪村１句 ・一茶１句 ・田捨女１句	**昔話・神話・伝承** ○何をしているのかな 「鳥獣戯画」 **短歌・俳句** ○声に出して読もう ―俳句 ・芭蕉2句 ・蕪村2句 ・一茶2句 ・子規2句 ○言葉で遊ぼう ・辞典を使って **ことわざ・慣用句・故事成語** ○楽しい書き方を考えよう 「カルタを作ろう」 「いろはガルタ」とことわざ **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○読書の森で 「星取り（笑い話）」 「いろは歌」 「竹取物語」 ・冒頭　・月に帰る場面

	歳時記関係 ○きせつの言葉 「春の楽しみ」「夏の楽しみ」 「秋の楽しみ」「冬の楽しみ」 ○かるたについて知ろう （いろはかるた、百人一首、 地方のかるた）	**歳時記関係** ○文化：きせつと言葉 ・八節・年中行事			
第四学年	**昔話・神話・伝承** ○聞いて楽しもう 「額に柿の木」 ○聞いて楽しもう 「茂吉のねこ」 **短歌・俳句** ○声に出して楽しもう ・一茶1句 ・蕪村1句 ・芭蕉1句 ・正岡子規1句 ・高浜虚子1句 ・中村汀女1句 ・光孝天皇1首 ・山部赤人1首 ・蝉丸1首 ・石川啄木1首 ・与謝野晶子1首 ・佐佐木信綱1首 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○慣用句 ○「ことわざブック」を作ろう ○知ると楽しい「故事成語」 「蛇足」「五十歩百歩」 **歳時記関係** ○きせつの言葉 「夏近し」「夏さかん」 「秋深し」「春立つ」	**昔話・神話・伝承** ○本の世界を広げて読む 落語「ぞろぞろ」 ○落語「寿限夢」 **短歌・俳句** ○文化 日本語のひびきにふれる 「短歌の世界」 ・柿本人麻呂1首 ・藤原敏行1首 ・藤原定家1首 ・良寛1首 ・与謝野晶子1首 ・石川豚木1首 ○文化 「いろはうた」 ○文化 「百人一首」を読もう 「百人一首」 ・柿本人麻呂1首 ・山部赤人1首 ・安倍仲麻呂 ・光孝天皇1首 ・源経信1首 ・藤原顕輔1首 ・藤原実定1首 「かるた遊び」 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○文化 日本の文化に親しむ「故事成語」 「五十歩百歩」「漁夫の利」 **歳時記関係** ○文化 「月の名前」	**短歌・俳句** ○日本の言の葉 「百人一首」を声に出して読んでみよう ・能因法師1首 ・持統天皇1首 ・山部赤人1首 ・猿丸大夫1首 ・安部仲麿1首、 ・光孝天皇1首 ・紀友則1首 ・紀貫之1首 ・左京大夫顕輔1首 ・後徳大寺左大臣1首 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○日本の言の葉 「ことわざブック」を作ろう ・故事成語について知ろう 「五十歩百歩」	**短歌・俳句** ○言葉から風景を想像しよう 「百人一首」 ・山部赤人1首 ・小式部内侍1首 ・能因法師1首 ・後徳大寺左大臣１首 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○すじ道を立てて書く 「負けるが勝ち」 ○言葉のいずみ ・ことわざ・故事成語・慣用句	**昔話・神話・伝承** ○読書の森で ・落語を知ろう「初天神」 「長屋の花見」「じゅげむ」 ○落語「じゅげむ」 **短歌・俳句** ○声に出して楽しもう ―短歌 ・柿本人麻呂1首 ・紀友則1首 ・伊勢大輔1首 ・源実朝　1首 ・良寛1首 ・橘曙覧1首 ・与謝野晶子1首 ○読書の森で 「小倉百人一首」 ・持統天皇1首 ・山部赤人1首 ・安倍仲麿1首、 ・紀友則1首 **ことわざ・慣用句・故事成語** ○想ぞうをふくらませよう 「故事成語の物語」 「漁夫の利」 **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○読書の森で 「浦島太郎」

伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（高学年）
（ア）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
（イ）古典について解説した文を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

第五学年	**昔話・神話・伝承** ○聞いて楽しもう「雪女」				**昔話・神話・伝承** ○読書の森で ・落語「まんじゅうこわい」
			短歌・俳句 ○詩と俳句を味わおう ・山のあなた ・芭蕉1句 ・虚子１句 ・山口誓子１句 ・水原秋桜子１句 ・黒田杏子1句	**短歌・俳句** ○短歌・俳句を作ろう ・良寛１首 ・一茶１句	**短歌・俳句** ○表現のよいところを見つけ合おう 「句会を楽しむ」
	古文・漢文・近代以降の文語調の文章 ○詩を楽しもう 「われは草なり」	**古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○思いをこめて 「素朴な琴」「鳴く虫」 「はたはたのうた」「雪」	**古文・漢文・近代以降の文語調の文章**	**古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○言葉のいずみ 「文語と口語」	**古文・漢文・近代以降の文語調の文章**
	○声に出して楽しもう ～今も昔も～ 「竹取物語」冒頭	○文化 日本の文化を考える 「物語」を楽しむ 「竹取物語」冒頭 「源氏物語」解説	○日本の言の葉 古文を声に出して読んでみよう 「竹取物語」冒頭		
	「平家物語」冒頭	「平家物語」冒頭	「平家物語」冒頭 「徒然草」序段		○読書の森で 「平家物語冒頭」
	「枕草子」 ・春はあけぼの		○日本の言の葉 古文に親しもう 「枕草子」 ・春はあけぼの ・九月のつごもり ・ふるもの	○随筆を書こう ・わたし風「枕草子」 「枕草子」 ・春はあけぼの	
	○「徒然草」 ・百九段「高名の木登り」	○古典の言葉にふれよう 「更科日記」冒頭 「源氏物語」冒頭 「伊曽保物語」冒頭 ・はととありのこと ○文化 日本語のひびきを味わう ・漢文に親しむ			○読書の森で ・漢詩「春暁」「絶句」
	○声に出して楽しもう 「論語」	「春暁」「静夜思」 「論語」「大学」 ○漢文を読もう 「春夜」「江南の春」 「山亭の夏日」			
		古典について解説した文章 ・狂言「附子」全文 「人形浄瑠璃」		**古典について解説した文章** ○言葉の文化に親しもう ・小野篁和歌 「宇治拾遺物語」	**古典について解説した文章** ○狂言「しびり」 ○「能・狂言を知ろう」

	歳時記関係 ○季節の言葉 「春から夏へ」「夏の日」 「秋の空」「冬から春へ」				**歳時記関係** ○言葉の図鑑 「写真歳時記」
第六学年	**昔話・神話・伝承** ○聞いて楽しもう 「河鹿の屏風」 **短歌・俳句** ○短歌を作ろう 「たのしみは」 ・俳句を作ろう （季語の紹介） **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○声に出して楽しもう 「天地の文」（福澤諭吉） ○狂言を楽しみ音読しよう 「柿山伏」	**短歌・俳句** ○短歌・俳句を作ろう ・俳句の作り方 ・短歌の作り方 「短歌と俳句」 ・俵万智1首 ・志貴皇子1首 ・芭蕉1句・蕪村1句 ・柿本人麻呂1首 ・橘曙覧1首 ・芝不器用1句 ・江戸古川柳4句 **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○文化：日本語のひびきを味わおう 「枕草子」 ・春はあけぼの ○文化：伝えられてきた作品「徒然草」序段 「おくのほそ道」冒頭 「アイヌ神謡集」 「おもろそうし」（沖縄） ○日本の名作 「吾輩は猫である」 「山椒大夫」 「蜘蛛の糸」 「小諸なる古城のほとり」	**短歌・俳句** ○詩と短歌を味わおう 「短歌」 ・与謝野晶子1首 ・子規1首 ・北原白秋1首 ・俵万智1首 ・東直子1首 ・穂村洋1首 ○子ども句会を開こう 「六年生が作った俳句」 「俳句歳時記」 ・短歌を作ってみよう **古文・漢文・近代以降の文語調の文章**	**短歌・俳句** ○詩を書こう ・「連詩」を発見する ・宇宙短歌を作ってみよう ・連詩に取り組もう **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○言葉のリズムやひびきを楽しもう ・文語詩を味わおう 「やしの実」	**短歌・俳句** ○表現をくふうして楽しもう 「短歌を作る」 **古文・漢文・近代以降の文語調の文章** ○日本の随筆 「枕草子」 ・春はあけぼの ○読書の森 「枕草子」 ・うつくしきもの 「徒然草」冒頭 ○読書の森 「徒然草」 ・八つになりし年 「おくのほそ」冒頭

	○季節の言葉 「春暁」「静夜思」 **古典について解説した文章** ○伝統文化を楽しもう 「伝えられてきたもの」 ○ものの見方を広げよう 『鳥獣戯画』を読む **歳時記関係** ○季節の言葉 「春は、あたたか」 「夏は暑し」 「秋は人恋し」 「冬は春の隣」	**古典について解説した文章** ○文化：日本の文化を考える 「言葉は時代とともに」 ・夏目漱石「坊ちゃん」 ・芥川龍之介「杜子春」 正岡子規2句、2首 「万葉集」 ・山部赤人1首 ・柿本人麻呂1首	○日本の言の葉 漢文を読んでみよう 「百聞は一見にしまず」 「春暁」 「論語」「十七条の憲法」 **古典について解説した文章** ○豊かな日本語の使い 手になろう ・雨のいろいろ ○伝統芸能に親しもう 「能」「狂言」「歌舞伎」 「落語」 ○言葉は変わる 「竹取物語」文語解説	○漢詩を味わおう 「胡隠君を尋ね」	○声に出して読もう ―漢文「論語」 **古典について解説した文章** ○「歌舞伎・文楽を知ろう」 ○言葉の図鑑 「古典を絵本で」 **歳時記関係** ○言葉の図鑑 「こよみってなに？」 「四季の言葉」

【調査対象資料】○光村図書：かざぐるま他（著作者　宮地　裕他４１名　平成２２年３月１６日検定済）
○教育出版：ひろがる言葉（著作者　田近洵一他３９名　平成２２年３月１６日検定済）
○東京書籍：新しい国語　（著作者　小森茂　他４３名　平成２２年３月１６日検定済）
○学校図書：小学校　国語（著作者　浜本純逸他３２名　平成２２年３月１６日検定済）
○三省堂　：小学生の国語（著作者　中洌正堯他３７名　平成２２年３月１６日検定済）

１．　昔話・神話・伝承

まず、学習指導要領小学校国語科の中で、「昔話・神話・伝承」について触れた指導事項である。低学年において次のように示されている。

（ア）昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

昔話については、各教科書会社とも１・２年生で繰り返し指導できるように、教材を配当している。「おむすびころりん」「かさこじぞう」といった、従来から扱われてきた教材に加えて、「花さかじいさん」など、以前の教科書よりも昔話の数が増えているが、その中でも光村図書は、高学年までの各学年に昔話を１作品以上配当している。５年生に配当した「雪女」などは、発達段階を意識したユニークな教材である。また落語につながるお話もかなり種類が増えている。「じゅげむ」「額に柿の木」「ぞろぞろ」に加え、「初天神」「長屋の花見」「まんじゅこわい」など、小学生に親しみやすい内容のものが、中学年以上でも配当されている。低・中学年で落語のお話に親しんでおくことで、高学年において「古典芸能」について触れるきっかけになると考える。お話のおもしろさについて興味・関心をもった児童が、能や狂言、歌舞伎、文楽などと同じように、落語が人から人へと語り継がれてきた文化であることにきっと気が付くではずである。

今回の改定で新しく加わった内容の一つである「神話」について、触れておく。５社中４社が教材として配当しているのが、「いなばの白うさぎ」である。ただし、光村図書はなかがわりえこさん、教育出版はふくながたけひこさん、三省堂はみやかわひろさんの書き下ろしが教材となっている。他には「ヤマタノオロチ」が２社で教材として扱われている。東京書籍のように、「言いつたえられているお話をしろう」として、「海さち山さち」や「でいだらぼっち」などの作品も紹介されている。神話や伝承の底本となるのは、「古事記」や「日本書紀」そして「風土記」である。これらに関しては、絵本などと組み合わせて教材として楽しく指導していくことが大

切である。挿絵からお話の内容を想像して、親しみをもたせていきたい。

２． 短歌・俳句

次は、学習指導要領小学校国語科の中で、「短歌・俳句」について触れた指導事項である。中学年において次のように示されている。

（ア）易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたりリズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

短歌・俳句については、従来までの教科書とは扱いが大きく変わっている。従来はどの教科書会社も、６年生を中心にして、短歌や俳句を教材として配当してきた。その際、内容的としても古代から近代までの代表作品を取り上げて音読を中心に学ばせるスタイルをとってきた。しかし、学習指導要領の改訂を受けて、どの教科書も軒並み、３年生から教材が登場している。教材の配列の仕方は大体二通りである。一つのパターンは３・４年生を通して年間２回ほど単元を設定して、俳句と短歌の両方に繰り返し親しみをもたせるやり方である。光村図書はこのパターンである。もう一つのパターンは、３年生で俳句を取り上げ、４年生で短歌を取り上げて学習を深めるパターンである。他の４社はこのような教材の配当をしている。またどの会社も共通しているのは、俳句では、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の作品を中心に取り上げている。正岡子規の作品も比較的多く登場している。短歌については、（小倉）百人一首を５社とも積極的に取り上げている。やはり、中学年での出会いを意識した場合、児童が親しみやすいかるた遊びにつながる百人一首は、教材としても扱いやすいものと思われる。ちなみにどの会社でも教材として登場している短歌は、山部赤人の「田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」である。　短歌・俳句に関しては、高学年でもう一度登場している。これは、高学年の書くことの言語活動例に「経験したこと、想像したことなどを基に、詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆などを書いたりすること」と示された内容に関係している。これを受けて、どの会社も俳句や短歌をつくる目的で、近代短歌の代表作品が紹介されている。また、「句会」などを開いて楽しむ言語活動が具体的に示されている。

３． ことわざ・慣用句・故事成語

「ことわざ・慣用句・故事成語」について学習指導要領小学校国語科の中では、次のように指導事項が触れられている。

（イ）長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

「意味を知り、使うこと」とあるように、どの会社も生きて働く言葉として、ことわざや慣用句が学習できるように工夫が凝らされている。光村図書と東京書籍はほぼ同じ単元名「ことわざブックを作ろう」でことわざを集めたり、調べたり、そしてことわざを使って短文を作る活動を意識した内容になっている。慣用句を３年生で扱い、４年生でことわざや故事成語を扱っている会社もあるが、４年生でまとめて扱っている会社もある。故事成語に関しては、どの会社も４年生で扱い、内容も「五十歩百歩」「漁夫の利」「蛇足」などを中心に教材として取り上げている。また東京書籍や三省堂などは「いろはかるた」とことわざの学習をつないだ扱いが紹介されている。

なお、ことわざを使った短文の例として、以前実践した児童の作品を紹介しておく。

●もうすぐサッカーのし合だからうどんを食べよう。「はらがへってはいくさができぬ。」だからね。
●天災はわすれたころにやってくるから日ごろからじゅんびをしておこう。
●おじいちゃんの大事なはこをこわした上にぼんさいもわって、火に油を注いでしまった。
●計画だけは立ぱにできても、三日坊主では困るとお母さんが言った。
●久しぶりに早起きしたらいいテレビが見られたから、早起きは三文の得だ。
●商店がいの福引でとってもねだんの高い人形があたった。しかし花より団子というから、どうせ当たるならおいしい食べ物がよかった。
●お兄さんは有名なサッカ―選手のサインをユニフォームにもらった。でも兄はサッカーに興味がないので、ねこにこばんだね。
●となりの家のおじいさんは子どもにとってもあまい。子どもを成長させたいなら、かわいい子には旅をさせようというから、きびしくした方がいい。

４．　古文・漢文・近代以降の文章

「古文・漢文・近代以降の文章」について触れた指導事項は高学年で登場する。

（ア）親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

古文に関しては、どの会社も共通的に取り上げている教材がはっきりしている。まず、全社で教材として取り上げているのは、「枕草子」の「春はあけぼの」である。ただし、登場学年に関しては、３社が５年生、２社が６年生と分かれている。音読を中心に親しむ教材として扱う流れが多い中で、「随筆」の学習も兼て学校図書と三省堂は扱っている。特に学校図書は、わたし風「枕草子」というテーマで、学習のゴールを「随筆を実際に書く」こととしている。以前まで中学校などで見られた単元の流れである。「枕草子」に関しては、他にも「うつくしもの」や「九月のつごもり」などが教材化されている。

次に「平家物語」の冒頭も教材として４社で取り上げられている。しかも各社とも５年生で登場している。音読を中心に暗唱までも視野に入れて学習できる可能性があり、場合によっては群読などの活動も試みることができそうである。その他としては、「竹取物語」の冒頭もやはり４社で取り上げられている。「徒然草」もやはり、数社で教材として取り上げられているが、各社とも扱った段が違うのが特徴である。

また教育出版に関しては、「古典の言葉にふれよう」ということで、「源氏物語」や「更科日記」の冒頭などを取り上げて音読で親しむ流れとなっている。

漢文に関しては、４社で「春暁」と「論語」を教材として取り上げている。その他「静夜思」や「春夜」なども取り上げられているが、東京書籍が教材として扱っている「十七条の憲法」や「百聞は一見にしかず」は、歴史学習やことわざの学習とつなげて指導できそうな教材である。

近代以降の文語調の文章として、福澤諭吉の「天地の文」や島崎藤村の「やしの実」「小諸なる古城のほとり」なども各社それぞれに扱っている。

５．　古典について解説した文章

「古典について解説した文章」について触れた指導事項も高学年のみに登場する。

（イ）古典について解説した文を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

この教材に関しておおむね３社は伝統芸能を中心に解説を加えている。昔話の所で触れたが、「歌舞伎」や「能」「狂言」「文楽」そして「落語」が人々によって伝えらてきたことが書かれている。なお狂言に関しても「柿山伏」「附子」に加えて「しびり」なども教材として初めて登場している。なお、近代文学から万葉集までの日本の文化を解説している教育出版の取り上げ方は大変興味深いものである。具体的には、清少納言の「枕草子」を足掛かりに、夏目漱石の「坊ちゃん」や芥川龍之介の「杜子春」、正岡子規の短歌や俳句について解説を加えている。山部赤人と柿本人麻呂を代表として「万葉集」までも例にあげて、言葉の文化について解説をしている。東京書籍の「言葉は変わる」も「竹取物語」を例にとって、今と昔の言葉の違いに関して解説を加えている。

６．　歳時記関係

さて、その他として、歳時記に関しての各会社での扱いについて触れておく。まず、光村図書であるが、低学年から季節の言葉を学ぶ機会を単元化している。「春夏秋冬」で触れておきたい言葉が、教科書の教材としてかなり散りばめられている。日常において、季節を感じる言葉と触れ合う機会がだんだんと減っている時代において、取り出して季節の言葉を扱うことには大きな意味がある。また、季節の言葉をたくさん知ることは、俳句をつくる際の学びに広がっていくはずである。光村図書の工夫は、季節の独自の言葉が入った俳句や短歌、そして漢詩を取り上げて言葉を広げている所である。

その他を見てみると、「十二支」の話や「春の七草」について取り上げている会社も多い。また「月の　名前」や「いろはうた」、「年中行事」や「こよみ」などを学ぶことは、生涯古典を学ぶための基礎になるはずである。

「写真歳時記」などといった教材もあるので、現代の生活と結びつけながら、カレンダーなどに見られる歳時記の言葉に注目して、日常の国語科学習の中で扱っていく必要があると考えられる。

Ⅱ　実践編

学習材「春暁」

指導計画（読むこと　１時間）

学習活動と内容	指導の手だて
1　漢詩「春暁」の白文（漢字だけの状態）の読み方を予想した後、書き下し文で読み方を知り音読をして楽しむ。 2　既習の漢字からイメージを広げる。 「春」「鳥」「夜」「風」「雨」「花」「知」「多」「少」 3　書き下し文の読み方を知る。 4　漢詩のリズムを楽しみながら読む。	○　最初に白文（漢字だけの状態）だけを提示し、知っている漢字から様子を想像させる。 ○　何度も音読してイメージをもてるように、読み方がわかる書き下し文を提示する。 ○　書き下し文からイメージができない児童には絵などを使って、内容の大体を簡単に説明する。

小学生に「漢詩」を提示する際のポイント！

①既習の漢字を手がかりに、漢字辞典を使って、読み方を予想させる。

②正しい読み方を紹介する際に、視聴覚教材を積極的に活用する。今回は、電子黒板のデジタルコンテンツを使用して、漢詩が伝える風景を紹介しながら説明する。

③音読のパターンを工夫して（一斉、ペア、グループ）リズムよく何度も繰り返す。

④漢詩の一部を隠しながら、暗唱を楽しませる。

児童の学習感想

●最初は読み方がわからなかったけど、漢字辞典で調べると「こう読むんだ。」と思ったりいしておもしろかったです。●私は、古典はむずかしいと思ったけど、慣れるとスラスラ読めてとても楽しかったです。●漢詩の意味を知ると、たった四行にたくさんの思いが込められていてびっくりしました。

古典の世界にふれよう

名前（　　）

春暁

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

春の眠りは気持ちがよくて、朝になったのも気づかなかった。
あちこちで鳥の鳴く声が聞こえてくる。
そういえば、昨夜は風や雨が強かった。
庭の花はどのくらい散っただろうか。

春ぎょう
春みん　あかつきをおぼえず
しょしょ　てい鳥を聞く
夜来　風雨の声
花落つること　知る多少

授業記録

６　月　　２９　　日　（　火　）　　２　校時		授業者　小山
教科名　国語	単元名　「　古典の世界に親しもう　」	
時間	学習活動と内容	指導の手立て （工夫や発問、ちょっとしたコツなど）
５	１．「古典」という言葉を漢字辞典で調べる ２．「春暁」の題名を提示 →どう読むか推測 ３．「春暁」の白文を子どもに配布 →漢字辞典を使いながら読み方を想像	○辞書の引き方を復習（部首索引・音訓索引など、場に応じた引き方を選んでいるか確認） ○漢詩を読むことへの興味 ○習った漢字「春」があるから、読めるかもしれないと、ハードルを下げている？ ○先生：漢字辞典を活用するよう声かけ ○先生：「全部を調べるのではなく、知っている漢字は想像して振り仮名をつけていいよ」
５	４．自分の読みの予想を一行ずつ発表	○間違えたかどうかは問わない！読めたことをほめている！ ○知っている漢字が多い３・４行目は、全員で予想した読みを白文の下に書いてみる。
５	５．答え合わせ	○電子黒板で範読を聞かせる。 ○先生：「自分たちで読める読み方もあるけど、特別な読み方もあるんだよ。」→音・訓読みが交ざっていることをほのめかす
３	６．「春暁」と漢詩についての説明ＶＴＲ	○地図や写真などの資料と、簡潔にまとめられた電子黒板のコンテンツを活用することで、子どもたちも興味をもって見ていた。
２０	７．「春暁」の書き下し文を配布→音読 ①電子黒板の範読に続いて ②範読と一緒に ③自分自身で３回音読したら立つ。 ④書き下し文を見ながら全員で音読。 ⑤黒板に貼ってある白文だけで音読！ （書き下し文は電子黒板に表示） ⑥黒板の白文を少しずつ隠しながら読む →最後は全部隠す！ ⑦一行ずつ男女交互に音読 ⑧黒板も電子黒板も見ないで、最後に暗唱	○いろいろな音読のさせ方をしている。 ○電子黒板と黒板をうまく使っている。 ○白文を少しずつ隠すことで、子どもは「全部覚えるぞ！」という意欲がわいている。
２	８．中国語で聞く。	電子黒板の範読活用。本場の発音を聞き、子どもたちも日本語との違いにびっくりしていた。
５	９．今日の学習感想	○時間のある子は、今の気分を短歌や俳句で表わす。時間を有効に使わせている！

学習材「平家物語」（冒頭）

１．　指導事項と言語活動

（１）指導事項

○自分思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。　（「読むこと」ア）

○親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

【伝統的な言語文化に関する事項アー（ア）

（２）言語活動

○親しみやすい古典を読む。

・古典のもつ独特のリズムや美しい語調を味わいながら、声の大きさ、間の取り方などに気を付けて音読させたい。

・『平家物語』の冒頭は音読や朗読に適した美しい語調が散りばめられた文章であり、内容の大体を理解させて親しんで読ませたい。

２．　単元（題材）の目標

○音読に適した親しみやすい古文『平家物語』を取り上げて、古典のもつ独特のリズムや美しい語調に興味をもち、内容の大体を理解しながら音読しようとしている。

○音読や群読を楽しみながら、古典の世界に親しもうとしている。

３．　「しっかり教え、しっかり引き出す指導」のために

（１）子どもの実態

子どもたちは今まで、「竹取物語」や「枕草子」などの古文の冒頭に親しんできた。また漢詩「春暁」を音読した際は、一時間の学習中にほとんどの子どもたちが暗唱していた。現代文で経験してきた音読や群読を古文や漢文の学習でも取り入れ、自分の工夫が伝わる音読や群読ができるように指導していく。

（２）指導の手だて

「平家物語」はもともと琵琶法師が語りながら伝えられてきた話である。その冒頭「祇園精舎」はたいへん暗唱しやすい文章である。平家物語は作者が不詳であるため、これを語る琵琶法師たちが、それぞれにいろいろなアレンジをして語り継がれてきた。現在は文字として形になってきたが、もともと声に出して読まれてきたものである。子どもたちがまず声に出して読むことで、冒頭のリズムの良さに気付かせたい。後半には群読を取り入れた。友達と声を重ねて響き合う心地よさを感じながら、繰り返し音読することになり、自然に暗唱することができるようにする。なお古典の世界を豊かにイメージさせるためにデジタルコンテンツ「わくわく古典教室」使い、ＩＣＴの効果的な活用を試みる。

４．　評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①　『平家物語』冒頭を音読や群読で楽しむことを通して、古典の世界に親しもうとしている。	②　古典の世界を味わいながら、自分の思いが伝わるように音読や群読している。	③　和漢混合体などの古典独特の言葉やリズム、語調に興味をもちながら音読している。

５．　本時の目標

○「平家物語」の冒頭部分の大体の意味をとらえながら、工夫して音読や群読をしている。

６．　本時の展開

学習活動と内容	評価規準と指導の手だて
1　今まで学習した古典の作品を暗唱する。 （枕草子「春はあけぼの」、漢詩「春暁」）	○友達の音読を聞きながら、作品のそれぞれのイメージを思い浮かべて暗唱するよう促す。
2　今日のめあてをつかみ、学習の見通しをもつ。	
平家物語「冒頭」を読み、友達と声を合わせて群読に挑戦しよう	
3　「平家物語」ついて知っていることを発表する。 ・源氏と平氏が戦う話だと思います。 ・平清盛の一生についての話じゃないかな。 ・源義経が活躍する話。	○社会科で学習したことを思い出すように声かけ、時代と人物についておさえる。
4　電子黒板に提示された冒頭を見ながら、いろいろなパターンで音読する。 ・デジタル教材の範読の後に「追い読み」する。 ・男女交互に「追い読み」する。 ・男女交互に読む。 ・班ごとに一行ずつ読む。	○デジタル教材「わくわく古典教室」を活用して、集中して音読を楽しませる。 ○教材を配り、現代語訳を読みながら大体の意味をつかんでいるか確認する。 ○友達と声を合わせる楽しさを味あわせる。 ○音読する際、難しい言葉や、気になった言葉はどんどん線を引くように促す。
5　デジタル教材を見て、「平家物語」の大体の内容について知る。	○琵琶法師の語りや平家の栄華と滅亡についてイメージしたことを音読に活かすように促す。
6　音読から暗唱に挑戦する。	○ＩＣＴの効果を活用して、教材文の一部が隠された冒頭を音読するよう声をかける。
7　3つのグループに分かれ、冒頭部分の群読に取り組む。 ・限られた時間の中で、友達と相談しながら冒頭部分を群読する。 ・「祇園精舎」「諸行無常」「沙羅双樹」などの四字熟語は分担して読む。 ・人数をだんだん増やして読む。	○群読のポイントを提示する。 ・読む速さとリズム ・声の調子 ・読む分担と人数
8　グループごとに冒頭部分の群読を発表する。 ・群読する前に、こだわりのポイントを紹介する。	○学習を振り返り、感想をもたせる。 評価規準①②③ 平家物語の世界を味わいながら、工夫して音読や暗唱したり、群読を楽しんだりしている。 【評価方法：発言の内容・音読の様子】

小中連携を意識した古典学習の単元開発

ー『万葉集』を中心としてー

森　顕子

１．はじめに

これからの古典教育は小学校から中学校へと以前にも増してつながっていく。中学校の立場から、『万葉集』を例として、小中の連携・交流といった視点から、小中をつなぐ古典学習を提案したい。

２．学習指導要領における小学校での古典の位置づけの変化

現行の学習指導要領は、平成 20（2008）年３月に告示された。伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項が位置づけられたことによって、今後の古典学習の有り様は、従来から大きく変化した。

まず、小学校の旧学習指導要領（平成 10 年版、以下同）においては、第５学年及び第６学年に「文語調の文章に関する事項」として、「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とあるのみであったが、現行学習指導要領（平成 20 年版、以下同）においては、低、中、高学年それぞれに具体的な学習内容が示されている。

また、中学校についても、旧学習指導要領においては、「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「読むこと」に関する指導の留意点の一項としてまとめて記されていたものが、やはり各学年に具体的に学習内容が示されている。

つまり、古典学習については、新学習指導要領の伝統的言語文化と国語の特質に関する事項のもと、教材をはじめとして、今までの中学校での学習事項の一部が小学校に位置付けられることとなったのである。これにより、今までの、古典学習の入門期は中学校からという意識は、小学校を受けて新しい位置づけが成されたと捉えていくことも考えられよう。それはすなわち小学校での古典学習との出合いを踏まえて中学校で古典学習とより親しめる内容を考えていく必要がある、と言い換えることもできる。もはや古典学習は中学校が入門であるとは言えなくなり、内容的にも小中連携を意識することはますます必要とされているのである。

３．『万葉集』の和歌の小中教科書掲載状況の分析

そこで、新旧の小中教科書５社における『万葉集』の和歌の採択状況について、下表にまとめた。記号は以下の通りである。斜線上段が小学校、下段が中学校。〇は新版で採択されたもの。

◎は旧版も新版も掲載されているもの。⊖は旧版のみ掲載され、新版では採択されなかったもの。△は表記も含め、百人一首の扱いで掲載されているもの。教育出版の小学校で○△とあるのは、旧版では百人一首の表記での掲載であったが、新版では、『万葉集』としての採択であることを示している。また、掲載歌数の（　）は、百人一首の表記で掲載されているものの数である。

中学校において『万葉集』は、三大和歌集（『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』）の一つとして位置づけられ、３年生の教科書教材として、現行の五社のいずれにも採択されてきた。新学習指導要領を受けて、平成 24 年度より教科書も刷新されるが、下表の通り、『万葉集』の採択状況は、あまり変わらない。

採択された歌人はほぼ変わらないが、現行版との違いをみていくと、導入教材等で新しい歌人が増えていたり、同じ歌人の歌で差し替えられていたり、同じ歌人の歌が複数採択されていたものが一首にしぼられたりしている。

また、小学校においては、掲載歌は教育出版１社をのぞき、すべて百人一首としての扱いであり、『万葉集』としての扱いは薄い。光村図書は３年生に、他４社は４年生に位置付けられているが、教育出版では、一部が６年生に置かれている。旧版には掲載されていた百人一首に掲載されていない和歌については、東京書籍は柿本人麻呂「東の…」を、光村図書は「石走る…」をそれぞれ新版では採択しておらず、結局新版では教育出版１社のみが、以下の作品を『万葉集』の作品として掲載している。

小学校の百人一首の扱いも含めて教科書掲載歌を中学校のそれに重ねてみてみると、小中とも採択されている歌がある一方で、小学校で採択されていて中学校では採択されていない歌もあることがわかる。

４．小中連携を意図した授業設計

小川雅子の調査(注 1）によると、昭和以後現在まで、途切れることなく小中の教科書に採択されている『万葉集』の和歌は、次の 14 首であったが、平成 24 年版でそのうち２首

・　若の浦に 潮満ち来れば 潟をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る　山部赤人（巻六・919）

・　我がやどの いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも　大伴家持（巻一九・4291）

が落とされ、12 首となった。

・春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山　持統天皇（巻一・ 28）

・東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ　柿本人麻呂（巻一・ 48）

・近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ　柿本人麻呂（巻三・266）

・　天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ　雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は　山部赤人（巻三・317）

・田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にそ 富士の高嶺に 雪は降りける
山部赤人（巻三・318）

・　憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむそ

・　　山上憶良（巻三・337）
・　瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ いづくより 来りしものそ まなかひに
もとなかかりて 安眠しなさぬ　　山上憶良（巻五・802）
・銀も 金も玉も 何せむに 優れる宝 子にしかめやも　　山上憶良（巻五・803）
・石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも
志貴皇子（巻八・1418）
・春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に うぐひす鳴くも　　大伴家持（巻一九・4290）
・うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば
大伴家持（巻一九・4292）
・父母が 頭掻き撫で 幸くあれて 言ひし言葉ぜ 忘れかねつる　　防人歌（巻二〇・4346）

継続して採択されている理由はいくつかあるとは思われるが、残り続けたところに教材としての価値をみて、その中で現行の小学校の教科書に採択されている和歌を選び、授業設計も試みた。

現行の小学校の教科書での『万葉集』の採択状況は、次の通りである。

ア 志貴皇子　石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも
【教育出版】
イ 柿本人麻呂　東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ
【教育出版】
ウ 柿本人麻呂　近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ
【教育出版】
エ 持統天皇　春過ぎて 夏きにけらし 白たへの 衣ほすてふ 天の香具山
【東京書籍・光村図書・三省堂出版】
オ 山部赤人　田子の浦ゆ うち出でて見れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける
【教育出版】
田子の浦に うち出でてみれば 白たへの 富士の高嶺に 雪は降りつつ
【東京書籍・光村図書・学校図書・三省堂出版】

旧教科書の学年配当は、東京書籍のみ第５学年で、他の４社はすべて第６学年となっている。旧学習指導要領では第５学年及び第６学年に位置づけられていたわけであるが、現行の学習指導要領では、第３学年及び第４学年に「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。」とある。

つまり、音読を通して文語調の文章に親しみ言語感覚を養うから、「情景を思い浮かべる」という一歩踏み込んだところまで学習することを考えていくことになる。

（１）小中連携を意図した小学校における授業設計

活動の実際として、「和歌の作品世界を表現して楽しむ」ことからいくつか考えてみた。

①暗唱し、工夫して音読する。〈ア・イ・ウ・エ・オ〉

一人で読むだけではなく、グループや集団で声を合わせたり繰り返したりと工夫を凝らすことでリズムを楽しめる。

②暗唱し、歌の情景を表した短いお話を作る。〈ア・イ・ウ・エ・オ〉

言葉を手がかりにしながら、歌の情景を想像し、どんなストーリーがあるか、考える。一人で考えてもよいし、後でグループで作り上げていくこともできる。歌の景色の説明ができれば十分と考える。

③複合的に活動を組み合わせる。〈ア・エ・オ〉

（ａ）暗唱

（ｂ）作者の感情を児童の言葉で表す

（ｃ）動作化で表現

（ｄ）ポスター作成

例：ア

（ａ）まずは個々で暗唱することになる。発表の形態も工夫し、自分が選んだ歌以外の歌も暗唱できるようにしておく。できれば、グループ発表の前か後に、全員での暗唱を位置づけるとよい。

（ｂ）「春が来たね！」「うれしい！」「暖かくなるよ！」といった、具体性のない表現でよい。作者が歌に込めた想いのようなものを受け止めて表現する。

（ｃ）「水の流れる様子」「さわらびが伸びていく様子」等を体を動かして表現する。「景色を見ている作者」もイメージでき、表現できるとよい。

（ｄ）最もインパクトの強いものをポスターとして描く。ここでは、「さわらび」を絵で描けるとよい。ただし、複合的な活動とするなら、岩の間を流れていく雪解け水の様子や作者などをあわせてポスターにしても物語性が表現できる。

いずれの活動も複合的にしなければ効果が上がらない、ということではなく、集団や状況にあわせて組み合わせて行える。また、基本的には子どもたちに好きな歌を選ばせることとなるが、同じ歌を選んだ者同士で集まり、グループを作って合同で発表すると、表現もより豊かになると考えられる。

なお、ここでイとウをはずしたのは、作者の感情がこの歌だけからは読み取ることは難しいと判断した事による。

（２）小中連携を意図した小中の授業設計

和歌（『万葉集』）と再び国語の授業で出合うのは、中学校第３学年となる。小学校時代に楽しく学習したことを思い出せて、歌の情景がイメージできる状態であると、中学校での和歌への導入部分がスムーズに行える。

①一つの和歌を重ねて学ぶ

例：イ

小学校では、「東の野に朝の光がさすのが見えて、振り返ると月が沈んでいくことだ」という、「夜明けに月が見える美しい風景」を詠んだことがわかればよい。

また、言葉にも着目することも考えられ、「ひむがし」「かぎろひ」といった読み方がおもしろい、といった捉えができれば十分ではないか。

それを受けて中学校では、作者柿本人麻呂が、軽皇子（後の文武天皇）に随行し、軽皇子の父であった今は亡き草壁皇子（持統天皇の息子）との思い出の場所で、共に草壁皇子を偲んでいる時のことを詠んだ長歌の反歌４首の３首目であるという、歌の背景を学習する。歌の背景を知ることで、その歌の理解が深まることが実感されるわけである。

つまり、小学校では歌の情景を想像し、扱いとしては叙景歌的な感じでよいとして、中学校で二度目の出合いを果たしたときに、その背景を踏まえての作者の想いを知るという、同じ歌を扱うにしても切り口が違い、学びが違うことで意義は大きいと考える。

また、小中異学年交流の視点で見ると、（１）③にて提案した活動に、中学生が参加することによって、楽しく学ぶ、あるいは古典に親しむという点で有意義であると考える。

例えば、グループでの発表とした場合に、小中合同のグループを作って発表を試みたり、中学生が小学生の聴衆となったり、その逆になってみたり、様々な関わりを考えることができる。

②「七夕単元」の構想

現在まで続いている身近な年中行事である「七夕」は、小学校から中学校へ串を通すのに適当であると考えた。小学校で親しんだ昔話を既習事項として、伝説の由来を切り口とし、小６、中１、中２、そして中３の、４年間に渡る帯単元の終わりに『万葉集』の和歌群を位置付ける「七夕単元」を構想したのである。

これは、もとより、「牽牛織女伝説」から「七夕伝説」への変遷を古典学習の導入教材とすること、その変遷が具体的にわかりやすい『懐風藻』と『万葉集』の詩歌を学習材化することを試みてきていたという経緯がある（注２・注３）。そこで、既習事項を積み重ね、３年時に学習する『万葉集』の小単元（注４）に繋げていく形を設定した。

つまり、３年次に『万葉集』の学習の一部として、和歌を学ぶために、伝説から行事から一度に扱うのではなく、小学校での学習を基礎として１年次、２年次と、七夕の季節に沿って「七夕歌」に至る背景を学習するのである。そして、３年次の『万葉集』の学習時には、歌の背景にある伝説については既習となる。背景が既習となることで、「七夕歌」を学習する段階では、いくつかの「七夕歌」を通して、和歌の世界に主体的に取り組めるようになる単元として構想した。

また、「七夕歌」は『万葉集』中に 130 首以上あるので、予め観点を決めて選んでおく必要がある。

具体的な単元のあらましを以下に示す。

「七夕単元」

（1）小６：総合単元「七夕」

〈国語〉昔話の読み聞かせ

〈理科〉夏の大三角形、天の川

〈音楽〉童謡「たなばた」

〈年中行事〉七夕飾り・短冊作り

◎昔話の構造を理解し、作品世界に無理なく入れるように、昔話の読み聞かせをできるだけ行わせたい。その中で、季節感を大事にするという観点から年中行事につなげて、最近家庭ではなかなか行われなくなった、色紙で飾りを作り、願い事を書いた短冊を笹につるして、童謡を歌うといったことを体験できるとよい。

また、加えて、夏の大三角形と天の川を学習する際に、「織姫」「彦星」が、天の川を挟んで輝く琴座のヴェガと鷲座のアルタイルであることも確認させたい。

小学校の段階で、七夕がどんな行事であるか、星の伝説でその内容がわかるところまで時間がとれると、中学校での導入がスムーズになる。

（2）中１：「伝説の伝来」２時間

・導入「七夕に思う」（光村図書）

・牽牛織女伝説の背景

◎中国古来の伝説について、その内容と背景を知り、日本への伝来に興味をもつ。

（3）中２：「伝説の受け皿」２時間

・日本における星の伝説

・水辺の処女伝説

・相撲、祈雨行事（７月７日）

◎中国の伝説が日本に定着した素地について知り、受け入れの基盤に興味をもち、資料となる書誌に主体的に関わろうとする。

（4）中３：「伝説の変遷」３時間

・導入「七夕に思う」（光村図書）より

彦星と織女と今夜逢はむ天の川門に波立つなゆめ（巻十・2040）

・『懐風藻』から『万葉集』へ

・伝説を背景とした歌の主題

◎（1）～（3）の既習事項を踏まえて、『万葉集』に定着した伝説を通して、歌人の想いに、理解、共感し、和歌の主題を整理する。また、伝説の変遷・融合を意識した上で、あらためて七夕という行事の意味を考える。

５．おわりに

小中連携の視点は古典学習においても今後より大切になっていくと考えられる。その中でのいくつかの授業設計と単元構想を行ったが、実際に実践をどう積んでいくのかが今後問われることになる。しかし、内容を精選することで、『万葉集』の魅力を実感できる単元としても可能性が広がるように思われるし、小中に通す串として『万葉集』が有効に機能していくよう、これからも工夫を重ね、スパイラルに研究を継続していきたい。

【資料】

『万葉集』小中教科書掲載歌一覧表

歌人名	和歌	学校図書	教育出版	東京書籍	光村図書	三省堂出版
持統天皇	春過ぎて夏きたるらし 白妙の衣ほしたり天の香具山	⊖ ◎	 ○	△ 	△ ◎	△ ◎
額田王	君待つと我が恋ひ居れば 我が屋戸の簾動かし秋の風吹く		 ⊖	 ◎	 ◎	 ○
額田王	熟田津に船乗りせむと月待てば 潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな		 ○			
有間皇子	磐代の浜松が枝を引き結び 真幸くあらばまた還り見る	 ◎				
有間皇子	家にあれば笥に盛る飯を草枕 旅にしあれば椎の葉に盛る			 ○		
柿本人麻呂	東の野に炎の立つ見えて かへり見すれば月傾きぬ	 ◎	◎ 	⊖ ⊖	 ◎	 ⊖
柿本人麻呂	近江の海夕波千鳥汝が鳴けば 心もしのに古思ほゆ		○ ⊖	 ○		 ○
山部赤人	天地の分かれし時ゆ神さびて高く 貴き駿河なる富士の高嶺を天の原 振り放け見れば渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず白雲も い行きはばかり時じくそ雪は 降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は	 ◎			 ◎	 ◎
山部赤人	田子の浦ゆうちいでて見れば	△	○△	△	△	△

	真白にそ富士の高嶺に雪は降りける	◎	○		◎	◎
山部赤人	若の浦に潮満ち来れば潟をなみ 葦辺をさして鶴鳴き渡る			⊖		
山部赤人	春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ 野をなつかしみ一夜寝にける			○		
大津皇子	あしひきの山のしづくに妹待つと 我立ち濡れぬ山のしずくに					◎
石川郎女	我を待つと君が濡れけむあしひきの 山のしづくにならましものを					◎
山上憶良	瓜食めば子ども思ほゆ栗食めば まして偲はゆいづくより 来たりしものそまなかひに もとなかかりて安眠しなさぬ		◎	◎		
山上憶良	銀も金も玉も何せむに まされる宝子に及かめやも		◎	◎		◎
山上憶良	憶良らは今は罷らむ子泣くらむ そを負ふ母も吾を待つらむそ				◎	
東歌	多摩川にさらす手作りさらさらに なにそこの児のここだかなしき		◎		◎	⊖
東歌	信濃道は今の墾道刈株に 足踏ましなむ履着けわが背			◎		
防人の妻	防人に行くはたが背と問ふ人を 見るがともしさもの思ひもせず	◎	◎			
防人	韓衣裾に取りつき泣く子らを 置きてそ来ぬや母なしにして			◎		
防人	父母が頭かき撫で幸くあれて 言ひし言葉ぜ忘れかねつる				◎	⊖
大伴家持	うらうらに照れる春日にひばり上がり 心悲しもひとりし思へば		⊖	◎		
大伴家持	わが屋戸のいささ群竹吹く風の 音のかそけきこの夕かも					⊖
大伴家持	春の野に霞たなびきうら悲し この夕かげに鶯鳴くも	◎				
大伴家持	新しき年の始の初春の今日降る雪の いや重け吉事		◎		⊖	○
大伴家持	春の苑紅匂ふ桃の花					

	下照る道に出で立つ乙女				○	
作者不詳	彦星と織女と今夜逢はむ 天の川門に波立つなゆめ				○	
天武天皇	我が里に大雪降れり 大原の古りにし里にふらまくは後		○			
藤原夫人	我が岡の靈に言ひて降らしめし 雪のくだけし　ここに散りけむ		○			
志貴皇子	石走る垂水の上のさわらびの 萌え出づる春になりにけるかも		◎		⊖	
掲載歌数		(1)	4	(2)	(2)	(2)
	小(百人一首扱い)　中	7	10	9	10	9

【注】

（１）「中学校教科書に採用された万葉集教材の変遷－歌。作者。学習目標・単元。学習の手引きについて－」(『人文科教育研究』2006.10.19)

（２）森顕子「古典の導入教材の工夫（その１）―伝説の基盤―」(東京学芸大学附属竹早中学校紀要 28 号 1989)

（３）森顕子「古典の導入教材の工夫（その２）―詩歌に見られる伝説の変遷―」（東京学芸大学附属竹早中学校紀要 29 号 1990)

（４）森顕子「『万葉集』における単元開発－小中連携を意識した単元と導入単元の工夫」(『学芸国語教育研究』第 27 号 2009.12.１)

小中高連携教材としての『枕草子』

本　橋　裕　美

１．はじめに

平成 23 年度から小学校に導入された新指導要領の国語科には、「伝統的な言語文化に関する事項」が盛り込まれている。それに伴い、小学校の国語教科書には、昔話や俳句、狂言、いくつかの古典作品が載せられることになった（表１）。短歌や俳句といった韻文や狂言については、すでに長く載せられてきた背景があるため違和感は少ない。やはり大きな問題を孕むのは、古典作品の導入だろう。表１の光村出版の例をとって見ても、第 5 学年で『竹取物語』『枕草子』『平家物語』が載せられたことは、中学校の古典教材が小学校に前倒しされたようにしか見えない。事実、同じ光村出版の中学校の教科書でも、第 1 学年で『竹取物語』、第 2 学年で『枕草子』と『平家物語』が載せられている（表２）。

小学校における古典教材の導入を契機に、中学校における古典教材が問い直されるべきなのはいうまでもない。本稿では、さらに高等学校での古典教材の在り方も見据えて考えてみたい。中学校の古典教材が問い直されるとすれば、それは派生的に高校教科書における古典教材を問い直すことにも繋がるからである。特に焦点をあてるのは、『枕草子』である。

『枕草子』については、これまでもその教材の在り方に対して様々なアプローチが行われてきた。中学校においてはその実践報告が多く行われており、また高校では実践報告だけでなく、その章段選択に対しても時代ごとの先行研究は複数ある。比較的、教材としての問い直しが繰り返されてきた作品といえる。

本稿が『枕草子』を扱う理由は、特にこの作品が、新指導要領に伴って改訂された小学校教科書において非常に好まれたという点にある。その理由はおそらく、中学校の教科書において『枕草子』、特に冒頭の「春はあけぼの」が好まれてきた理由と変わらないだろう。すなわち、音読しやすいこと、短いこと、意味が平明であること、四季の移ろいへの視点といった「日本文学の特長」への言及がしやすいことなどである。ここには、小学校と中学校の国語教科書の間で、古典教材の取り合いが起きる可能性さえ見いだせるのである。

本稿では、『枕草子』の教科書における採録状況を押さえること、そこから小・中・高と連携していく『枕草子』の教材化の可能性を探ることに焦点をあて、論じていきたい。

表１　平成 23 年度版小学校の教科書に載せられる古典文学作品一覧　（注１）

作品名	光村	東書	教出	学図	三省
竹取物語	○	○	○		○

枕草子	○	○	○	○	○
更級日記			○		
宇治拾遺物語				○	
平家物語	○	○	○		○
徒然草	○	○	○	○	○
伊曾保物語			○		
おくのほそ道			○		○
（落語）じゅげむ	○	○	○		○
（落語）ぞろぞろ			○		
（落語）まんじゅうこわい					○
（落語）初天神					○
（落語）長屋の花見					○
（狂言）柿山伏	○				
（狂言）附子			○		
（狂言）しびり					○

表２　平成 24 年度版中学校教科書（光村出版）における古典教材（抜粋）（注２）

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年	
竹取物語	冒頭	枕草子	春はあけぼの	古今和歌集	仮名序
	蓬莱の玉の枝	平家物語	祇園精舎	おくのほそ道	旅立ち
	ふじの山		扇の的		平泉
落語	時そば			伊勢物語	冒頭
				土佐日記	冒頭
				源氏物語	冒頭
				更級日記	冒頭
				方丈記	冒頭
				日本永代蔵	冒頭

２．『枕草子』における教材化の状況

まず、『枕草子』のみに絞った古典教材一覧を見てみたい（表 3a、b、c）。

表 3a　『枕草子』教材一覧　小学校（平成 23 年度版）・中学校（平成 24 年度版）

	小学校					中学校				
作品名	光村	東書	教出	学図	三省	光村	東書	教出	学図	三省
春はあけぼの	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
雪のいと高う降りたるを							○		○	
うつくしきもの								○	○	○
五月ばかりなど山里に歩く										○

表 3b　『枕草子』教材一覧　高校　国語総合　（注３）

作品名	三省	大①	大②	大③	第一	桐原	右文
春はあけぼの		○	○		○	○	
雪のいと高う降りたるを	○		○				
中納言参りたまひて					○		
うつくしきもの		○				○	
五月ばかりなど山里に歩く	○						
虫は			○				
はしたなきもの			○		○		
菖蒲							○
月							○

〈『枕草子』を掲載しないもの〉

・東京書籍（19 版 新編国語総合・19 版 精選国語総合・20 版 国語総合 古典編）

・教育出版（19 版　国語総合・19 版 新国語総合 改訂版）

・筑摩書房（19 版 国語総合〔改訂版〕）

・数研出版（18 版 国語総合）

・明治書院（19 版 新精選国語総合）

・光村出版（S57 版 国語Ⅰ・S58 版 国語Ⅱ）

表 3c　『枕草子』教材一覧　高校　国語総合以外　（※４）

作品名	東書	教育	三省	大修	第一	筑摩	数研	明治	桐原	右文
春はあけぼの		②	○		①②	①②③	○	○	○	①
▼木の花は	①	③	○	②④	②			○	○	
九月ばかり	①③			②④						①②
▼すさまじきもの	①③		○			①②③	○		○	①②
宮に初めて参りたるころ	①	①③			②		○			
雪のいと高う降りたるを	①②	①	○	②④			○	○	○	①②

中納言参り給ひて	①②	①	○	①	①	①②③	○		○	①②
二月つごもりごろに	①	①②	○	②④			○	○	○	
大納言殿参り給ひて	①	①②							○	
▼うつくしきもの	②③	①	○		①				○	
野分のまたの日こそ	②	②				②	○		○	
▼かたはらいたきもの		①			②					
五月ばかりなど山里に歩く		①	○			①②③				
関白殿，黒戸より…		①③								
殿などのおはしまさで後		①③								
▼ありがたきもの		②				①②				①②
▼憎きもの		③								
世の中になほ心憂きものは		③				①②③				
頭の中将の，すずろなる…		③								
この草子，目に見え，…		③		③	②					②
▼虫は						②	○			
大蔵卿ばかり				①						
▼うれしきもの				③④			○			
上にさぶらふ御猫は				③④		①	○			②
頭の弁の，職に参り…				③④						
御方々，君たち					①					
▼鳥は					①					
村上の先帝の御時に					②					
古今の草子を					②					
ふと心劣りとかするものは					②					
月のいと明きに						①				
▼近うて遠きもの…						①②				
▼降るものは						①②③				
▼心ときめきするもの						②				
▼星は						③				
大進生昌が家に						③				
鳥の空音							○			
御前にて，人々とも								○		

小学校と中学校における『枕草子』教材を表 3a、高校の国語総合における『枕草子』教材を表 3b、国語総合以外の『枕草子』教材を表 3c として作成した。

小学校における『枕草子』は冒頭である「春はあけぼの」のみで、すべての教科書が一致する。

学年としては、教育出版と三省堂が第 6 年、他三社は第 5 学年となっており、目的意識としては「声に出してたのしもう」（光村出版）「日本語のひびきをあじわう」（教育出版）といった音読重視のもの、「随筆を書こう」（東京書籍）「場面の様子と自分の思いとをかき分けよう」（三省堂）といった表現活動に結びつけるものに二分される。

一方、中学校でもすべての教科書に「春はあけぼの」が載せられている。ただし、その扱いには差があり、第 1 学年から第 3 学年までさまざまである。また、光村出版は「春はあけぼの」のみ、東京書籍も資料編として「雪のいと高う降りたるを」に留まるが、教育出版、学校図書、三省堂はそれぞれ他の章段も本編として入れている。三省堂は特に「春はあけぼの」の方を資料的な扱いにしている。

国語総合の教科書になると、『枕草子』の扱いは比較的少ない。小学校、中学校の教材と重なるものも多く、「うつくしきもの」「はしたなきもの」「虫は」など章段としても易しいものが選ばれているといえる。国語総合においては、『枕草子』は中学校の教材という扱いと考えられるだろうか。学校教育においては三大随筆の一つとして教えられる『徒然草』が国語総合の中で重要な位置を占めることとは対照的である。（『方丈記』は『枕草子』と同様、中学教材として利用されることが多い。古典教科書でもあまり用いられない。）

高校の古典教科書においては、再び『枕草子』教材が増加する。しかも、その章段が多岐に渡る点で特徴的である。一般的な分類に従えば、『枕草子』は内容的に、類聚章段・日記的章段・随想章段に分けられる。類聚章段は十三挙げられているが（表 3c において▼で示した）、文法事項の少ない「心ときめきするもの」や「星は」を扱うなど様々な試みが見られる。また、日記章段にも目が向けられていることが窺える。跋文（「この草子、目に見え、心に思ふことを」）が導入されることも特徴的であろう。ただし、中学校においては国語便覧などで言及がある可能性も考えておきたい。

以上、『枕草子』教材を概観した。小学校、中学校、高校の国語総合まで、『枕草子』の教材は多様なものを載せているとは言い難い。高校古典の中で様々な章段が扱われはじめるが、『枕草子』は（諸説あるが）章段が三百以上ある。今回、挙げられた章段は三十九段であり（「鳥の空音」は「頭の弁の、職に参りたまひて」と同）、二百四十三段中五十二段が掲載章段として挙がる『徒然草』などと比較するとまだまだ掲載されるべき章段の可能性を秘めているのではないだろうか。

また、現在載せられている教材の中から、どのような可能性を広げていくかについても考える必要があろう。以下、いくつかの視点から『枕草子』教材のあり方を考えてみたい。

３．「春はあけぼの」の位置づけ

小・中・高校の『枕草子』教材の連繋を考える際、何よりも考えなければならないのは、「春はあけぼの」をどう扱うかということであろう。「『枕草子』＝春はあけぼの」という図式が成立するほど、よく知られた冒頭部であり、『枕草子』を教材としてあまり載せない国語総合でも四本、古典では十一本の教科書に掲載される。無論、実際の現場で載せられているからといって「春はあけぼの」を授業として扱う高校は少ないはずだ。それでも、『枕草子』の授業を始めようとする

時、「春はあけぼの」を覚えているか（知っているか）を導入に持ってくることは多いのではないか。それはこれまで、中学校の「春はあけぼの」が音読、時に暗誦教材となっていることとも結びつき、中高の連繋教材として問題であった。しかし、小学校に『枕草子』「春はあけぼの」が導入され、おそらくは音読や暗誦を重視した教材としての扱いを受けることが想定される以上、小・中・高の連繋教材としての問題を意識する必要がある。

この「春はあけぼの」教材について、小森潔氏は高校の教科書が中学の教科書と変わらない学習内容を設定していることを確認した上で、古典の定番教材における制約を認めつつ、次のように述べる。

> 「春はあけぼの」との出会いをせめて不幸に終わらせないにはどうすべきか。一つの方途としては、言われ尽くされてきたことだが、本格的に授業を展開する前の導入部分において、『枕草子』なり清少納言なりへの生徒の興味・関心を喚起することが考えられる（注５）。

渡辺春美の実践報告（注６）、中学、高校と重複して載ることに意味を見出す津島知明氏の指摘（注７）、また短期大学での実践を踏まえてその可能性を探る。

小学校で音読、中学校で意味、高校で研究史を踏まえた深い読みへ、というのは理想的な『枕草子』学習に違いない。渡辺春美氏は『枕草子』の学習指導の歩みを辿る中で、1960 年代以降の『枕草子』研究が専門化、高度化したために教育現場から乖離したことを指摘している（注８）が、それに対する現場の拒否反応はすでに終わりを告げている。小森氏が上記に続けて指摘しているように、古典が受験科目から外れている中で、却って現在の研究動向を踏まえた授業実践が現場レベルで行われていることは事実であり、今後、表面化してくることだろう。だが、そうした小・中・高と段階を踏んで深めていく『枕草子』学習が確かにあると保証されないこともまた事実としてある。先述のように、「春はあけぼの」を授業で取り扱わないことも多い。

ここまでの検討からいえば「春はあけぼの」教材の発展は高校での展開にかかっているということになる。しかし、高校での展開は常に外される可能性を孕んでいる。小・中・高の連繋の可能性を残しつつ、且つ高校という最終段階のはしごを外されても「不幸な出会い」で終わらせない「春はあけぼの」教材のあり方を考える必要があるだろう。まずは小学校と中学校の学習の間にきちんと〈落差〉を作ることを提案したい。それは、高校での展開が、中学校では教えられなかった「春はあけぼの」の可能性を拓き、その〈落差〉を楽しませることにあるのと通じるはずである。

中学校の教員には、小学校における「春はあけぼの」教材がどのように学習されているか把握する必要がある。その実践が多く提示されるにはまだ時間がかかるだろうが、少なくとも、「春はあけぼの」については中学校で行われてきた実践の多くが発達段階に合わせた形で下りてきていると考えられる。場面を想像しながら音読する、「をかし」の意味を考えるといった鑑賞に関わる部分である。それが行われた状態で、過剰に高度化することなく、「春はあけぼの」を教えることが求められているのである。一部の教科書では「春はあけぼの」が簡略化の方向にあるが、こうした背景と無縁ではないだろう。

小学校と中学校との間に〈落差〉を作るとすれば、「春はあけぼの」を教える中に『枕草子』という作品、場合によっては清少納言という作者の問題をきちんと割り込ませることが有効ではな

いだろうか。導入として扱うのではなく、「春はあけぼの」の解釈の中にその作品としての独自性をみる視点である。

小学校で重視されるのは、「春はあけぼの」で描かれる情景が想像できること、つまり現代に通じる感覚で描かれていることであろう。同じ部分があるからこそ、音読しながら言葉の違いを楽しむことができるという視点に立つ。そうであれば、中学校で生じさせる〈落差〉は違いを強調することだろう。「春はあけぼの」から始まる四季と時間との対応と描写が、「現代人に通じる一般的感覚」だけで解釈できないことは注釈レベルで指摘されている。意味をとることで精一杯な中学生に「違う」ことを教える必要はないという批判もあるだろうが、その「違い」、あるいは「理解はできるけれども自分には書けない」という感覚は当時の読者と響き合って受け止められるのではないか。『枕草子』という作品が、また「春はあけぼの」という章段が特殊性を持っているからこそ、長く残るに至ったという論理は中学生にとって却ってわかりやすいはずである。

「春はあけぼの」の特殊性、独自性と向き合っていくことは、他の章段にも拓かれている。「うつくしきもの」などの類聚章段は、だれもが「わかる」ということをあえて示すことの面白さがあるが、中学生にとってはいわれなければ気づかない部分を探すという取り組み方もあるだろう。また、『枕草子』教材の特徴として「書く」ことに結びつけるものがある。自分なりの「ものづくし」を作ってみよう、などが典型的な例であるが、そうした表現活動の後に再び『枕草子』に戻り、「違い」と向き合うことも学習の発展として有効かと思う。そこに見出すのは、時代的差異でもよいし、作者と生徒自身との差異でもよい。わからないことへの視点は、高校で「春はあけぼの」を展開する授業と出会った時にさらに考察することへと発展するのではないか。

最後に付け加えておくならば、『枕草子』が解釈の揺れを多く抱えた作品であることを触れる意識があれば、高校での展開の可能性はより広く拓かれるだろう。もちろん、諸本の問題などを中学校に持ち込むというのではなく、たとえば『枕草子』という書名については教科書のコラムや国語便覧などに必ず載っている。しかしながら、その書名の由来さえ確固たるものがあるとは言い難い。不確かなことを抱えるのは、正しい答えを求める子どもたちにとって負担かもしれないが、雑談でも不確定の面白さを伝えることは、「春はあけぼの」、さらに他の章段を受験用ではなく読むことへと繋がるといえよう。

４．日記章段の持つ可能性

ここまで、「春はあけぼの」に焦点をあてて論じてきた。小・中・高を通じて現在、掲載されている章段の展開の可能性を考えたが、あまり教材として扱われてこなかった章段についても考えておきたい。

先述した『枕草子』における内容の三分類（類聚章段・日記的章段・随想章段）には批判も多いが、ひとまずその分類に従って小・中学校における『枕草子』教材を見てみれば、類聚章段と随想章段ばかりである。「香炉峰の雪」で有名な「雪のいと高う降りたるを」章段は日記的章段と分類されることが多いが、時間的背景を必要としなくとも解釈できることからみれば随想的章段とも分類できるのではないか。

分類の是非はおいておいて、小・中学校の教材選択をみれば、日記的章段、特に中宮定子の境遇に言及しなければならないような場面が避けられていることは自明である。長文になると文法的な説明が必要になることも大きな理由だろうが、たとえば古典教育の実践を提案する論文で「日記的章段は中宮定子との関係のもとに書かれており、読むにあたって時代背景や人物相関といった知識が要求される。そのため中学2年生の教材として取り上げるにはふさわしくない」（注9）と断じられてしまうように、背景説明を忌避する意識があるのは確かである。日記的章段が教材として重視されるのは高校以降で、それは『大鏡』などの歴史物語が教材として導入される時期とも一致する。入門期には背景説明の不要な章段を、高校以降は類聚章段や随想章段に加えて、日記的章段を織り交ぜていく、というのが『枕草子』教材のおおまかな展開といえる。

渡辺氏は日記的章段の指導について「清少納言の人物像把握と結びつくが、類聚的章段、随想的章段に比べて、歴史的背景との関連、背景的知識の指導など指導方法に課題が残る」（注 10）と述べる。古典の授業の中でどれだけ歴史知識を教えるかという大きな問題にかかわる課題である。中宮定子の場合、一条天皇の周囲を取り巻く様々な人間関係が影響を及ぼしているので、深入りすれば歴史の授業になってしまう。高校ではそうした展開はもちろんあってよいのだが、中学校の段階で授業をしづらいのは確かである。

しかし、日記的章段の面白さは『枕草子』を学ぶにあたって、やはり伝えておくべきものではないだろうか。中宮定子との当意即妙な遣り取りや貴族男性との交流は作者が最も記したかったことの一つであろうし、『枕草子』という作品が閉ざされたものではなく、公的な記録に近いものとしてあったことを知るためにも、日記的章段は教材として扱うべきだろう。「春はあけぼの」や「うつくしきもの」などに「王朝の雅」「をかしの文学」を見るだけでは興味を持てない生徒にとっても有効なはずである。

では、日記的章段につきまとう歴史的背景をどうするかという問題をどう考えるか。答えは明らかだろう。中学生に日記的章段を教える際には作者が中宮定子に仕えていたこと、定子については栄華を誇った時期と不遇の時期があったことの二点だけを伝えればいいのである。それ以上の歴史的知識がなくとも日記的章段を読み込むことは可能だろう。実際、『枕草子』中には来歴や関係性の不明な登場人物もいるわけで、背景がすべてわからないと読めないということはない。

中学校の『枕草子』教材に日記的章段を組み込む際に残るのは、むしろ文法を教えられない状態でどう読ませるかという問題だろう。しかし、それはどの作品にも残る問題で、脚注等の駆使によって一応の解決策がとられている。それに準じれば、多少長く難解な部分のある日記的章段も記載できるに違いない。

「春はあけぼの」や「うつくしきもの」、あるいは「雪のいと高う降りたるを」、こうした章段は、生徒にとって退屈な〈王朝の美意識〉にしか見えないこともあるだろう。着眼点の面白さだけでは興味を失う生徒もいるはずである。『枕草子』嫌いを作らないためにも、中学校の教科書から日記的章段の出来事、人間関係の面白さを見せる教材を積極的に記載していく必要があるのではないか。どの章段を選択すべきかについては今後の検討材料だけれども、定番教材から離れて発展教材を載せるとすれば、やはり日記的章段は魅了的な材料であると考えられる。

５．おわりに　―小・中・高にわたる『枕草子』教材の可能性

第一節では小・中・高における『枕草子』教材採録状況の検討を行い、第二節では各段階に共通する「春はあけぼの」の可能性、第三節では高校以前に取り上げられることの少ない日記的章段の可能性を扱った。

『枕草子』は教育を通じてわれわれに刷り込まれている古典のうちの一つである。これまでは中学、高校での学習によって行われてきたが、新指導要領以降は、その刷り込みが小学校から始まることになる。「現代人に繋がる素晴らしい美意識」として刷り込み、イメージを重ねていく『枕草子』教材では、学習者にとっても、『枕草子』という作品そのものにとっても不幸なことであろう。

小・中・高と積み重ねられていくからこそ、『枕草子』教材はその段階ごとにずれや差異を見せる必要がある。「春はあけぼの」は暗誦しやすい易しい文章ではないし、「うつくしきもの」を並べ立てる手法は真似できても、自分の作った「〇〇草子」が千年残ることはないのである。小学校で学んだことが中学校で覆され、中学校で学んだことが絶対でないことを高校で気づかされる、そうした展開が期待できるのが『枕草子』という作品だろう。その経験は古典教育全体の中でも、さらにはあらゆる科目に通じる児童、生徒の学習体験としても有益なはずである。

古典教育の危機が叫ばれて等しい中、一方で小学校では「伝統的な言語文化に関する事項」として新たに盛り込まれ、読まれなくなるという意味でも、イデオロギーに利用されるという意味でも、古典作品の立場は危うい状況にある。学校教育から抜け出したところにその可能性はあるのかもしれないが、古典が教育と切り離せないものであることもまた自明だ。ならば、古典教育の中でできることを考えていくべきであり、小学校の古典導入はそのよい契機であると思う。『枕草子』はその中の一教材であるが、学校教育の制約の中でも大きく展開できる可能性を持つ作品であろう。これから小学校古典の本格的導入を受けた実践報告、検討が進められるはずである。中学校や高校での『枕草子』教材のあり方も変化せざるを得ない。それがよりよい変化をもたらすよう今後も考えていきたい。

【注】

（１）以下、本稿で扱う表は、本報告書採録の教科書における古典作品掲載一覧を私に改め、抜粋したものである。合わせて参照されたい。表 1 では、詩や漢詩、昔話等、中学、高校の古典教材と直接は関わらないものについては省略した。

（２）古典教材については、各出版社で細かな際があるため今回は試みに光村出版のものを例として挙げた。検討すべきことは多いが、『竹取物語』における冒頭、『枕草子』における「春はあけぼの」、『平家物語』における「祇園精舎」が小中古典教材を考える上で重要になることは間違いない。

（３）国語総合における略称は以下の通り。三省→19 版 明解総合（19 版 国語総合・19 版 新編国語総合においては『枕草子』の記載はない）、大①→20 版 新編国語総合 改訂版、大②19

版 国語総合 改訂版、大③→21 版 新編古典 改訂版、第一→19 版 改訂版 新編国語総合（19 版 改訂版 標準国語総合・19 版 改訂版 国語総合・19 版 新訂国語総合 古典編においては『枕草子』の記載はない）、桐原→19 版 発見 国語総合（19 版 展開 国語総合・19 版 探求 国語総合（古典編）においては『枕草子』の記載はない）、右文→15 版 国語総合。

（４）高校教科書国語総合以外における略称は以下の通り。東京書籍①→20 版 古典 古文編、②→20 版 新編古典、③→20 版 精選古典、教育出版①→20 版 新版 古典、②→20 版 新版 古典、③→16 版 精選古典、三省堂→20 版 古典〔古文編〕、大修館①→21 版 新編古典 改訂版、②→20 版 古典 1 改訂版、③→21 版 古典 2 改訂版、④→20 版 精選古典 改訂版、第一①→20 版 改訂版 標準古典、②→20 版 改訂版 古典 古文編、筑摩①→16 版 古典、②→20 版 新編 古典、③→20 版 精選古典 古文編、数研→19 版 古典 古文編、明治→20 版 新精選古典、桐原→20 版 古典（古文編）改訂版、右文→16 版 古典。

（５）「国語教育の中の『枕草子』」（『枕草子　創造と新生』翰林書房　2011）。

（６）「『国語科授業活性化の探求Ⅱ』（渓水社　1998）。

（７）「教材「春はあけぼの」とテキストの〈正しさ〉」（『〈国語教育〉とテクスト論』ひつじ書房 2009）。

（８）「戦後高等教育古典学習指導の試行と軌跡」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』11-1 2006）。

（９）菊池奈樹「入門期としての中学校古典教育を考える」（『言文』51　2004）。

（10）（８）と同じ。

【参考文献】

中村昌司「高校国語教科書における「枕草子」の採録状況」（『国文学会誌』14　1970）
田坂文穂編『旧制中等教育　国語科教科書内容索引』（教科書研究センター　1984）
津島知明・中島和歌子編『新編　枕草子』（おうふう　2010）

・本稿は、本研究会における諸氏の発表及び議論をもとに執筆したものである。論文としての引用ができなかったが、参加されている方々には改めて感謝したい。

古典作品教科書掲載一覧

麻　生　裕　貴

凡例

①掲載されているかどうかの示し方

・当該作品が掲載されている場合は○または●で示している。ただし、参考として掲載しているものは△を附し、資料としてのみの掲載の場合は省いた。

・「場面・巻・章段名」が教科書によって異なる場合は●の教科書に拠っている。

・『論語』については、『論語』の文章を一つでも掲載していれば○を附している。

②参照した教科書

・小中学校の教科書の出版社名は、以下の略号で示している。

M…光村図書　T…東京書籍　K…教育出版　G…学校図書　O…大阪書籍
S…三省堂

・高等学校の教科書は、各出版社の国語総合・古典のそれぞれの最新年度の教科書から古典作品の掲載が最も多いもの一冊ずつを抽出して表にしている。

・「高等学校編」の表では各出版社が二列に分かれているが、左の列が国語総合の教科書、右の列が古典の教科書を表す。

・高等学校の教科書の出版社は以下のように略称で示している。また、表にした教科書名は以下に示すとおりである。

東書…東京書籍（20 年度版 国語総合〔古典編〕／20 年度版 古典〔古文編〕）
教出…教育出版（19 年度版 国語総合／20 年度版 新版 古典）
三省…三省堂（19 年度版 国語総合／20 年度版 古典〔古文編〕）
大修…大修館（20 年度版 新編国語総合 改訂版／20 年度版 精選古典 改訂版）
第一…第一学習社（19 年度版 新訂国語総合〔古典編〕／20 年度版 改訂版 古典〔古文編〕）
筑摩…筑摩書房（19 年度版 国語総合 改訂版／20 年度版 精選古典〔古文編〕）
数研…数研出版（18 年度版 国語総合／19 年度版 古典〔古文編〕）
明治…明治書院（19 年度版 新精選国語総合／20 年度版 新精選古典）
桐原…桐原書店（19 年度版 探求 国語総合〔古典編〕／20 年度版 古典〔古文編〕改訂版）
右文…右文書院（15 年度版 国語総合／16 年度版 古典）

③時代・成立年

・古典作品は基本的に成立時代順に並べているが、詩歌・漢文・昔話などは「時代」を「ほか」として表の最後に挙げている。

・成立年を記しているものもあるが、確定的でないものがほとんどであり、飽くまで目安としてのものである。

④ジャンル

・「詩」は童話・唱歌・口語詩も含んでいる。
・「昔話」は小学校低学年用の口語の昔話であり、作者・再話者は略して作品毎にまとめている。
・「高等学校編」では「詩」及び「漢詩・漢文」は省略している。

⑤作品名

・作者が分かっている場合には作品名の後に（）で作者名を記している。ただし、作者が確定的でないものもある。
・故事成語も作品名として扱っている。
・「詩」や「漢詩・漢文」で作品名にあたるものが長い場合には「…」で省略している。

◎小学校・中学校編

教科書略号
M…光村図書　T…東京書籍　K…教育出版　G…学校図書　O…大阪書籍　S…三省堂

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
奈良	歴史書	712	古事記	冒頭																				○
				倭建命の望郷の歌																	○			
平安	物語		竹取物語	冒頭		●		●	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
				姫の成長																		○		
				蓬莱の玉の枝											●					○		○		
				天の羽衣															●					
				かぐや姫の嘆き												○					○			
				かぐや姫の昇天													○	○				○	○	○
				ふじの山											●					○				
			伊勢物語	初冠													○			○		○		○
				東下り												○								
				かへる浪																	○			
			土佐日記（紀貫之）	馬のはなむけ												○	○			○	○	○		○
	日記	974	蜻蛉日記（藤原道綱母）	冒頭																				○
	随筆	1001	枕草子（清少納言）	春はあけぼの		○				○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○
				雪のいと高う降りたるを														○			○		○	
				うつくしきもの														●	○			○	○	○
				五月ばかりなど山里に歩く																				○
				月のいと明きに												○	●							
	日記	1007	和泉式部日記（和泉式部）	冒頭																				○
	物語	1008	源氏物語（紫式部）	桐壺												●	○			○		○		○
	日記	1060	更級日記（菅原孝標女）	冒頭								○								○				
				小野篁，広才のこと									○											
鎌倉・室町	説話集	1120	今昔物語	冒頭																				○
	随筆	1212	方丈記（鴨長明）	ゆく河の流れ												○	○			○		○		○
	説話集	1219	宇治拾遺物語	冒頭																				○
				猟師，仏を射ること														○					○	

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
鎌倉・室町	説話集	1219	宇治拾遺物語	木こり歌のこと												●								
	軍記物語		平家物語	祇園精舎		○				○	○	○		○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○
				敦盛の最期													●	●	●			○	○	○
				扇の的				●							●	○	●			○	○	○		
	軍記物語		義経記	冒頭																				○
	説話集	1283	沙石集（無住道暁）	児の飴食ひたる事													●							
	随筆	1331	徒然草（兼好法師）	つれづれなるままに							○	○		○	○		○		○	○	○		○	○
				高名の木登り						○								●					○	
				奥山に，猫またといふものありて														○					○	
				仁和寺にある法師											●		●		○	○	○	○		○
				公世の二位の兄人に													●							
				雪のおもしろう降りたりし朝												●								
				ある人，弓を射ることを習ふに												●						○		○
	物語		御伽草子	浦島太郎												●								
	能理論書	1400	風姿花伝（世阿弥）	冒頭																				○
	物語	1593	伊曾保物語	鳩と蟻のこと								○									○			
				犬と肉のこと																	○			
江戸	浮世草子	1688	日本永代蔵（井原西鶴）	冒頭																○				
				初午は乗つてくる仕合はせ												●								
	紀行本	1694	おくのほそ道（松尾芭蕉）	旅立ち								○		○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○
				平泉											○	○	●	●	●	○	○	○	○	○
				立石寺													●					○		
	浄瑠璃	1703	曾根崎心中（近松門左衛門）	冒頭																				○
				道行												○								
	浄瑠璃		義経千本桜																		○			
	読本	1776	雨月物語（上田秋成）	菊花の約												●								
	滑稽本	1802	東海道中膝栗毛（十返舎一九）	冒頭																				○
				京都方広寺																		○		
	読本	1814	南総里見八犬伝（滝沢馬琴）	冒頭																				○

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
江戸	落語		じゅげむ			○	○			○	○	○		○										
			ぞろぞろ				○					○												
	落語		まんじゅうこわい					○						○										
			初天神											○					○					○
			時そば																	○				
			長屋の花見											○										
			三方一両損																			○		
	狂言		柿山伏		○					○									○					○
			清水			○																		
			附子									○												
			しびり											○								○		
	能		高砂													○					○			
	歌舞伎		楼門五山桐																		○			
ほか	詩		海雀（北原白秋）		○																			
			この道（北原白秋）			○																		
			落葉松（北原白秋）													○					○			
			露（北原白秋）					○																
			薔薇二曲（北原白秋）																	○				
			雪（三好達治）		○	○											○					○		
			大阿蘇（三好達治）													○								○
			土（三好達治）													○					○			
			チューリップ（三好達治）																		○	○		
			信号（三好達治）																			○		
			少年（三好達治）																				○	
			りんご（山村暮鳥）		○															○				
			雲（山村暮鳥）													○					○			
			手（山村暮鳥）														○							
			雪（山村暮鳥）							○														
			五月（室生犀星）			○																		
			はたはたのうた（室生犀星）				○																	
			蟬頃（室生犀星）																	○				
			消えゆく虫（室生犀星）																				○	
			小景異情（室生犀星）																					○
			ふるさと（高野辰之）			○																		○

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
ほか	詩		朧月夜（高野辰之）																	○				
			紅葉（高野辰之）																	○				
			素朴な琴（八木重吉）				○													○	○			
			虫（八木重吉）													○	○				○			
			果物（八木重吉）							○														
			まり（八木重吉）										○											
			やしの実（島崎藤村）						○				○											
			千曲川旅情のうた（島崎藤村）													○								
			初恋（島崎藤村）														○		○		○	○		○
			小諸なる古城のほとり（島崎藤村）									○								○				
			草に寝て…（立原道造）													○								
			胸にゐる（立原道造）																		○			
			晴間（三木露風）		○																			
			春（安西冬衛）														○							
			蜻蛉に寄す（中原中也）														○							
			一つのメルヘン（中原中也）																	○				
			月夜の浜辺（中原中也）																		○	○		○
			ぼろぼろな駝鳥（高村光太郎）														○							
			冬が来た（高村光太郎）																	○				○
			レモン哀歌（高村光太郎）																		○	○		
			枇杷のたね（竹久夢二）														○							
			貝殻（新美南吉）																				○	
			存在（山之口貘）																				○	
			しゃぼん玉（野口雨情）							○														
			たなばたさま（権藤はなよ・林柳波）							○														
			夏は来ぬ（佐佐木信綱）							○														

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
ほか	詩		われは草なり（高見順）							○														
			早春賦（吉丸一昌）							○														
			茶摘み（文部省唱歌）																					○
			うさぎ（作者不詳）							○														
			冬景色（作者不詳）																	○				
			海（作者不詳）																	○				
	漢詩・漢文		春望（杜甫）													○	○	○	○	○	○	○	○	○
			絶句（杜甫）											○	○					○				○
			春夜（蘇軾）				○					○												
			春暁（孟浩然）				○			○	○	○		○	○				○	○				○
			黄鶴楼にて孟浩然の…（李白）												○	○	○		○	○	○	○		○
			静夜思（李白）							○		○						○				○	○	
			早に白亭城を発す（李白）																					○
			元二の安西に…（王維）															○					○	
			鹿柴（王維）																					○
			江雪（柳宗元）																		○			
			涼洲詞（王翰）																		○			
			江南の春（杜牧）									○												○
			山亭の夏日（高駢）									○												
			胡隠君を尋ぬ（高啓）										○											
			春宵一刻値千金（蘇軾）							○														
			論語			○				○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			「史記」と「項羽と劉邦」												○					○				
			百聞は一見に如かず		○																			○
			春眠暁を覚えず		○																			
			五十歩を以つて百歩を笑ふ		○																		○	
			故きを温ねて新しきを知る		○																			
			読書百遍義自ら見はる		○																			
			矛盾												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
			心焉に在らざれば…									○												
			大器晩成																			○		
			守株																			○		
			虎の威を借る狐																			○		

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	17小学教科書					23小学教科書					18中学教科書					24中学教科書				
					M	T	K	G	O	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S	M	T	K	G	S
ほか	漢詩・漢文		備え有れば患い無し																					○
			虎穴に入らずんば虎児を得ず																					○
			寧ろ鶏口となるとも，午後となるなかれ																					○
			先んずれば即ち人を制し，…																					○
	歌集	905	古今和歌集「仮名序」												○		○			○	○	○	○	○
	歌謡集	1169	梁塵秘抄（後白河院）													○								
	口上		外郎売り																			○		
	昔話		まのいいりょうし							○														
			いなばの白うさぎ							○	○	○		○										
			三まいのおふだ							○														
			額に柿の木							○														
			花さかじい								○			○										
			でいだらぼっち								○													
			やまたのおろち								○		○											
			海さち山さち								○													
			かさこじぞう								○	○	○	○										
			古屋のもり											○										
			ももたろう											○										
			さるかに合戦											○										
			ぶんぶく茶がま											○										
			うらしまたろう											○										
	ほか		天地の文（福澤諭吉）							○														
			銀の滴降るまわりに〈アイヌ神謡〉									○												
			おもろそうし									○												
			星取り											○										

※小学校教科書平成17年度版の「昔話」「ほか」は未調査

◎高等学校編

教科書名

東書…東京書籍（20版 国語総合〔古典編〕／20版 古典〔古文編〕）
三省…三省堂（19版 国語総合／20版 古典〔古文編〕）
第一…第一学習社（19版 新訂国語総合〔古典編〕／20版 改訂版 古典〔古文編〕）
数研…数研出版（18版 国語総合／19版 古典〔古文編〕）
桐原…桐原書店（19版 探求 国語総合〔古典編〕／20版 古典〔古文編〕改訂版）
教出…教育出版（19版　国語総合／20版 新版 古典）
大修…大修館（20版 新編国語総合 改訂版／20版 精選古典 改訂版）
筑摩…筑摩書房（19版 国語総合 改訂版／20版 精選古典〔古文編〕）
明治…明治書院（19版 新精選国語総合／20版 新精選古典）
右文…右文書院（15版 国語総合／16版 古典）

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
奈良	歴史書	712	古事記	倭建命		●										○						●		
				須佐之男命の大蛇退治				○																●
				倭建の東征						○														
				倭建命の望郷の歌																○				
平安	物語		竹取物語	冒頭	○		○						○		○		○						○	
				天の羽衣	○																			
				かぐや姫の嘆き									○						○					
				かぐや姫の昇天						○				●			○			○		○	○	
				火鼠の皮衣																○				
				帝の求婚										●										
	物語		伊勢物語	初冠								○		●		○		○				●		●
				芥川	○		●		○		○		○		○		○				○			○
				東下り	○		●		○				○		○		○				○			
				筒井筒	○		●				○		○		○		○							
				狩りの使ひ		●																○		
				渚の院		●												○						●
				つひにゆく道		●			○					●		○								
				さらぬ別れ			●																	
				月やあらぬ						○		○												
				関守								○		○										
				梓弓						○			○			○		○			○			●
				小野の雪										●		○					○			●
				行く蛍												○								
				とみの文												○								

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
平安	日記	935	土佐日記（紀貫之）	馬のはなむけ	○		○		○				○		○		○		○		○			○
				帰京	○		●		○				○				○		○		○			●
				阿倍仲麻呂	○			○																
				黒鳥のもとに				○	○															
				大津より浦戸へ			●																	
				忘れ貝															○					●
				亡児									○											
				かしらの雪																	○			
	物語	950	大和物語	姨捨								○		●		○		○				●		
				安積山						○														
				生田川														○						
	日記	974	蜻蛉日記（藤原道綱母）	なげきつつひとり寝る夜		●		○														○		○
				うつろひたる菊						○				●				○						
				鷹						○		○												
				町の小路の女																○				
				泔杯の水										●										
				道綱鷹を放つ												○				○		○		
	随筆	1001	枕草子（清少納言）	春はあけぼの						○	○			○		○		○		○		●		
				木の花は		●				○		○		●						○		●		
				九月ばかり		●						○												○
				すさまじきもの		●				○						○		○				●		●
				宮に初めて参りたるころ		●		○						●				○						
				雪のいと高う降りたるを		●				○				●		○						●		●
				中納言参り給ひて		●		○		○		○				○		○				●		●
				二月つごもりごろに		●		○		○		○		●				○		○		●		
				大納言殿参り給ひて		●		○														●		
				うつくしきもの				○		○	○											●		
				野分のまたの日こそ														○				●		
				かたはらいたきもの				○						●										
				五月ばかりなど山里に歩く				○		○						○								
				関白殿，黒戸より出でさせ給ふとて				○																
				殿などのおはしまさで後				○																
				ありがたきもの																				●
				世の中になほ心憂きものは												○								
				この草子，目に見え，心に思ふことを										●										○

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
平安	随筆	1001	枕草子（清少納言）	虫は														○						
				うれしきもの								○						○						
				上にさぶらふ御猫は								○						○						●
				頭の弁の，職に参りたまひて								○												
				村上の先帝の御時に										●										
				古今の草子を										●										
				ふと心劣りとかするものは										●										
				降るものは												○								
				星は												○								
				大進生昌が家に												○								
				鳥の空音														○						
				御前にて，人々とも																○				
				菖蒲																			○	
				月																			○	
	日記	1007	和泉式部日記（和泉式部）	帥の宮からの便り−四月				○																
				夢よりもはかなき世の中を						○				○		○						●		
				薫る香に								○						○						●
				手枕の袖										●										
	物語	1008	源氏物語（紫式部）	桐壺		○		○		○				○		○		○		○		○		●
				帚木				○																
				夕顔																				●
				若紫		●		○		○		○		●		○		○		○		○		●
				花宴				○																
				葵		●		○														○		●
				須磨		●				○		○		○				○		○				●
				澪標										○										
				薄雲				○								○								
				野分		●														○				
				藤裏葉										●				○						
				若菜		●		○				○				○				○		○		
				柏木														○						
				御法		●		○		○		○		○		○				○				●
				幻						○														
				浮舟														○				●		

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書	教出	三省	大修	第一	筑摩	数研	明治	桐原	右文
平安	日記	1010	紫式部日記（紫式部）	秋のけはひ	●							○		
				女郎花	●									
				うきたる世	●									
				里居のもの思ひ		○								
				若宮誕生					●					
				土御門殿の秋						○				●
				和泉式部と清少納言				○		○		○		
				日本紀の御局					●				●	
				水鳥の足							○			
				同僚女房評							○			
				つごもりの夜									●	
	物語	1055	堤中納言物語	貝合		○								
				虫めづる姫君			○				○		●	
	日記	1060	更級日記（菅原孝標女）	門出	●				●	○	○		●	○
				源氏の五十余巻	●	○			○	○			●	○
				石山詣	●									
				継母との別れ		○	○							
				初宮仕へ		○								
				後の頼み		○								
				あこがれ			○							
				荻の葉										●
	歌論書	1113	俊頼髄脳（源俊頼）	歌のよしあし					●					
				沓冠折句の歌					●					
				和歌の効用									●	
	歴史物語	1115	大鏡	花山天皇の出家	●	○	○	○	●	○	○	○	○	○
				最後の除目	●									
				道長，伊周の競射	●	○		○	○	○	○	○	○	
				若き日の道長		○								
				雲林院の菩提講	●	○	○		●	○				●
				師輔の夢		○								
				宣耀殿の女御の教養		○								
				三船の才				○	●		○	○	●	○
				中宮安子の嫉妬							○			
				兼通と兼家の確執					○					
				肝試し			○	○		○				

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
平安	歴史物語	1115	大鏡	道真左遷								○										○		
				鶯宿梅								○												
				時平と道真										●				○						
				道長の豪胆										●				○				●		
				道長と隆家										●										○
				道長，栄華への第一歩												○								
				貫之と躬恒														○						
				面をや踏まぬ																○				
				関白の宣旨																○				
	説話集	1120	今昔物語	検非違使 忠明	○																			
				阿蘇の史													○							
				老いを養ふ国						○														
				馬盗人								○				○								
				鹿の歌														○						
				高陽親王，人形を造りて田の中に立つること																				
				玄象といふ琵琶，鬼のために取らるること																○				
				羅城門																			○	
	説話集	1155	発心集（鴨長明）	永秀法師，数奇のこと		●												○						
				叡実，路頭の病者を憐れむ事										●										
	歴史物語	1180	増鏡	鎧の袖				○																
				後鳥羽院										●										
				時頼と時宗										●										
				承久の乱														○						
鎌倉・室町	文芸評論書	1196	無名草子（藤原俊成女）	清少納言		●								○				○		○				
				紫式部		●								○		○		○						
				文										●				○						
				小野小町																		●		
				いとめでたきもの																				●
	歌論書	1211	無名抄（鴨長明）	出で映えすべき歌のこと		●														○				
				おもて歌のこと		●																		
				俊成自讃歌のこと				○										○				●		
				深草の里										●		○								●
				関路の落葉										●										

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
鎌倉・室町	随筆	1212	方丈記（鴨長明）	ゆく河の流れ				○		○		○		○				○		○		○	△	●
				日野山の閑居		●				○								○		○				
				養和の飢饉				○		○						○		○		○				
				安元の大火								○		●								○		●
	歌論書	1219	毎月抄（藤原定家）	心と言葉				○																
				心と詞						○														
	説話集	1219	宇治拾遺物語	児のそら寝			●				○		○		○				○		○			
				絵仏師 良秀	○								○		○									
				夢買ふ人		●																		
				袴垂，保昌に会ふこと				○						○										
				小野篁，広才のこと																			○	
				秦兼久の悪口																		●		
				田舎の児，桜の散るを見て泣くこと					○															
				後の千金のこと					○															
				検非違使忠明のこと			○					○					○				○				
				唐に卒塔婆血つく事																				
				頭の雪									○											
				猟師，仏を射ること												○								
				尼，地蔵と見奉ること															○					
				歌詠みて罪を許さるること																		●		
				滝																			○	
				伴大納言応天門を焼く																				●
	私家集	1232	建礼門院右京大夫集（藤原伊行女）	この世のほかに		●																		
				大原まうで														○						
				資盛との思ひ出										●										
				悲報到来										●										
				なべて世の												○								
				かかる夢見ぬ人やいひけむ																		●		
	軍記物語		平家物語	祇園精舎	△		●		○				○		△		○		○					●
				木曾の最期	○		●				○		○		○		○		○		○			
				忠度の都落ち		●				○				●		○		○						●
				壇の浦の合戦		●												○						
				宇治川の先陣争ひ								○										○		
				能登殿最期					○			○		○		○								

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
鎌倉・室町	軍記物語		平家物語	俊寛						○														
				紅葉																○				
				先帝身投																○		○		
	軍記物語		義経記	忠信，吉野山の合戦の事										●										
				如意の渡りにて義経を弁慶打ち奉る事										●										
	説話集	1252	十訓抄	大江山の歌	○				○			○					○							
				笛吹きの成方と名器「大丸」				○																●
				行成と実方										●										
				文字一つの返し						○										○				●
				朱雀門の鬼の笛								○												
	説話集	1254	古今著聞集（橘成季）	能は歌詠み		●																		
				小式部の内侍				○						○							○		○	
				安養の尼の小袖						○														
				大納言の大別当，清水寺の額を修復の事										●										
				刑部卿敦兼の北の方												○				○		●		○
				母子猿																			○	
				衣のたて																		●		
	日記	1277	十六夜日記（阿仏尼）	いさよふ月										○										
				駿河路										●										
	説話集	1283	沙石集（無住道暁）	ねずみの婿とり							○													
				歌ゆゑに命を失ふ事										●										
				勘解由小路の地蔵																		●		
	随筆	1331	徒然草（兼好法師）	つれづれなるままに	△								○		○		○		○		△		○	
				高名の木登り							○													
				奥山に，猫またといふものありて	○						○										○			
				仁和寺にある法師																	○		○	
				同じ心ならん人と																				
				花は盛りに	○				○			○		●				○	○		○			●
				城陸奥守泰盛は	○															○				
				筑紫に，なにがしの押領使		●																		
				徳大寺故大臣殿		●																		
				家居のつきづきしく		●		○				○										●		●
				世に語り伝ふること		●														○				

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
鎌倉・室町	随筆	1331	徒然草（兼好法師）	世に従はん人は		●				○					○									●
				ある者，小野道風の書ける															○					
				五月五日，賀茂の競べ馬を			●																	
				これも仁和寺の法師												○						●		
				九月二十日のころ									○			○		○						
				よろづにいみじくとも		●																		
				亀山殿の御池に			●																	
				丹波に，出雲といふ所あり			●						○		○		○				○		○	
				静かに思へば			●																	
				公世の二位の兄人に					○		○													
				雪のおもしろう降りたりし朝																				●
				今日はそのことをなさんと思へど																			○	
				人の亡きあとばかり				○																
				応長の頃								○												
				久しく隔たりて会ひたる人の										●		○								
				世に語り伝ふること						○														
				ある者，子を法師になして					○				○									●		
				名を聞くより					○			○		●		○			○					
				友とするに悪き者													○							
				さしたることなくて						○														
				をりふしの移り変はるこそ												○				○			○	
				神無月のころ											○		○							
				ある人，弓を射ること習ふに									○		○									
				相模守時頼の母は																				●
				いでや，この世に生まれては										●										
				あだし野の露消ゆるときなく										●								●		○
				心なしと見ゆる者も												○								
				八つになりし年													○							
				悲田院の堯蓮上人は															○					●
				よき細工は																○				
鎌倉・室町	随筆	1331	徒然草（兼好法師）	大事を思ひ立たむ人は																	○		○	
				主ある家には																		●		
				能をつかんとする人																			○	
				つれづれわぶる人は																				●

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書		教出		三省		大修		第一		筑摩		数研		明治		桐原		右文	
鎌倉・室町	能理論書	1400	風姿花伝（世阿弥）	秘する花を知ること		●												○		○		●		
				年来稽古条々						○														
				因果の花								○												
				二十四，五												○								
	歌論書	1418	正徹物語（正徹）	亡き人を恋ふる歌		●				○														
				一字の違ひ				○																
				初心の心得										●										
江戸	浮世草子	1685	西鶴諸国ばなし（井原西鶴）	大晦日はあはぬ算用				○		○		○		●		○								
	浮世草子	1688	日本永代蔵（井原西鶴）	世界の借家大将		●												○				●		●
				初午は乗つてくる仕合はせ																				
	浮世草子	1692	世間胸算用（井原西鶴）	鼠の文使ひ																○				
	紀行本	1694	おくのほそ道（松尾芭蕉）	旅立ち	○		●		○		○		○		○		○		○		○			●
				平泉	○		●		○				○		○				○		○			
				立石寺	○		●		○		○		○		○									●
				大垣	○		●																	
				那須野					○												○			
				市振																				
				敦賀															○					
				白河の関																				●
	俳論	1702	三冊子（服部土芳）	師の風雅				○																
				不易流行												○								●
				高悟帰俗														○						
				私意を離れよ																○				
	浄瑠璃	1703	曾根崎心中（近松門左衛門）	道行								○										●		
	紀行本	1709	笈の小文（松尾芭蕉）	造化にしたがひ造化にかへれ								○												
	随筆	1716	折たく柴の記（新井白石）	利根と気根									○											
	浄瑠璃評釈書	1738	難波土産（穂積以貫）	虚実皮膜の論				○								○						●		
	俳論	1775	去来抄（向井去来）	行く春を		●		○		○		○		●		○		○		○		●		●
				岩鼻や																				●
				下京や										●										
				発句論										●										

時代	ジャンル	成立年	作品名	場面・巻・章段名	東書	教出	三省	大修	第一	筑摩	数研	明治	桐原	右文
江戸	読本	1776	雨月物語（上田秋成）	浅茅が宿	●	○	○		●	○	○		●	●
				夢応の鯉魚				○						
				菊花の約								○		
	俳文集	1787	鶉衣（横井也有）	奈良団扇の賛		○				○				
	随筆	1795	玉勝間（本居宣長）	兼好法師が詞のあげつらひ		○			●		△			●
				師の説になづまざること				○	●	○	○		●	
	注釈書	1796	源氏物語玉の小櫛（本居宣長）	もののあはれの論	●		○							
				紫式部が本意								○		
				人の心の感ずること								○		
	歌文集	1805	藤簍冊子（上田秋成）	秋山の記					●					
	随筆	1818	花月草紙（松平定信）	両頭の蛇					○					
				花							○			
	俳文集	1819	おらが春（小林一茶）	添へ乳					●					
ほか	歌集	905	古今和歌集「仮名序」		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	歌集	905	古今和歌集「真名序」					○						
	歌謡集	1169	梁塵秘抄（後白河院）		○			○				○		○
	歌謡		今様・小唄など								○	○		

小中学校教科書古典作品単元・作品名一覧

麻　生　裕　貴

凡例

・川柳以外の歌は、全て「和歌・短歌・俳句」でまとめている。また、現代短歌・俳句も挙げている。
・「詩」は、「山のあなた」のような海外の翻訳は省いた。
・論語、故事成語、漢詩などは全て「漢詩・漢文」でまとめている。
・小学校の「古文」は、特記のないものは冒頭文が掲載さている。
・作品名に「※」が附してあるものは、一部を抜粋して紹介してあるものである。
・作品名には（）で作者を示しているが、作者不明のもの、ジャンルが「古文」「狂言」のものは省略した。
・短歌は二句目までを記してある。

23光村（小）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1下	昔話	きいて　たのしもう	126～129	まの　いい　りょうし（稲田和子・筒井悦子）
2上	昔話	きいて　たのしもう	119～121	いなばの　白うさぎ（中川李枝子）
2下	昔話	聞いてたのしもう	134～140	三まいのおふだ（瀬田貞二）
3上	童謡・唱歌	きせつの言葉（春）	31	しゃぼん玉（野口雨情）
		きせつの言葉（夏）	62	たなばたさま（権藤はなよ・林柳波）
		きせつの言葉（秋）	118	うさぎ（作者不詳）
	和歌・短歌・俳句	声に出して楽しもう	48～49	かすみたつ　ながきはるひに・・・（良寛）
				むしのねも　のこりすくなに・・・（良寛）
				古池や蛙飛びこむ水の音（松尾芭蕉）
				閑かさや岩にしみ入る蟬の声（松尾芭蕉）
				菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				春の海終日のたりのたりかな（与謝蕪村）
				やれ打つな蠅が手をすり足をする（小林一茶）
				雪とけて村いつぱいの子どもかな（小林一茶）
		きせつの言葉（夏）	62	うれしさや七夕竹の中を行く（正岡子規）
		きせつの言葉（秋）	118	名月を取つてくれろとなく子かな（小林一茶）
3下	詩	詩を楽しもう	72	雪（山村暮鳥）
	和歌・短歌・俳句	声に出して楽しもう	38～39	荒海や佐渡によこたふ天の河（松尾芭蕉）
				さみだれや大河を前に家二軒（与謝蕪村）
				痩せ蛙まけるな一茶これにあり（小林一茶）
				久方の光のどけき春の日に・・・（紀友則）
				天の原振りさけ見れば・・・（安倍仲麿）
		きせつの言葉（冬）	68～69	初雪や一二三四五六人（小林一茶）
				向こうから来る人ばかり息白く（波多野爽波）
				加留多とる皆美しく負けまじく（高浜虚子）
				春近し雪にて拭う靴の泥（沢木欣一）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3下	和歌・短歌・俳句	百人一首を楽しもう	130～133	人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				いにしへの奈良の都の・・・（伊勢大輔）
				花の色は移りにけりな・・・（小野小町）
				春過ぎて夏来にけらし・・・（持統天皇）
				夏の夜はまだ宵ながら・・・（清原深養父）
				秋の田の仮庵の庵の・・・（天智天皇）
				秋風にたなびく雲の・・・（藤原顕輔）
				白露に風の吹きしく・・・（文屋朝康）
				きりぎりす鳴くや霜夜の・・・（藤原良経）
				嵐吹く三室の山の・・・（能因法師）
				心当てに折らばや折らむ・・・（凡河内躬恒）
				朝ぼらけ有明の月と・・・（坂上是則）
				夜をこめて鳥の空音は・・・（清少納言）
				めぐり逢ひて見しやそれとも・・・（紫式部）
				天つ風雲の通ひ路・・・（僧正遍昭）
				大江山いく野の道の・・・（小式部内侍）
				忍ぶれど色に出でにけり・・・（平兼盛）
				淡路島通ふ千鳥の・・・（源兼昌）
4上	和歌・短歌・俳句	きせつの言葉（春）	29	折々は腰たたきつつつむ茶かな（小林一茶）
				水はりて春を田に見る日ざしかな（角田竹冷）
		声に出して楽しもう	58～59	雀の子そこのけそこのけ御馬が通る（小林一茶）
				夏河を越すうれしさよ手に草履（与謝蕪村）
				名月や池をめぐりて夜もすがら（松尾芭蕉）
				君がため春の野に出でて・・・（光孝天皇）
				田子の浦に打ち出でて見れば・・・（山部赤人）
				これやこの行くも帰るも・・・（蟬丸）
		きせつの言葉（夏）	79	夏休み親戚の子と遊びけり（仁平勝）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
4上	和歌・短歌・俳句	きせつの言葉（夏）	79	ぼくだけがはみ出している盆踊り（金子嵩）
4下	詩	季節の言葉（秋）	26～27	果物（八木重吉）
	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（秋）	26～27	稲かれば小草に秋の日のあたる（与謝蕪村）
				紅葉見や顔ひやひやと風渡る（高桑闌更）
		声に出して楽しもう	42～43	柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺（正岡子規）
				桐一葉日当たりながら落ちにけり（高浜虚子）
				咳の子のなぞなぞあそびきりもなや（中村汀女）
				ふるさとの山に向かひて・・・（石川啄木）
				金色のちひさき鳥の・・・（与謝野晶子）
				ゆく秋の大和の国の・・・（佐佐木信綱）
		季節の言葉（冬）	72～73	袖ひぢてむすびし水の・・・（紀貫之）
				雪解けや春立つ一日あたたかし（正岡子規）
				立春の雪のふかさよ手鞠唄（石橋秀野）
	落語（民話）	聞いて楽しもう	126～131	額に柿の木（瀬川拓男）
5	詩	季節の言葉（春）	28～29	夏は来ぬ（佐佐木信綱）
		詩を楽しもう	86～88	われは草なり（高見順）
	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（春）	28～29	花冷えに欅はけぶる月夜かな（渡辺水巴）
			28～29	目には青葉山ほととぎす初がつを（山口素堂）
			28～29	舟に子のひだるき顔や風かほる（松窓乙二）
		季節の言葉（夏）	84～85	夕立の雲もとまらぬ・・・（式子内親王）
				夏の日のくれゆく時に・・・（岡麓）
				雲の峯いくつ崩れて月の山（松尾芭蕉）
				門ありて唯夏木立ありにけり（高浜虚子）
				涼風や青田の上の雲のかげ（森川許六）
		季節の言葉（秋）	126	鰯雲この一族の大移動（茨木和生）
				いわし雲大いなる瀬をさかのぼる（飯田蛇笏）
				鰯雲天にひろごり萩咲けり（水原秋櫻子）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
5	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（冬）	189	夕焼けてなほそだつなる氷柱かな（中村汀女）
	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（冬）	189	華やかに風花降らすどの雲ぞ（相馬遷子）
				東風吹かばにほひおこせよ・・・（菅原道真）
	古文	声に出して楽しもう	50～51	竹取物語
			52	枕草子
			53	平家物語
	古典	学習を広げる	248	徒然草「高名の木登り」
	漢詩・漢文	声に出して楽しもう	144～145	論語「己の欲せざる所は・・・
				論語「過ちて改めざる・・・
				論語「学びて思はざれば・・・
6	詩	季節の言葉（冬）	172～173	早春賦（吉丸一昌）
	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（春）	30～31	子等は皆貝を拾ふと・・・（落合直文）
				故郷やどちらを見ても山笑ふ（正岡子規）
		季節の言葉（夏）	76～77	暑き日を海にいれたり最上川（松尾芭蕉）
				夕立が洗つていつた茄子をもぐ（種田山頭火）
				日焼け顔見合ひてうまし氷水（水原秋櫻子）
				炎天の地上花あり百日紅（高浜虚子）
		短歌を作ろう	78	たのしみは妻子むつまじく・・・（橘曙覧）
				たのしみは昼寝目ざむる・・・（橘曙覧）
				たのしみは朝おきいでて・・・（橘曙覧）
			81～82	蜻蛉やとりつきかねし草の上（松尾芭蕉）
				肩に来て人懐かしや赤蜻蛉（夏目漱石）
				大空にとどまつてをる蜻蛉かな（高浜虚子）
				とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな（中村汀女）
		季節の言葉（秋）	130～131	見わたせば花も紅葉も・・・（藤原定家）
			130～131	ちる芒寒くなるのが目にみゆる（小林一茶）
			130～131	秋深き隣は何をする人ぞ（松尾芭蕉）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
6	和歌・短歌・俳句	季節の言葉（冬）	172～173	「寒いね」と話しかければ・・・（俵万智）
				梅一輪一輪ほどの暖かさ（服部嵐雪）
				水枕ガバリと寒い海がある（西東三鬼）
				柊の花一本の香りかな（高野素十）
	漢詩・漢文	季節の言葉（春）	30～31	春暁（孟浩然）
				春宵一刻値千金（蘇軾）
		季節の言葉（秋）	130～131	静夜思（李白）
	狂言	伝統文化を楽しもう	62～69	柿山伏
	落語	学習を広げる	237	寿限無　※
	名文	声に出して楽しもう	150～151	天地の文（福澤諭吉）

23東京書籍（小）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1下	昔話	むかしばなしを よんで　もらおう	122～129	花さかじい（松谷みよ子）
2上	昔話	言いつたえられている　お話を　しろう	104～105	でいだらぼっち　※
			106	いなばの白うさぎ　※
			107	やまたのおろち　※
				海さち山さち　※
2下	昔話	むかし話を 楽しんで　読もう	62～72	かさこじぞう（岩崎京子）
3上	落語	読書の部屋	118～129	じゅげむ（川端誠）
3下	和歌・短歌・俳句	俳句に親しもう	76～80	菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな（村上鬼城）
				雪とけて村いっぱいの子どもかな（小林一茶）
				山路来て何やらゆかしすみれ草（松尾芭蕉）
				青がえるおのれもペンキぬりたてか（芥川龍之介）
				ひっぱれる糸まっすぐや甲虫（高野素十）
				さみだれや大河を前に家二軒（与謝蕪村）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3下	和歌・短歌・俳句	俳句に親しもう	76～80	赤とんぼ筑波に雲もなかりけり（正岡子規）
				いなびかり北よりすれば北を見る（橋本多佳子）
				名月を取ってくれろと泣く子かな（小林一茶）
				遠山に日の当たりたる枯野かな（高浜虚子）
				冬菊のまとふはおのが光のみ（水原秋桜子）
				スケートのひもむすぶ間もはやりつつ（山口誓子）
４下	和歌・短歌・俳句	「百人一首」を声に出して読んでみよう	80～84	あらしふく三室の山の・・・（能因法師）
				春すぎて夏来にけらし・・・・（持統天皇）
				田子の浦にうちいでて見れば・・・（山部赤人）
				奥山にもみぢ踏み分け・・・（猿丸大夫）
				天の原ふりさけ見れば・・・（安倍仲麿）
				君がため春の野にいでて・・・（光孝天皇）
				久方の光のどけき・・・（紀友則）
				人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				秋風にたなびく雲の・・・（左京大夫顕輔）
				ほととぎす鳴きつる方を・・・（後徳大寺左大臣）
５上	和歌・短歌・俳句	詩と俳句を味わおう	93	閑さや岩にしみいる蟬の声（松尾芭蕉）
				遠足のおくれ走りてつながりし（高浜虚子）
				夏草に汽缶車の車輪来て止まる（山口誓子）
				落ち葉たくけむりまとひて人きたる（水原秋桜子）
				白葱のひかりの棒をいま刻む（黒田杏子）
	古文	古文を声に出して読んでみよう	78～79	竹取物語
			80	徒然草
			82～83	平家物語
５下	古文	古文に親しもう	82～85	枕草子
６上	和歌・短歌・俳句	詩と短歌を味わおう	90～91	夏のかぜ山よりきたり・・・（与謝野晶子）
				真砂なす数なき星の・・・（正岡子規）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
6上	和歌・短歌・俳句	詩と短歌を味わおう	90～91	病める児はハモニカを吹き・・・（北原白秋）
				やわらかな秋の陽ざしに・・・（俵万智）
				てのひらにてのひらをおく・・・（東直子）
				校庭の地ならし用の・・・（穂村弘）
	漢詩・漢文	漢文を読んでみよう	76～81	論語「一を聞きて・・・
				論語「故きを温めて・・・
				論語「一に曰はく，和を以つて貴しとし・・・
				春暁（孟浩然）

23教育出版（小）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2上	昔話	むかしの　お話を読む	56～63	いなばの　しろうさぎ（福永武彦）
2下	昔話	むかしのお話を楽しむ	44～53	かさこじぞう（岩崎京子）
3上	和歌・短歌・俳句	日本語のひびきにふれる	60～64	せみの声遊べ遊べと聞こえる日（山崎早希子）
				雪とけて村いっぱいの子どもかな（小林一茶）
				菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				はねわっててんとう虫のとびいずる（高野素十）
				さじなめて童たのしも夏氷（山口誓子）
				荒海や佐渡によことう天河（松尾芭蕉）
				かきくえば鐘が鳴るなり法隆寺（正岡子規）
				せきの子のなぞなぞあそびきりもなや（中村汀女）
				うつくしきひよりになりぬ雪のうえ（炭太祇）
3下	和歌・短歌・俳句	言葉のとびら	126～129	すずめの子そこのけそこのけお馬が通る（小林一茶）
				古池やかわずとびこむ水のおと（松尾芭蕉）
				スリッパをこえかねているこねこかな（高浜虚子）
				顔じゅうを蒲公英にしてわらうなり（橋間石）
				夏川をこすうれしさよ手にぞうり（与謝蕪村）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
３下	和歌・短歌・俳句	言葉のとびら	126～129	ひっぱれる糸まっすぐやかぶと虫（高野素十）
				しずかさや岩にしみいるせみの声（松尾芭蕉）
				青がえるおのれもペンキぬりたてか（芥川龍之介）
				日やけ顔見合いてうまし氷水（水原秋桜子）
				名月をとってくれろとなく子かな（小林一茶）
				空遠く声あわせ行く小鳥かな（炭太祇）
				秋の蚊のよろよろと来て人をさす（正岡子規）
				名月やたたみの上にまつのかげ（宝井其角）
				赤とんぼ葉末にすがり前のめり（星野立子）
				スケートのひもむすぶ間もはやりつつ（山口誓子）
				こがらしや海に夕日をふき落とす（夏目漱石）
				うまそうな雪がふうわりふうわりと（小林一茶）
				えりまきに首引き入れて冬の月（杉山杉風）
				雪の朝二の字二の字のげたのあと（田捨女）
4上	和歌・短歌・俳句	日本語のひびきにふれる	60～64	東の野にかぎろいの・・・（柿本人麻呂）
				秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				見わたせば花ももみじも・・・（藤原定家）
				かすみたつ長き春日に・・・（良寛）
				金色のちいさき鳥の・・・（与謝野晶子）
				たわむれに母を背負いて・・・（石川啄木）
4下	和歌・短歌・俳句	言葉のとびら	144～145	あしびきの山鳥の尾の・・・（柿本人麻呂）
				田子の浦にうちいでてみれば・・・（山部赤人）
				天の原ふりさけ見れば・・・（阿倍仲麻呂）
				君がため春の野にいでて・・・（光孝天皇）
				しのぶれど色にいでにけり・・・（平兼盛）
				夕されば門田の稲葉・・・（源経信）
				秋風にたなびく雲の・・・（藤原顕輔）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
4下	和歌・短歌・俳句	言葉のとびら	144～145	ほととぎす鳴きつる方を・・・（藤原実定）
	落語（民話）	本の世界を広げて読む	54～65	ぞろぞろ（三遊亭円窓）
			146～153	寿限無（三遊亭円窓）
5上	漢詩・漢文	日本語のひびきを味わう	58～63	春暁（孟浩然）
				静夜思（李白）
				論語「故きを温ねて・・・
				大学「心焉に在らざれば・・・
		言葉のとびら	118～121	春夜（蘇軾）
				江南の春（杜牧）
				山亭の夏日（高駢）
				論語「学びて時に・・・
				論語「吾十有五にして学に志す。・・・
5下	古文	日本の文化を考える	30	竹取物語
			34	平家物語
		言葉のとびら	126～129	更級日記
				伊曾保物語
	狂言		132～141	附子
6上	古文	日本語のひびきを味わう	60～64	枕草子
		言葉のとびら	120～123	徒然草
				おくのほそ道
				銀の滴降る降るまわりに（知里幸恵_アイヌ神謡）
				おもろそうし（外間守善）
6下	詩		126～127	小諸なる古城のほとり（島崎藤村）
	和歌・短歌・俳句	日本の文化を考える	33～34	柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺（正岡子規）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				瓶にさす藤の花ぶさ・・・（正岡子規）
				くれなゐの二尺伸びたる・・・（正岡子規）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
6下	和歌・短歌・俳句	日本の文化を考える	33～34	田子の浦ゆうちいでて見れば・・・（山部赤人）
				淡海の海夕波千鳥・・・（柿本人麻呂）
			156～158	四万十に光の粒を・・・（俵万智）
				石走る垂水の上の・・・（志貴皇子）
				古池や蛙飛びこむ水のおと（松尾芭蕉）
				東の野にかぎろひの・・・（柿本人麻呂）
				菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				たのしみはまれに魚煮て・・・（橘曙覧）
				卒業の兄と来てゐる堤かな（芝不器男）
				芭蕉翁ぼちやんといふと立ち留まり（江戸古川柳）
				はへば立て立てば歩めの親心
				まだももは流れてこぬに子はねいり
				本ぶりになつて出てゆく雨やどり

23学校図書（小）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2上	昔話	むかしの物語をたのしもう	90～97	ヤマタノオロチ
2下	昔話	ようすを思いうかべよう	28～39	かさこじぞう（岩崎京子）
3上	和歌・短歌・俳句	言葉のリズムを感じてみよう	97～99	ふる池や蛙飛びこむ水の音（松尾芭蕉）
				夏河を越すうれしさよ手に草履（与謝蕪村）
				名月を取ってくれろと泣く子かな（小林一茶）
				雪の朝二の字二の字の下駄のあと（田捨女）
4上	和歌・短歌・俳句	言葉から風景を想像しよう	103～105	田子の浦にうち出でて見れば・・・（山部赤人）
				大江山生野の道の・・・（小式部内侍）
				嵐吹く三室の山の・・・（能因法師）
				ほととぎす鳴きつる方を・・・（藤原実定）
5上	詩	詩を読もう	104～105	まり（八木重吉）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
5上	和歌・短歌・俳句	言葉の文化に親しもう	106	わたの原八十島かけて・・・（小野篁）
	古文	言葉の文化に親しもう	107	宇治拾遺物語「小野篁広才の事」
		随筆を書こう	110～111	枕草子
5下	和歌・短歌・俳句	短歌・俳句を作ろう	64～66	この里に手まりつきつつ・・・（良寛）
				名月をとつてくれろとなく子かな（小林一茶）
6上	詩	言葉のリズムやひびきを楽しもう	96～97	やしの実（島崎藤村）
	漢詩・漢文	言葉のリズムやひびきを楽しもう	99	胡隠君を尋ぬ（高啓）

23三省堂（小）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1別冊	昔話	むかしばなしをたのしもう	46～53	いなばの　白ウサギ
2	昔話	むかし話を楽しもう	152～161	かさこじぞう（岩崎京子）
2別冊	昔話	読書の森で	74～81	古屋のもり（坪田譲治）
		巻末折込	89～90	ももたろう　※
				さるかに合戦　※
				ぶんぶく茶がま　※
				花さかじいさん　※
3	和歌・短歌・俳句	声に出して読もう―俳句	92～93	古池やかはづとびこむ水の音（松尾芭蕉）
				さみだれを集めて早し最上川（松尾芭蕉）
				なの花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				ぼたんちりてうち重なりぬ二三ぺん（与謝蕪村）
				やせがへる負けるな一茶これにあり（小林一茶）
				雪とけて村いっぱいの子どもかな（小林一茶）
				かき食へばかねが鳴るなり法隆寺（正岡子規）
				いくたびも雪のふかさをたづねけり（正岡子規）
3別冊	古文	読書の森で	101	いろは歌
			102～103	竹取物語

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3 別冊	笑話	読書の森で	100	星取り
4	和歌・短歌・俳句	声に出して読もう ―短歌	88～89	東の野にかぎろひの・・・（柿本人麻呂）
				ひさかたの光のどけき・・・（紀友則）
				いにしへの奈良の都の・・・（伊勢大輔）
				箱根路をわれこえくれば・・・（源実朝）
				かすみ立つ長き春日に・・・（良寛）
				楽しみはまれに魚にて・・・（橘曙覧）
				夏のかぜ山よりきたり・・・（与謝野晶子）
	落語		54～56	じゅげむ
4 別冊	和歌・短歌・俳句	読書の森で	102～103	春すぎて夏来にけらし・・・（持統天皇）
				田子の浦にうちいでて見れば・・・（山部赤人）
				天の原ふりさけ見れば・・・（阿倍仲麿）
				ひさかたの光のどけき・・・（紀友則）
	落語（民話）	巻末折込	107～108	初天神　※
				長屋の花見　※
	昔話	巻末折込	104～105	浦島太郎
5	狂言		56～62	しびり
5 別冊	古文	読書の森で	126～127	平家物語
	漢詩・漢文	読書の森で	124～125	絶句（杜甫）
				春暁（孟浩然）
	落語	読書の森で	118～123	まんじゅうこわい（石崎洋司）
6	和歌・短歌・俳句	表現のくふうを楽しもう	176～178	自転車のカゴからわんと・・・（俵万智）
				瓶にさす藤の花ぶさ・・・（正岡子規）
				この里に手まりつきつつ・・・（良寛）
				四万十に光の粒を・・・（俵万智）
				金色のちひさき鳥の・・・（与謝野晶子）
		場面の様子と自分の思いとをかき分けよう	66～67	徒然草　※

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
6	和歌・短歌・俳句	場面の様子と自分の思いとをかき分けよう		枕草子　※
	漢詩・漢文	声に出して読もう	170～171	論語「学びて時に・・・
				論語「吾れ日に三たび・・・
				論語「故きを温めて・・・
				論語「仁者は必ず勇有り。・・・
				論語「己の欲せざる所は・・・
6 別冊	古文	読書の森で	120	枕草子
			122～123	徒然草
			124～127	おくのほそ道

18光村（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	古文	4　古典との出会い	106	いろは歌
			111～121	竹取物語
	漢詩・漢文	4　古典との出会い	122～124	矛盾
2年	和歌	豊かな言葉	54～59	草わかば色鉛筆の・・・（北原白秋）
				瓶にさす藤の花ぶさ・・・（正岡子規）
				こころよき疲れなるかな・・・（石川啄木）
		学習を広げる	228～229	九十九里の波の遠鳴り・・・（伊藤左千夫）
				まばらなる冬木林に・・・（島木赤彦）
				海恋し潮の遠鳴りかぞへては・・・（与謝野晶子）
				しめやかに雨過ぎしかば・・・（長塚節）
				死に近き母に添寝の・・・（斎藤茂吉）
				風暗き都会の冬は・・・（前田夕暮）
				ゆふぐれの雪降るまへの・・・（若山牧水）
				夜更けて寂しけれども・・・（佐藤佐太郎）
				むらさきに菫の花は・・・（宮柊二）
				ずぶ濡れのラガー奔るを・・・（塚本邦雄）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
				「寒いねと」話しかければ・・・（俵万智）
	古文	4　古典に親しむ	106～107	枕草子
			111～117	平家物語「祇園精舎」「那須与一」
			118～119	徒然草「仁和寺にある法師」
	漢詩・漢文	4　古典に親しむ	122～127	春暁（孟浩然）
				絶句（杜甫）
				黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
3年	和歌	4　古典を楽しむ	119～124	万葉「春過ぎて夏来るらし白栲の・・・（持統天皇）
				万葉「東の野に炎の立つ見えて・・・（柿本人麻呂）
				万葉「天地の　分かれし時ゆ・・・（山部赤人）
				万葉「田児の浦ゆうち出でて見れば・・・
				万葉「憶良らは今は罷らむ・・・（山上憶良）
				万葉「君待つと吾が恋ひをれば・・・（額田王）
				万葉「多摩川にさらす手作り・・・（東歌）
				万葉「父母が頭かき撫で・・・（防人歌）
				万葉「新しき年の初めの・・・（大伴家持）
				古今「人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				古今「しら露の色はひとつを・・・（藤原敏行）
				古今「思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				古今「飛鳥川淵は瀬になる・・・（よみ人しらず）
				新古今「花さそふ比良の山風・・・（宮内卿）
				新古今「道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				新古今「見わたせば花ももみぢもなかりけり・・・（藤原定家）
				新古今「玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
	俳句	豊かな言葉	58～63	どの子にも涼しく風の吹く日かな（飯田龍太）
				せつせつと眼まで濡らして髪洗ふ（野澤節子）
				虫の夜の星空に浮く地球かな（大峯あきら）
				咳をしても一人（尾崎放哉）
				灰色の象のかたちを見にゆかん（津沢マサ子）
		学習を広げる	218～219	梅一輪一輪ほどの暖かさ（服部乱雪）
				夏河を越すうれしさよ手に草履（与謝蕪村）
				稲妻にへなへな橋を渡りけり（小林一茶）
				木枯の果はありけり海の音（池西言水）
				赤い椿白い椿と落ちにけり（河東碧梧桐）
				ちるさくら海あをければ海へちる（高屋窓秋）
				人体冷えて東北白い花盛り（金子兜太）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	俳句	学習を広げる	218～219	六月を奇麗な風の吹くことよ（正岡子規）
				あるけばかつこういそげばかつこう（種田山頭火）
				山超える山のかたちの夏帽子（桂信子）
				くろがねの秋の風鈴鳴りにけり（飯田蛇笏）
				月幾世照らせし鴟尾に今日の月（水原秋櫻子）
				まだ夢はあるか　きつつき木を覗く（鎌倉佐弓）
				流れ行く大根の葉の早さかな（高浜虚子）
				咳をする母を見上げてゐる子かな（中村汀女）
				木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ（加藤楸邨）
	古文	4　古典を楽しむ	114～115	古今和歌集「仮名序」
			126～132	おくのほそ道「旅立ち（冒頭）」「平泉」
	漢詩・漢文	4　古典を楽しむ	134～136	論語「学びて時にこれを習ふ・・・
				論語「故きを温めて・・・
				論語「学びて思はざれば・・・
				論語「己の欲せざるところは・・・
		学習を広げる	229～233	史記「項羽と劉邦」

18東京書籍（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩		101	大阿蘇（三好達治）
			196～197	雲（山村暮鳥）
				虫（八木重吉）
				土（三好達治）
	古文	4　古典に親しもう	79	いろはうた
			80～86	竹取物語
			88～93	枕草子
		資料編	208～211	伊勢物語
				源氏物語
				土佐日記
				梁塵秘抄
	漢詩・漢文	4　古典に親しもう	95～97	矛盾
				五十歩百歩・漁夫の利・呉越同舟・蛇足・杞憂
2年	詩	1　言葉のひびきを味わおう	8～9	草に寝て……　六月の或る日曜日に（立原道造）
		日本語のしらべ	93	落葉松（北原白秋）
	和歌	1　言葉のひびきを味わおう	10～12	なにとなく君に待たるる・・・（与謝野晶子）
				死に近き母に添寝のしんしんと・・・（斎藤茂吉）
				誰が見てもわれをなつかしくなるごとき・・・（石川啄木）
				わが夏をあこがれのみが・・・（寺山修司）
				今日までに私がついた嘘なんて・・・（俵万智）
	古文	4　古典を楽しもう	72～74	徒然草「ある人，弓を射ることを習ふに」
				徒然草「雪のおもしろう降りたりし朝」
			77～83	平家物語「那須与一」「祇園精舎」
		資料編	216～219	方丈記「行く河の流れは・・・（冒頭）」
				宇治拾遺物語「木こり歌のこと」
				御伽草子「浦島太郎」
	漢詩・漢文	4　古典に親しもう	86～89	論語「故きを温めて・・・
				論語「学びて思はざれば・・・
				論語「君子は諸を己に求む。・・・
	謡曲	資料編	218	高砂
3年	詩	日本語のしらべ	101	千曲川旅情のうた（島崎藤村）
	和歌	4　古典を味わおう	80～84	万葉「東の野にかぎろひの立つ見えて・・・（柿本人麻呂）
				万葉「瓜食めば　子ども思ほゆ・・・（山上憶良）
				万葉「銀も金も玉も何せむに・・・
				万葉「若の浦に潮満ち来れば・・・（山部赤人）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	和歌	4　古典を味わおう	80～84	万葉「うららうらに照れる春日に・・・（大伴家持）
				万葉「信濃道は今の墾り道刈りばねに・・・（東歌）
				万葉「韓衣裾に取りつき泣く子らを・・・（防人歌）
				古今「ひとはいさ心もしらず・・・（紀貫之）
				古今「秋きぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				古今「うたたねに恋しき人を・・・（小野小町）
				新古今「山ふかみ春ともしらぬ・・・（式子内親王）
				新古今「道のべに清水ながるる・・・（西行法師）
				新古今「駒とめて袖うちはらふ・・・（藤原定家）
	俳句	1　言語感覚をみがこう	10～12	春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）
				滝落ちて群青世界とどろけり（水原秋桜子）
				をりとりてはらりとおもきすすきかな（飯田蛇笏）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				分け入つても分け入つても青い山（種田山頭火）
		資料編	196～198	春昼の指とどまれば琴も止む（野澤節子）
				外にも出よ触るるばかりに春の月（中村汀女）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				牡丹散りて打ちかさなりぬ二三片（蕪村）
				子にみやげなき秋の夜の肩ぐるま（能村登四郎）
				極寒のちりもとどめず巌ふすま（飯田蛇笏）
			215	月天心貧しき町を通りけり（蕪村）
				斧入れて香におどろくや冬こだち（蕪村）
				雪とけて村一ぱいの子ども哉（一茶）
				やれ打つな蠅が手を摺り足をする（一茶）
	古文	4　古典を味わおう	86～92	おくのほそ道「旅立ち（冒頭）」「平泉」
		資料編	212～214	日本永代蔵
				雨月物語
	漢詩・漢文	4　古典を味わおう	94～97	春望（杜甫）
				黄鶴楼にて，孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
	人形浄瑠璃	資料編	212～214	曾根崎心中

18教育出版（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	第2部　補充と発展	144～145	春（安西冬衛）
				枇杷のたね（竹久夢二）
				虫（八木重吉）
				雪（三好達治）
	和歌	巻末付録	折込	小倉百人一首（100首掲載）
	川柳	第1部　基本　読む 古典のとびら	16～23	本ぶりになつて出てゆく雨やどり
				寝てゐても団扇のうごく親心
				逃げしなに覚えて居ろは負けたやつ
				その後はこはごは翁竹を割り
	古文	第1部　基本　読む 古典のとびら	16～23	沙石集「児の飴食ひたる事」
		第1部　基本　読む　古	60～67	竹取物語
	漢詩・漢文	第1部　基本　読む 古典のとびら	16～23	矛盾
2年	詩	第2部　補充と発展	136～139	手（山村暮鳥）
				蜻蛉に寄す（中原中也）
	和歌	第1部　基本　読む　詩歌	56～59	みちのくの母のいのちを一目見ん・・・（斎藤茂吉）
				死に近き母に添寝のしんしんと・・・（斎藤茂吉）
				のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて・・・（斎藤茂吉）
				やはらかに柳あをめる・・・（石川啄木）
				ふるさとの訛なつかし・・・（石川啄木）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2年	和歌	第1部　基本　読む　詩歌	56～59	幾山河越えさり行かば・・・（若山牧水）
				白鳥はかなしからずや・・・（若山牧水）
				なにとなく君に待たるるここちして・・・（与謝野晶子）
				小百合さく小草がなかに君まてば・・・（与謝野晶子）
	古文	第1部　基本　読む　古典のとびら	16～23	平家物語「祇園精舎」「扇の的」「敦盛の最期」
		第1部　基本　読む　古典	60～67	枕草子
				徒然草「公世の二位のせうとに」「仁和寺にある法師」
		資料	274～277	いろは歌・あめつち
	漢詩・漢文	第1部　基本　読む　古典のとびら	24～27	論語「徳孤ならず。必ず隣有り。」
				論語「己の欲せざる所，・・・
				論語「学びて時に之を習ふ，・・・
3年	詩	第2部　補充と発展	154～157	ぼろぼろな駝鳥（高村光太郎）
				初恋（島崎藤村）
	和歌	第1部　基本　読む　古典	60～65	万葉「春過ぎて夏来たるらし・・・（持統天皇）
				万葉「君待つと吾が恋ひをれば・・・（額田王）
				万葉「近江の海夕波千鳥・・・（柿本人麻呂）
				万葉「うらうらに照れる春日に・・・（大伴家持）
				万葉「多摩川にさらす手作り・・・（東歌）
				万葉「防人に行くはたが背と・・・（防人の歌）
				万葉「瓜食めば子ども思ほゆ・・・（山上憶良）
				万葉「銀も金も玉も何せむに・・・
				古今「人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				古今「秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				古今「思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				新古今「道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				新古今「見わたせば花も紅葉も・・・（藤原定家）
				新古今「玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
	俳句	第1部　基本　読む　詩歌	56～59	春浅き水を渡るや鷺一つ（河東碧梧桐）
				春風や闘志いだきて丘にたつ（高浜虚子）
				ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな（村上鬼城）
				雨がちに端午ちかつく父子かな（石田波郷）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				岩に爪たてて空蟬泥まみれ（西東三鬼）
				啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々（水原秋櫻子）
				金剛の露ひとつぶや石の上（川端茅舎）
				秋刀魚焼く匂の底へ日は落ちぬ（加藤楸邨）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				咳の子のなぞなぞ遊びきりもなや（中村汀女）
				真つ白き障子の中に春を待つ（松本たかし）
				夕立やお地蔵さんもわたしもずぶぬれ（種田山頭火）
				こんなよい月を一人で見て寝る（尾崎放哉）
				眼にあてて海が透くなり桜貝（松本たかし）
	古文	第1部　基本　読む　古典	16～25	おくのほそ道「旅立ち（冒頭）」「平泉」「立石寺」
		巻末付録	折込	万葉集・竹取物語・伊勢物語・古今和歌集・土佐日記・枕草子・源氏物語・方丈記・平家物語・徒然草の冒頭
	漢詩・漢文	第1部　基本　読む　古典	66～73	黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
				春望（杜甫）

18学校図書（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	古文	4　時をこえて	168～177	竹取物語
			198～205	宇治拾遺物語

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	漢詩・漢文	4　時をこえて	178～183	矛盾
2年	和歌	2　命の交差	50～55	「この味がいいね」と・・・（俵万智）
				くれなゐの二尺伸びたる・・・（正岡子規）
				秋草の直立つ中に・・・（道浦母都子）
				振りむけばなくなりさうな・・・（河野裕子）
				馬にでも喰はれてしまへ・・・（永井陽子）
				不来方のお城の草に・・・（石川啄木）
				困らせる側に目立たずいることを・・・（平井弘）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
				わがシャツを干さん高さの・・・（寺山修司）
				たゝかひに果てにし子ゆゑ・・・（釈迢空）
				遺体死体数百といひ・・・（土岐善麿）
				おお！偉大なるセイギが・・・（荻原裕幸）
				死に近き母に添ひ寝のしんしんと・・・（斎藤茂吉）
				眠られぬ母のためわが誦む童話・・・（岡井隆）
				母逝くと吾子のつたなき返しぶみ・・・（草地宇山）
				のぼり坂ペダル踏みつつ子は叫ぶ・・・（佐佐木幸綱）
	古文	4　時の中で	158～169	平家物語「祇園精舎」「敦盛の最期」
			190～195	徒然草「高名の木登り」「猫また」
	漢詩・漢文	4　時の中で	170～175	論語「吾十有五にして学に志す。・・・
				論語「学んで思はざれば・・・
				論語「由、女に之を知るを・・・
				論語「一言にして以て身を終ふるまで・・・
3年	和歌	4　今に向かって	154～160	あいみてののちの心の夕まぐれ・・・（俵万智）
				逢ひ見ての後の心にくらぶれば・・・（藤原敦忠）
				万葉「春過ぎて夏きたるらし・・・（持統天皇）
				万葉「磐代の浜松が枝を引き結び・・・（有間皇子）
				万葉「東の野に炎の立つ見えて・・・（柿本人麻呂）
				万葉「天地の分かれし時ゆ・・・
				万葉「田子の浦ゆうちいでて見れば・・・（山部赤人）
				万葉「防人に行くはたが背と・・・（防人の妻）
				万葉「春の野に霞たなびき・・・（大伴家持）
				古今「ひさかたのひかりのどけき・・・（紀友則）
				古今「秋来ぬとめにはさやかに・・・（藤原敏行）
				古今「むすぶ手のしづくにごるる・・・（紀貫之）
				古今「思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				新古今「山深み春とも知らぬ・・・（式子内親王）
				新古今「昔思ふ草の庵の夜の雨に・・・（藤原俊成）
				新古今「心なき身にもあはれは・・・（西行法師）
				新古今「駒とめて袖打ち払ふ陰もなし・・・（藤原定家）
	俳句	2　命の共鳴	58～60	春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）
				滝落ちて群青世界とどろけり（水原秋桜子）
				分け入つても分け入つても青い山（種田山頭火）
				つきぬけて天上の紺曼珠沙華（山口誓子）
				芋の露連山影を正しうす（飯田蛇笏）
				この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉（三橋鷹女）
				鮟鱇の骨まで凍ててぶちきらる（加藤楸邨）
				冬蜂の死にどころなく歩きけり（村上鬼城）
				木の揺れが魚に移れり半夏生（大木あまり）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				子の髪の風に流るる五月来ぬ（大野林火）
				きみ嫁けり遠き一つの訃に似たり（高柳重信）
				別なひと見てゐる彼のサングラス（黛まどか）
				捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて（鈴木ゆすら）
				戦歿の友のみ若し霜柱（三橋敏雄）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	古文	4　今に向かって	166～173	おくのほそ道「旅立ち（冒頭）」「平泉」
				枕草子
	漢詩・漢文	4　今に向かって	161～165	春望（杜甫）
				元二の安西に使ひするを送る（王維）
				静夜の思ひ（李白）

18三省堂（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	古文	わたしたちと古典	54～61	竹取物語
	漢詩・漢文	わたしたちと古典	62～64	矛盾
	落語	資料編　読書の森へ	198～207	初天神
2年	和歌	短歌の世界	14～19	いちはつの花咲きいでて・・・（正岡子規）
				列車にて遠く見ている・・・（寺山修司）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
				みづうみの氷は解けてなほ寒し・・・（島木赤彦）
				海恋し潮の遠鳴りかぞへては・・・（与謝野晶子）
				みちのくの母のいのちを一目見ん・・・（斎藤茂吉）
				春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと・・・（北原白秋）
				白鳥は哀しからずや・・・（若山牧水）
				やはらかに柳あをめる・・・（石川啄木）
				白き虚空とどまり・・・（近藤芳美）
				つばくらめ空飛びわれは・・・（馬場あき子）
				〈生まれたらそこがふるさと〉・・・（李正子）
				「寒いねと」話しかければ・・・（俵万智）
	古文	平家物語	58～67	平家物語「祇園精舎」「敦盛の最期」
		枕草子・徒然草	104～110	枕草子
				徒然草「序段」「仁和寺にある法師」
	漢詩・漢文	漢詩の世界	68～71	春暁（孟浩然）
				黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
				春望（杜甫）
	狂言	資料編　ひろがる読書	196～205	柿山伏
3年	詩	初恋	48～49	初恋（島崎藤村）
	和歌	和歌の世界	50～55	万葉「春過ぎて夏来たるらし・・・（持統天皇）
				万葉「東の野にかぎろひの立つ見えて・・・（柿本人麻呂）
				万葉「銀も金も玉の何せむに・・・（山上憶良）
				万葉「我が屋戸のいささ群竹・・・（大伴家持）
				万葉「天地の分かれし時ゆ・・・（山部赤人）
				万葉「田子の浦ゆうち出でて見れば・・・
				万葉「あしひきの山のしづくに・・・（大津皇子）
				万葉「我を待つと君が濡れけむ・・・（石川郎女）
				万葉「多摩川にさらす手作り・・・（東歌）
				万葉「父母が頭かきなで・・・（防人歌）
				古今「人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				古今「花の色は移りにけりな・・・（小野小町）
				古今「秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				新古今「道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				新古今「駒とめて袖うちはらふ・・・（藤原定家）
				新古今「玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
	俳句	俳句の世界	8～12	谺して山ほととぎすほしいまま（杉田久女）
				桐一葉日当りながら落ちにけり（高浜虚子）
				まさをなる空よりしだれざくらかな（富安風生）
				菫ほどな小さき人に生れたし（夏目漱石）
				菜の花がしあはせさうに黄色して（細見綾子）
				バスを待ち大路の春をうたがはず（石田波郷）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	俳句	俳句の世界	8～12	万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				じゃんけんで負けて蛍に生まれたの（池田澄子）
				芋の露連山影を正しうす（飯田蛇笏）
				星空へ店より林檎あふれをり（橋本多佳子）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				咳の子のなぞなぞあそびきりもなや（中村汀女）
				鮟鱇の骨まで凍てて ぶちきらる（加藤楸邨）
				入れものが無い両手で受ける（尾崎放哉）
				湾曲し火傷し爆心地のマラソン（金子兜太）
		おくのほそ道	61	菜の花や月は東に日は西に（蕪村）
				さみだれや大河を前に家二軒（蕪村）
				雪とけて村一ばいの子どもかな（一茶）
				これがまあついの栖か雪五尺（一茶）
	古文	おくのほそ道	56～61	おくのほそ道「旅立ち（冒頭）」「平泉」
	漢詩・漢文	資料編　ひろがる読書	200～201	論語「吾十有五にして学に志す。・・・
				論語「学びて思はざれば・・・
				論語「過ちて改めざる，・・・

24光村（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	季節のしおり（春）	35	朧月夜（高野辰之）
				小諸なる古城のほとり（島崎藤村）
		豊かな言葉	62	りんご（山村暮鳥）
			63	蟬頃（室生犀星）
		季節のしおり（夏）	88	海（作者不詳）
				薔薇二曲（北原白秋）
		季節のしおり（秋）	130	紅葉（高野辰之）
				一つのメルヘン（中原中也）
		季節のしおり（冬）	205	冬景色（作者不詳）
				冬が来た（高村光太郎）
	古文	4　いにしえの心にふれる	131～132	いろは歌
			138～145	竹取物語「冒頭」「蓬莱の玉の枝」「ふじの山」
	漢詩・漢文	4　いにしえの心にふれ	149	矛盾
	落語	学習を広げる	284～285	時そば
2年	詩	季節のしおり（秋）	121～122	素朴な琴（八木重吉）
	和歌・短歌・俳句	季節のしおり（春）	35	せりなづな　ごぎやうはこべら・・・
				外にも出よ触るるばかりに春の月（中村汀女）
		豊かな言葉	56～61	くれなゐの二尺伸びたる・・・（正岡子規）
				川ひとすぢ菜たね十里の・・・（与謝野晶子）
				蚊帳のなかに放ちし蛍・・・（斎藤茂吉）
				深々と人間笑ふ・・・（北原白秋）
				海を知らぬ少女の前に・・・（寺山修司）
				思い出の一つのようで・・・（俵万智）
				鳳仙花ちりておつれば・・・（窪田空穂）
				白鳥はかなしからずや・・・（若山牧水）
				不来方のお城の草に・・・（石川啄木）
				街をゆき子供の傍を・・・（木下利玄）
				桜ばないのち一ばいに・・・（岡本かの子）
				ぞろぞろと鳥けだものを・・・（前川佐美雄）
				はとばまであんずの花が・・・（斎藤史）
				新しきとしのひかりの・・・（宮柊二）
				ジャージーの汗滲むボール・・・（佐佐木幸綱）
				白き霧ながるる夜の・・・（高野公彦）
				土鳩はどどつぽどどつぽ・・・（河野裕子）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2年	和歌・短歌・俳句	豊かな言葉	56～61	観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
		季節のしおり（夏）	92	青蛙おのれもペンキぬりたてか（芥川龍之介）
		季節のしおり（秋）	121～122	萩の花尾花葛花・・・（山上憶良）
				葉洩日に碧玉透けし葡萄かな（杉田久女）
				赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり（正岡子規）
		季節のしおり（冬）	171	夕焼空焦げきはまれる・・・（島木赤彦）
				遠山に日の当たりたる枯野かな（高浜虚子）
	古文	季節のしおり（春）	29	枕草子「春はあけぼの」
		1　広がる学びへ	30～31	枕草子「春はあけぼの」
		5　いにしえの心を訪ねる	134～142	平家物語「祇園精舎」「扇の的」
			144～145	徒然草「仁和寺にある法師」
	漢詩・漢文	5　いにしえの心を訪ねる	147～153	春暁（孟浩然）
				絶句（杜甫）
				黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
				春望（杜甫）
3年	和歌・短歌・俳句	季節のしおり（春）	31	石走る垂水の上の・・・（志貴皇子）
				世の中に絶えて桜の・・・（在原業平）
				山路来て何やらゆかしすみれ草（松尾芭蕉）
		豊かな言葉	58～63	どの子にも涼しく風の吹く日かな（飯田龍太）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				跳箱の突き手一瞬冬が来る（友岡子郷）
				たんぽぽのぽぽと絮毛のたちにけり（加藤楸邨）
				分け入つても分け入つても青い山（種田山頭火）
				古池や蛙飛こむ水のおと（松尾芭蕉）
				斧入て香におどろくや冬こだち（与謝蕪村）
				名月を取てくれろとなく子哉（小林一茶）
				ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな（村上鬼城）
				赤い椿白い椿と落ちにけり（河東碧梧桐）
				桐一葉日当たりながら落ちにけり（高浜虚子）
				咳をしても一人（尾崎放哉）
				滝落ちて群青世界とどろけり（水原秋櫻子）
				金剛の露ひとつぶや石の上（川端茅舎）
				いなびかり北よりすれば北を見る（橋本多佳子）
				プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ（石田波郷）
				戦争が廊下の奥に立つてゐた（渡辺白泉）
				暗黒や関東平野に火事一つ（金子兜太）
				薄氷の吹かれて端の重なれる（深見けん二）
				日と月のごとく二輪の寒牡丹（鷹羽狩行）
				水の地球すこしはなれて春の月（正木ゆう子）
		季節のしおり（夏）	102	五月まつ花橘の・・・（よみ人知らず）
				夏の夜はまだよひながら・・・（清原深養父）
				をちこちに滝の音聞く若葉かな（与謝蕪村）
		季節のしおり（秋）	138	秋更けぬ鳴けや霜夜の・・・（後鳥羽院）
				村雨の露もまだ干ぬ・・・（寂蓮法師）
				朝顔に釣瓶とられてもらひ水（千代女）
		いにしえの心と語らう	143～148	古今和歌集　仮名序
				春過ぎて夏来るらし・・・（持統天皇）
				東の野に炎の・・・（柿本人麻呂）
				君待つと我が恋ひ居れば・・・（額田王）
				天地の分かれし時ゆ・・・（山部赤人）
				田子の浦ゆうち出でて・・・（山部赤人）
				憶良らは今は罷らむ・・・（山上憶良）
				多摩川にさらす手作り・・・（東歌）
				父母が頭かき撫で・・・（防人歌）
				春の園紅にほふ・・・（大伴家持）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	和歌・短歌・俳句	いにしえの心と語らう	143～148	人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				見わたせば花も紅葉も・・・（藤原定家）
				玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
		季節のしおり（冬）	189	山里は冬ぞさびしさ・・・（源宗于）
				あさぼらけ有明の月と・・・（坂上是則）
				うつくしや年暮きりし夜の空（小林一茶）
	古文	いにしえの心と語らう	150～155	夏草「旅立ち」「平泉」
			260～262	伊勢物語「冒頭」
				土佐日記「冒頭」
				源氏物語「冒頭」
				更級日記「冒頭」
				方丈記「冒頭」
				日本永代蔵「冒頭」
	漢詩・漢文	季節のしおり（冬）	190～191	論語「学びて時にこれを・・・
				論語「故きを温めて・・・
				論語「学びて思はざれば・・・
				論語「剛毅木訥・・・
		学習を広げる	250～253	史記「項羽と劉邦」

24東京書籍（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	1	11	【扉】チューリップ（三好達治）
			17～20	雲（山村暮鳥）
				虫（八木重吉）
				土（三好達治）
		日本語のしらべ	122～123	月夜の浜辺（中原中也）
		5	125	【扉】素朴な琴（八木重吉）
		6	147	【扉】胸にゐる（立原道造）
	和歌・短歌・俳句	資料編	270	古池や蛙飛びこむ水のおと（松尾芭蕉）
				むめがかにのつと日の出る山路かな（松尾芭蕉）
				菜の花や月は東に日は西に（与謝蕪村）
				さみだれや大河を前に家二軒（与謝蕪村）
				やれ打つな蠅が手を摺り足をする（小林一茶）
				むまさうな雪がふうはりふはり哉（小林一茶）
	古文	4	98～101	伊曽保物語「犬と肉のこと」「鳩と蟻のこと」
			103～106	竹取物語「冒頭」「姫の昇天」
			108～109	矛盾
		資料編	267	古事記「望郷の歌」
			268	土佐日記「旅立ち」
			269	伊勢物語「かへる浪」
	名文	4	95	【扉】少年老い易く学成り難し・・・
2年	詩	日本語のしらべ	120	落葉松（北原白秋）
	和歌・短歌・俳句	1	11	【扉】桜ばないのちーぱいに・・・（岡本かの子）
			15～18	金色のちひさき鳥の・・・（与謝野晶子）
				海を知らぬ少女の前に・・・（寺山修司）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
				くれなゐの二尺伸びたる・・・（正岡子規）
				最上川の上空にして・・・（斎藤茂吉）
				白鳥は哀しからずや・・・（若山牧水）
				不来方のお城の草に・・・（石川啄木）
				「寒いね」と話しかければ・・・（俵万智）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2年	和歌・短歌・俳句	2	25	【扉】草わかば色鉛筆の赤き粉の・・・（北原白秋）
		3	57	【扉】向日葵は金の油を・・・（前田夕暮）
		4	87	秋風にたなびく雲の・・・（藤原顕輔）
		5	123	【扉】十二色のいろえんぴつしかない・・・（荻原裕幸）
		6	141	【扉】街をゆき子供の傍を・・・（木下利玄）
		7	177	【扉】ほんとうにおれのもんかよ・・・（穂村弘）
	古文	4	88～90	枕草子「春はあけぼの」
			92～93	徒然草「序段」「仁和寺にある法師」
			96～101	平家物語「祇園精舎」「那須与一」
		資料編	276～278	枕草子「雪のいと高う降りたるを」
	漢詩・漢文	4	106～107	春望（杜甫）
			108	黄鶴楼にて，孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
		資料編	279～281	江雪（柳宗元）
				涼州詞（王翰）
	能	4	103	高砂
	浄瑠璃	4	104	義経千本桜
	歌舞伎	4	104	楼門五山桐
3年	詩	日本語のしらべ	124～125	初恋（島崎藤村）
		詩の言葉	198～199	レモン哀歌（高村光太郎）
	和歌・短歌・俳句	1	11	【扉】あをあをと空を残して蝶別れ（大野林火）
			15～18	たんぽぽや日はいつまでも大空に（中村汀女）
				囀をこぼさじと抱く大樹かな（星野立子）
				をりとりてはらりとおもきすすきかな（飯田蛇笏）
				春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり（正岡子規）
				冬菊のまとふはおのがひかりのみ（水原秋櫻子）
				分け入つても分け入つても青い山（種田山頭火）
		2	27	【扉】くちびるに触れてつぶらやさくらんぼ（日野草城）
		3	59	【扉】ゆるやかに着てひとと逢ふ蛍の夜（桂信子）
		4	95	戸を叩く狸と秋を惜みけり（与謝蕪村）
			96～101	古今和歌集　仮名序
				君待つと我が恋ひをれば・・・（額田王）
				近江の海夕波千鳥・・・（柿本人麻呂）
				瓜食めば子ども思ほゆ・・・（山上憶良）
				銀も金も玉も何せむに・・・（山上憶良）
				春の野にすみれ摘みにと・・・（山部赤人）
				うらうらに照れる春日に・・・（大伴家持）
				信濃道は今の墾り道・・・（東歌）
				韓衣裾に取りつき・・・（防人歌）
				ちはやぶる神世も聞かず・・・（在原業平）
				山里は冬ぞさびしさ・・・（源宗于）
				うたたねに恋しき人を・・・（小野小町）
				むすぶ手の滴ににごる・・・（紀貫之）
				春の夜の夢のうき橋・・・（藤原定家）
				道のべに清水ながるる・・・（西行法師）
				さびしさはその色としも・・・（寂蓮法師）
				玉の緒よ絶えなばたえね・・・（式子内親王）
		5	127	【扉】しづかなる力満ちゆき蝮蛎とぶ（加藤楸邨）
		6	147	【扉】海に出て木枯帰るところなし（山口誓子）
		7	175	【扉】青空に触れし枝より梅ひらく（片山由美子）
		資料編	272～274	あしひきの山のしづくに・・・（天武天皇）
				思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	和歌・短歌・俳句	資料編	272～274	思ひつつ経にける年のかひやなき・・・（後鳥羽天皇）
				思ひつつ経にける年をしるべにて・・・（詠み人しらず）
	古文	4	103～106	おくのほそ道「旅立ち」「平泉」
	漢詩・漢文	4	108～110	論語「君子は和して同ぜず・・・
				論語「過ちて改めざる・・・
				論語「一言にして以つて終身・・・

24教育出版（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	読むこと	108～109	雪（三好達治）
				チューリップ（三好達治）
				信号（三好達治）
	和歌・短歌・俳句	読むこと	66～67	息が切れますとのこぎり貸してやり（川柳）
				本ぶりになつて出てゆく雨やどり（川柳）
				寝てゐても団扇のうごく親心（川柳）
				その後はこはごは翁竹を割り（川柳）
		伝統文化と言語	190～193	名月をとつてくれろと泣く子かな（小林一茶）
		巻末付録	折込	小倉百人一首（100首掲載）
	古文	読むこと	68～69	東海道中膝栗毛
			72～77	竹取物語「冒頭」「女の子の成長」「姫の昇天」
		言葉のとびら	256～259	竹取物語「蓬莱の玉の枝」
	漢詩・漢文	読むこと	80～81	矛盾
				大器晩成
				守株
				虎の威を借る狐
		伝統文化と言語		静夜思（李白）
	落語	伝統文化と言語	185～189	三方一両損（三遊亭円窓）
2年	詩	読むこと	108～109	レモン哀歌（高村光太郎）
	和歌・短歌・俳句	読むこと	44～45	やはらかに柳あをめる・・・（石川啄木）
				ふるさとの訛なつかし・・・（石川啄木）
				みちのくの母のいのちを一目みん・・・（斎藤茂吉）
				死に近き母に添寝のしんしんと・・・（斎藤茂吉）
				のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて・・・（斎藤茂吉）
				幾山河越えさり行かば寂しさの・・・（若山牧水）
				白鳥はかなしからずや空の青・・・（若山牧水）
				なにとなく君に待たるるここちして・・・（与謝野晶子）
				小百合さく小草がなかに君まてば・・・（与謝野晶子）
	古文	読むこと	60～66	平家物語「祇園精舎」「敦盛の最期」
			70～72	枕草子「春はあけぼの」「うつくしきもの」
			73～74	徒然草「仁和寺にある法師」「ある人，弓射ることを習ふに」
		言葉のとびら	258～261	平家物語「扇の的」
	漢詩・漢文	読むこと	78～79	論語「学びて時に之を習ふ・・・
				論語「徳は孤ならず・・・
				論語「己の欲せざる所・・・
	口上	伝統文化と言語	195～196	外郎売り
3年	詩	読むこと	100～101	初恋（島崎藤村）
		言葉のとびら	244～245	月夜の浜辺（中原中也）
	和歌・短歌・俳句	読むこと	42～43	春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）
				赤い椿白い椿と落ちにけり（河東碧梧桐）
				ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな（村上鬼城）
				ひつぱれる糸まつすぐや甲虫（高野素十）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				噴水のしぶけり四方に風の街（石田波郷）
				啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々（水原秋櫻子）
				をりとりてはらりとおもきすすきかな（飯田蛇笏）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	和歌・短歌・俳句	読むこと	42～43	燕はやかへりて山河音もなし（加藤楸邨）
				いくたびも雪の深さを尋ねけり（正岡子規）
				風雪にたわむアンテナの声を聴く（山口誓子）
				咳の子のなぞなぞあそびきりもなや（中村汀女）
				夕立やお地蔵さんもわたしもずぶぬれ（種田山頭火）
				こんなよい月を一人で見て寝る（尾崎放哉）
		読むこと	66～71	田子の浦ゆうち出でてみれば・・・（山部赤人）
				春過ぎて夏来たるらし・・・（持統天皇）
				熟田津に船乗りせむと・・・（額田王）
				新しき年の初めの・・・（大伴家持）
				多摩川にさらす手作り・・・（東歌）
				防人に行くはたが背と・・・（防人の歌）
				瓜食めば子ども思ほゆ・・・（山上憶良）
				銀も金も玉も・・・（山上憶良）
				人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				思いつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				駒とめて袖うちはらふ・・・（藤原定家）
				道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
		伝統文化と言語	192～195	我が里に大雪降れり・・・（天武天皇）
				我が岡のおかみに言ひて・・・（藤原夫人）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）
				「寒いね」と話しかければ・・・（俵万智）
				夏と秋と行きかふ空の・・・（凡河内躬恒）
				秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				死屍いくつうち起こし見て・・・（竹山広）
				大き骨は先生ならむ・・・（正田篠枝）
	古文	読むこと	60～64	おくのほそ道「旅立ち」「平泉」「立石寺」
		言葉のとびら	278～279	伊勢物語「冒頭」
				古今和歌集仮名序
				土佐日記「冒頭」
				源氏物語「冒頭」
				方丈記「冒頭」
	漢詩・漢文	読むこと	74～76	黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る（李白）
				春望（杜甫）
	狂言	伝統文化と言語	189～191	しびり

24学校図書（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	4　時を超えて	192	【扉】貝殻（新美南吉）
	古文	4　時を超えて	197～207	竹取物語「冒頭」「姫の昇天」
			210～215	宇治拾遺物語「猟師，仏を射ること」
	漢詩・漢文	4　時を超えて	220～222	五十歩百歩
			223～224	矛盾
2年	詩	4　時の中で	204	【扉】少年（三好達治）
	和歌・短歌・俳句	2　命の交差	70～74	「この味がいいね」と・・・（俵万智）
				くれなゐの二尺伸びたる・・・（正岡子規）
				秋草の直立つ中に・・・（道浦母都子）
				振りむけばなくなりさうな・・・（河野裕子）
				あやまたず来る冬のこと・・・（馬場あき子）
				不来方のお城の草に・・・（石川啄木）
				困らせる側に目立たず・・・（平井弘）
				観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2年	和歌・短歌・俳句	2　命の交差	70～74	わがシャツを干さん高さの・・・（寺山修司）
				たゝかひに果てにし子ゆゑ，・・・（釈迢空）
				遺棄死体数百といひ・・・（土岐善麿）
				おお！偉大なるセイギがそこに・・・（荻原裕幸）
				死に近き母に添ひ寝の・・・（斎藤茂吉）
				眠られぬ母のためわが・・・（岡井隆）
				顔よせてめぐしき額・・・（植田多喜子）
				のぼり坂のペダル踏みつつ・・・（佐佐木幸綱）
	古文	4　時の中で	206	古今和歌集　仮名序
			208～217	平家物語「祇園精舎」「敦盛の最期」
			221～225	徒然物語「高名の木登り」「猫また」「序段」
	漢詩・漢文	4　時の中で	227～230	論語「吾十有五にして・・・
				論語「学んで思はざれば・・・
				論語「由，女に之を知るを誨へんか。・・・
				論語「一言にして以て身を終ふるまで・・・
3年	詩	2　命の共鳴	87	存在（山之口貘）
		4　今に向かって	194	【扉】消えゆく虫（室生犀星）
	和歌・短歌・俳句	2　命の共鳴	82～85	春風や闘志いだきて丘に立つ（高浜虚子）
				滝落ちて群青世界とどろけり（水原秋桜子）
				分け入つても分け入つても青い山（種田山頭火）
				つきぬけて天上の紺曼珠沙華（山口誓子）
				芋の露連山影を正しうす（飯田蛇笏）
				この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉（三橋鷹女）
				鮟鱇の骨まで凍ててぶちきらる（加藤楸邨）
				冬蜂の死にどころなく歩きけり（村上鬼城）
				木の揺れが魚に移れり半夏生（大木あまり）
				万緑の中や吾子の歯生え初むる（中村草田男）
				子の髪の風に流るる五月来ぬ（大野林火）
				きみ嫁けり遠き一つの訃に似たり（高柳重信）
				逢ひに行く開襟の背に風溜めて（草間時彦）
				捕虜冷えぬ五体の火種皆絶えて（鈴木ゆすら）
				戦歿の友のみ若し霜柱（三橋敏雄）
		4　今に向かって	196～201	あいみてののちの心の・・・（俵万智）
				逢ひ見ての後の心に・・・（藤原敦忠）
				春過ぎて夏きたるらし・・・（持統天皇）
				磐代の浜松が枝を・・・（有馬皇子）
				東の野に炎の・・・（柿本人麻呂）
				天地の　分かれし時ゆ・・・（山部赤人）
				田子の浦ゆうちいでて見れば・・・（山部赤人）
				防人に行くはたが背と・・・（防人の妻）
				春の野に霞たなびき・・・（大伴家持）
				ひさかたのひかりのどけき・・・（紀友則）
				秋来ぬとめにはさやかに・・・（藤原敏行）
				むすぶ手のしづくににごる・・・（紀貫之）
				思ひつつ寝ればや人の・・・（小野小町）
				思ひあまりそなたの空を・・・（藤原俊成）
				夕立の雲もとまらぬ・・・（式子内親王）
				心なき身にもあはれは・・・（西行法師）
				駒とめて袖打ち払ふ・・・（藤原定家）
			222	閑かさや岩にしみ入る蟬の声（松尾芭蕉）
				五月雨をあつめて早し最上川（松尾芭蕉）
				荒海や佐渡によこはふ天の河（松尾芭蕉）
				蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ（松尾芭蕉）
	古文	4　今に向かって	204～208	枕草子「春はあけぼの」「うつくしきもの」「香炉峰の雪」
		4　今に向かって	216～221	おくのほそ道「旅立ち」「平泉」

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	漢詩・漢文	4　今に向かって	210～214	春望（杜甫） 元二の安西に使ひするを送る（王維） 静夜の思ひ（李白）

24三省堂（中）

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
1年	詩	（学び）言語文化編	32～33	故郷（高野辰之） 風景　純銀もざいく（山村暮鳥） 茶摘み（文部省唱歌）
	和歌・短歌・俳句	言語文化にふれる	16～17	春過ぎて夏来たるらし・・・（持統天皇） 人はいさ心も知らず・・・（紀貫之） 世の中に絶えて桜の・・・（在原業平） 行く春や鳥啼き魚の目はなみだ（松尾芭蕉） 春の海ひねもすのたりのたりかな（与謝蕪村） めでたさもちう位なりおらが春（小林一茶） 若鮎の二手になりて上りけり（正岡子規）
		（学び）巻末折込	折込	小倉百人一首全首
	古文	言語文化にふれる	18	枕草子「春はあけぼの」 徒然草「序段」
			19	平家物語「祇園精舎」
		言語文化にふれる	24～28	竹取物語「冒頭」「姫の昇天」
	漢詩・漢文	言語文化にふれる	20～21	春暁（孟浩然） 論語「吾，十有五にして学に志す。・・・
		さまざまな見方・考え方を知る	165	矛盾
		（学び）言語文化編	35	早に白亭城を発す（李白）
	落語	（学び）言語文化編	70～75	初天神（川端誠）
2年	詩	さまざまな見方・考え方を知る	180～181	大阿蘇（三好達治）
		（学び）言語文化編	33	冬が来た（高村光太郎）
	和歌・短歌・俳句	判断して説明する	98～101	不来方のお城の草に・・・（石川啄木） 草わかば色鉛筆の・・・（北原白秋） 葛の花踏みしだかれて・・・（釈迢空） つばくらめ空飛びわれは・・・（馬場あき子） 噴水が輝きながら・・・（佐佐木幸綱） 「寒いね」と話しかければ・・・（俵万智） 〈生まれたらそこがふるさと〉・・・（李正子） 観覧車回れよ回れ・・・（栗木京子） シャボンまみれの猫が逃げ出す・・・（穂村弘） 海恋し潮の遠鳴りかぞへては・・・（与謝野晶子） 列車にて遠く見ている・・・（寺山修司） 白鳥は哀しからずや・・・（若山牧水） いちはつの花咲きいでて・・・（正岡子規） みちのくの母のいのちを・・・（斎藤茂吉）
	古文	言語文化を楽しむ	14～15	枕草子「うつくしきもの」「五月ばかりなどに」
			16～18	徒然草「仁和寺にある法師」「ある人，弓射ることを習ふに」
		さまざまな見方・考え方を知る	170～177	平家物語「祇園精舎」「敦盛の最期」
		（学び）巻末折込	折込	古事記「冒頭」 万葉集「冒頭」 竹取物語「冒頭」 伊勢物語「冒頭」 古今和歌集仮名序 土佐日記「冒頭」 蜻蛉日記「冒頭」

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
2年	古文	(学び)巻末折込	折込	枕草子「冒頭」
				源氏物語「冒頭」
				和泉式部日記「冒頭」
				更級日記「冒頭」
				堤中納言物語「冒頭」
				大鏡「冒頭」
				今昔物語集「冒頭」
				新古今和歌集序
				方丈記「冒頭」
				平家物語「冒頭」
				宇治拾遺物語「冒頭」
				徒然草「冒頭」
				義経記「冒頭」
				風姿花伝「冒頭」
				おくのほそ道「冒頭」
				曾根崎心中「冒頭」
				東海道中膝栗毛「冒頭」
				南総里見八犬伝「冒頭」
	漢詩・漢文	言語文化を楽しむ	20～24	黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る(李白)
				春望(杜甫)
				絶句(杜甫)
		(学び)言語文化編	35	鹿柴(王維)
	狂言	(学び)言語文化編	72～77	柿山伏
3年	詩	さまざまな見方・考え方を知る	148～149	初恋(島崎藤村)
		(学び)言語文化編	32～33	小景異情(室生犀星)
				月夜の浜辺(中原中也)
	和歌・短歌・俳句	判断して説明する	84～87	赤い椿白い椿と落ちにけり(河東碧梧桐)
				バスを待ち大路の春をうたがはず(石田波郷)
				菜の花がしあはせさうに黄色して(細見綾子)
				桑の葉の照るに堪へゆく帰省かな(水原秋桜子)
				万緑の中や吾子の歯生え初むる(中村草田男)
				谺して山ほととぎすほしいまま(杉田久女)
				芋の露連山影を正しうす(飯田蛇笏)
				星空へ店より林檎あふれをり(橋本多佳子)
				しづかなる力満ちゆき蝮蛎とぶ(加藤楸邨)
				入れものが無い両手で受ける(尾崎放哉)
				分け入つても分け入つても青い山(種田山頭火)
				蔦青々と甲子園開幕す(黛まどか)
				大根引大根で道を教へけり(小林一茶)
				冬蜂の死にどころなく歩きけり(村上鬼城)
				咳の子のなぞなぞあそびきりもなや(中村汀女)
				さみだれや大河を前に家二軒(与謝蕪村)
				鶏頭の十四五本もありぬべし(正岡子規)
				遠山に日の当りたる枯野かな(高浜虚子)
				咳をしてもひとり(尾崎放哉)
				菫ほどな小さき人に生れたし(夏目漱石)
				暗闇の筧をつたふ蛍かな(森川許六)
				蛍獲て少年の指みどりなり(山口誓子)
				じゃんけんで負けて蛍に生まれたの(池田澄子)
		さまざまな見方・考え方を知る	141～144	君待つと吾が恋ひをれば・・・(額田王)
				近江の海夕波千鳥・・・(柿本人麻呂)
				あしひきの山のしづくに・・・(大津皇子)
				我を待つと君が濡れけむ・・・(石川郎女)
				銀も金も玉も・・・(山上憶良)

学年	ジャンル	単元名	ページ	作品名
3年	和歌・短歌・俳句	さまざまな見方・考え方を知る	141～144	天地の分かれし時ゆ・・・（山部赤人）
				田子の浦ゆうち出でて見れば・・・（山部赤人）
				新しき年の始めの・・・（大伴家持）
				世の中に絶えて桜の・・・（在原業平）
				人はいさ心も知らず・・・（紀貫之）
				秋来ぬと目にはさやかに・・・（藤原敏行）
				花の色は移りにけりな・・・（小野小町）
				花さそふ比良の山風・・・（宮内卿）
				道の辺に清水流るる・・・（西行法師）
				駒とめて袖うちはらふ・・・（藤原定家）
				玉の緒よ絶えなば絶えね・・・（式子内親王）
	古文	言語文化に親しむ	14～17	おくのほそ道「旅立ち」「平泉」
	漢詩・漢文	言語文化に親しむ	20～21	書経「備へ有れば，患ひ無し。」
				漢書「百聞は一見に如かず。」
				後漢書「虎穴に入らずんば，虎児を得ず。」
				十八史略「寧ろ鶏口と為るとも，牛後と為る無かれ。」
				史記「先んずれば即ち人を制し，・・・
				論語「学びて時にこれを習ふ、・・・
		（学び）言語文化編	35	江南の春（杜牧）

※（学び）は，別冊教科書，「学びを広げる」

◇◆◇　執筆者一覧　◇◆◇

河添　房江
（東京学芸大学教育学部・教授）

古屋　明子
（東京都立石神井高等学校・主幹教諭）

森　　顕子
（東京学芸大学附属竹早中学校・教諭）

小山　進治
（横浜市立高田小学校・教諭）

本橋　裕美
（一橋大学大学院言語社会研究科・博士課程）

麻生　裕貴
（東京学芸大学大学院教育学研究科・修士課程）

編集・発行

河添　房江
東京学芸大学　人文社会科学系　日本語・日本文学研究講座
〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４-１-１
TEL.042-329-7247　FAX.042-329-7247

印刷所

有限会社サンプロセス
〒207-0012　　東京都東大和市新堀1-1435-29
TEL.042-561-8810（代）FAX.042-561-8813